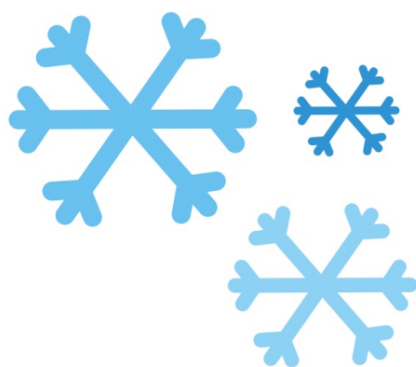


面影にふる雪

SKY BLUE



目次

(一)	
(一・一) 誕生	
(一・一) 誕生	5
(一・二) ダダ化	
(一・二) ダダ化	9
(一・三) 朋子の笑顔	
(一・三) 朋子の笑顔	15
(二)	
(二・一) 幼年期	
(二・一) 幼年期	23
(二・二) マスク	
(二・二) マスク	29
(三)	
(三・一) 小学校	
(三・一) 小学校	37
(三・二) 絵画クラブ	
(三・二) 絵画クラブ	41
(四)	
(四・一) 中学校	
(四・一) 中学校	49
(四・二) 地獄	
(四・二) 地獄	55
(四・三) 住吉智子	
(四・三) 住吉智子	59

(五)	
(五・一) 高校、初恋	
(五・一) 高校、初恋	67
(五・二) 失恋	
(五・二) 失恋	71
(五・三) 大学、卒業	
(五・三) 大学、卒業	75
(六)	
(六・一) 自殺願望	
(六・一) 自殺願望	83
(六・二) 道玄坂美容整形外科	
(六・二) 道玄坂美容整形外科	87
(六・三) 前向き	
(六・三) 前向き	93
(七)	
(七・一) 遺伝子操作の薬物投与	
(七・一) 遺伝子操作の薬物投与	101
(七・二) 夏江の遺伝子	
(七・二) 夏江の遺伝子	107
(八)	
(八・一) 手術	
(八・一) 手術	113
(八・二) 彼岸まで	
(八・二) 彼岸まで	117
(九)	
(九・一) 新しい顔	
(九・一) 新しい顔	123
(九・二) 二の足	
(九・二) 二の足	127
(十) 熊谷	

(十) 熊谷	131
(十一) 引っ越しと就職	
(十一) 引っ越しと就職	135
(十二)	
(十二・一) レジ係	
(十二・一) レジ係	141
(十二・二) 家族団らん	
(十二・二) 家族団らん	145
(十二・三) アフターケア	
(十二・三) アフターケア	149
(十二・四) 初雪	
(十二・四) 初雪	153
(十三)	
(十三・一) 二十四歳	
(十三・一) 二十四歳	159
(十三・二) 御稜威ヶ原教会	
(十三・二) 御稜威ヶ原教会	163
(十三・三) 二度目の冬	
(十三・三) 二度目の冬	167
(十四)	
(十四・一) 出会い	
(十四・一) 出会い	173
(十四・二) 不思議な面影	
(十四・二) 不思議な面影	177
(十五)	
(十五・一) 朋子、決意	
(十五・一) 朋子、決意	183
(十五・二) 三上、三日坊主	
(十五・二) 三上、三日坊主	187
(十六)	

(十六・一) チャンス到来	
(十六・一) チャンス到来	193
(十六・二) 告白	
(十六・二) 告白	197
(十七)	
(十七・一) 運命の人	
(十七・一) 運命の人	203
(十七・二) 子供	
(十七・二) 子供	209
(十八)	
(十八・一) 手紙	
(十八・一) 手紙	215
(十八・二) かみさま	
(十八・二) かみさま	219
(十八・三) 別れ	
(十八・三) 別れ	225
(十九) 面影にふる雪	
(十九) 面影にふる雪	231
(二十)	
(二十・一) 突然の電話	
(二十・一) 突然の電話	237
(二十・二) 人生は儚き夢幻	
(二十・二) 人生は儚き夢幻	241
(二十・三) 再び、運命の人	
(二十・三) 再び、運命の人	247
(二十一) 終章	
(二十一) 終章	253
終わりに	
終わりに	259

(→)

(一・一) 誕生

(一・一) 誕生

雪川朋子のお話をしようと思う。

俺は海野保雄って、しょぼい個人経営の、美容整形外科病院の医者をしている。が、そんなことは、とりあえずどうでも良くて、話を先に進めよう。

雪川朋子は、第二次世界大戦の終戦から十三年後の一九五八年五月十一日、この世に生を受けた。それは泣き出したくなる程に透き通った、ブルースカイの朝だったと言う。そんな五月の爽やかさはしかし、必ずしも朋子の未来を暗示してはいなかった。むしろ朋子の人生は、苦難と苦悩に満ちていた。なぜなら朋子の顔は、人並みには程遠く、ちょうど一九六七年一月にTV放映された『ウルトラマン』に出てくる、怪獣『ダダ星人』に似ていたからである。男ならまだしも、女として生まれた朋子にとって、それは残酷なことに違いなかった。

雪川家は、東京都品川区の公営住宅に居を構え、朋子の父、健一郎は港区にある電機メーカー『沖電気』に勤務するサラリーマン、当時二十八歳。母の夏江は同い年で、同会社の元女子社員だった。つまり二人は職場結婚で、夏江は現在専業主婦である。

朋子は二人の間に生まれた、初めての子どもだった。それだけに、健一郎と夏江の喜びも一入(ひとしお)だった。しかし生まれて来た朋子の顔を目にした瞬間、両親は勿論のこと、助産師たちも息を飲んだ。歓喜の声は跡形もなく消え、皆沈黙したまま、お互いを見つめ合った。その時点ですら既に、ダダ顔という朋子の顔の特徴は、現れていたのである。

異様に大きく、多少充血した赤いふたつの瞳。不健康に白く、ソバカスだらけの肌。耳元まで裂けたと言うか、伸びた分厚い唇。そして大きく角張った顎は肩まで及び、顔全体のシルエットは円錐形である。

「何だ、この子は。これが人間の、子どもなのか」

それが、その場にいた総ての者の、偽らざる心境だった。にも関わらず親である健一郎、夏江を始め、出産の場となった品川区立奥田病院の産科、小児科の医師たちが、なぜ何も手を打たなかったのか？ その理由は、朋子には分からない。ただ時代的に当時まだ、日本の医学、特に整形技術に於いて、対応には限界があったとも考えられるのである。

出産前の検査は特にしていなかったが、産まれるや元気に産声を上げた。顔の見た目を除けば、他には全く異状は見られず、健康そのものだった。それに朋子の顔の症状は余りにも特異であり、原因も分からず、従って対処法もなかった。加えて症状は顔全体に及んでいる為、手術するにしてもリスクが大きく、その割に効果は、余り期待出来な

いにはあるまいか……。当時の関係者がそう判断したとしても、おかしくはなかっただろう。

では、当の健一郎と夏江はどうやって、我が愛しの娘、朋子の現実を受け入れたのか？それは過酷な、痛みであったに違いない。

「あなた」

「うん……」

何かの間違いであってほしいと、願った望みは叶わず、失意のまま奥田病院を退院。朋子連れ、自宅に戻った健一郎と夏江。

ベビーベッドで寝かせた、天使とはとても形容し難い朋子。その寝顔を見つめるふたりの胸には、この子の将来への不安と恐れ、心配しかなかった。

「これから、どうしよう」

「どうしよう、って言ったって」

少し間を置いて、夏江が再び、健一郎に問う。

「もしも産む前に分かっていたら、わたしたち、産まなかったかしら」

すると健一郎は、即座に答えた。

「子どもの為に、そうしていたと、思う」

しかし心の内では、夏江を責めていた。

今更そんなこと言ったって、仕方ないじゃないか。この子はもう現実に、こうして生まれて来た訳なんだから。ぼくたちはもう、前を向いて、これからのことを考えるしかないのだ。

そう言いたかったのだが「じゃ、これからの為に、何か良い考えでもあるの？」などと問われそうで、健一郎は、口をつぐむしかなかった。

(一・二) ダダ化

(一・二) ダダ化

日を経る毎に、朋子の顔はダダ化してゆき、三ヶ月が過ぎた。朋子は順調に発育し、「あー」とか「うー」とか声を発するようになった。それは確かに可愛い女の子のそれであったから、顔とのギャップが、何とも痛々しくたまらなかった。

健康診断と精密検査に、朋子を奥田病院に連れてゆく。結果は問題なし。生活に支障をきたすような障害は見付からず、健康そのものだった。これで顔の見た目さえ、人並みであったなら……。何と苛酷な運命なのか、と健一郎と夏江は、嘆かずにはいられなかった。

ふたりが悲嘆に暮れている頃、雪川家には複数の訪問客があった。慣れない育児に苦勞しているだろう。様子を見に行きかかると、生まれた当初は遠慮していたふたりの親やら友人、知人らが遊びに来たのである。健一郎たちはまだ、朋子の顔のことは伏せていた。しかし折角来たのに、孫の顔を見せない訳にもいかない。

「吃驚しないでね、父さん、母さん」

可愛い孫見たさに、遙々九州熊本から上京した健一郎の両親である。

「なんぼビックリせないかんと。はよ、朋ちゃんの顔ば見せんね」

「でもお母さん、本当にびっくりしないでね」

すまなそうに健一郎と夏江が見守る中、いざ朋子と対面した両親は、ひと目見るなり絶句した。

「大丈夫ですか、ふたりとも」

恐る恐る声を掛けた夏江に、ようやく熊本の二人は口を開いた。

「なんね、こん顔は。化けもんじゃなかとね、こら恐ろしか」

「こぎゃん子が孫て、嘘んごた。親戚には恥ずかしゅうて、見せられんたい」

余程ショックだったのかご両親、翌日にはさっさと熊本に帰ってしまった。

横浜に住む夏江の両親もまた、似たような反応だった。

「女の子なのに、不憫だねえ。これじゃ、結婚相手が見付かるかどうか？ 先々苦勞するのは、目に見えてるよ。困ったもんだ、まったく」

「産む前に、分かんなかったの？ あんたたち。あたしだったら、絶対産まないねえ。兎に角あんたたち二人で、頑張っって育てなさい」

親子の縁を切る、とまでは言わないが、丸で厄介者扱い。親たちは健一郎と夏江を冷たく突き放し、距離を置いたのだった。

それに比べて友人たちは、親身になって心配し、ふたりを励ました。

「頑張ってね。何かあったら相談して」

「朋ちゃんのこと、知り合いの医者に、聞いてみるよ」

「余力にはなれないけど、祈ってるから」

しかし具体的な解決策が見付かるでもなく、ただただみんなに、余計な心配ばかりを掛けるだけ。健一郎と夏江は申し訳なくて、罪悪感すら覚えてゆくのがあった。

平日夏江は、家の中で一日中、朋子と二人切りで過ごすのを常としていた。出来ることなら朋子をベビーカーに乗せ、公園に連れて行きたい。そう思うのだが、勇気が出なかった。朋子の顔を見られるのが怖い。もし見られて、近所の噂にでもなったら嫌。ベビーカーのフードを下げれば顔を隠せないこともないが、顔見知りに出たら、やっぱり見せない訳にはいかない。しかし家の中に閉じこもってばかりだと、それはそれで変なふうに見えるかも知れない。さて、どうしたものか？

夏江は、健一郎と共にしばらく悶々とした日々であった。が朋子の将来を思ったら、このままで良い筈がない。やがて朋子も大きくなる。嫌でも一人で、外の世界へと出てゆかねばならない時が、やって来るのだ。ならば親である自分が、先ずはしっかりしないと。世間の目を恐がってばかりいては、朋子を守ってやれることなど、到底不可能。そうだ、もっと強い人間にならなければ……。

夏江は遂に、朋子を連れて外の世界に出てゆくことを決意した。とは言っても先ずはベビーカーのフードを下げ、恐る恐る近くの北品川公園へと向かった。案の定そこには、同じ公営住宅やご近所の主婦連中が、子供連れでたむろしていた。

「あーら、雪川さんの奥様じゃない。お珍しいこと」

逃げ出したい気持ちを奮い立たせ、夏江はにこやかに返した。

「娘の朋子です。今ちょっと寝てまして、フード越しで、ごめんなさい」

フードを下げたまま見せまいとしたが、朋子のベビーカーの周りには、既に大勢の主婦が集まっていた。

「うわあ、わたしにも見せて、朋子ちゃん」

「わたしだって、まだ見てないわ」

「雪川さんのお嬢さんなら、さぞ、可愛い女の子なんでしょうね？」

朋子を見たいというリクエストに促され、仕方なく夏江は腹を括った。正に清水の舞台から飛び降りる、そんな心境である。

どうせ、いつかは見せるんだから……。

夏江は恐る恐る、ベビーカーのフードを上げた。朋子は目を瞑り、すやすやと眠っている最中。みんなの視線が、朋子へと痛い程に注がれてゆく。

ごめんね、朋子……。

朋子を晒し者にしたような気がして、夏江は込み上げる涙を、懸命に堪えた。

「それじゃ、この辺で急ぎますので」

吃驚、また啞然として沈黙する主婦たちを置いて、夏江はさっさとベビーカーを押し、公園から立ち去った。

以後夏江は朋子を連れて、外へ出られるようにはなった。が同時に病的に、近所の噂

を気にするようになってしまった。

「ねえ見た？ 雪川さんとの、お嬢さんの顔」

「見た、見た！」

「お面じゃないわよね、あの顔？ 素顔なんでしょ？ もう吃驚しちゃったわ、わたし」

「吃驚する位ならいいけど、わたしなんか恐かったわ。うちの息子、思わず泣き出しちゃって」

などと、今や町内は、朋子の顔の話題で持ち切りらしい……。そんな被害妄想に、夏江は取り憑かれた。

こうして雪川夫婦は常にビクビク緊張しながら、外出せねばならなかった。ふたりは世間の目との、孤独な闘いに疲弊し、憔悴した。

(一・三) 朋子の笑顔

(一・三) 朋子の笑顔

一年が過ぎ、朋子は無事一歳を迎えた。おしゃべりも、歩くことも出来るようになり、発育は順調そのものだった。ただ顔だけは、ダダ化が進んでおり、万に一つも収まる気配はない。

「やっぱり、変わらないものね」

「そうだなあ」

健一郎たちの嘆きも、変わらなかった。

奥田病院の院長奥田菊子は、そんな二人を親身になって気に掛けてくれた。彼女の紹介で何軒か整形外科の病院を、朋子を連れて訪ねたりもした。しかし朋子の顔を見るなり、医師たちは、一様にかぶりを振って手術は困難、或いは手術しても、効果は期待できない旨の返答をするばかりだった。

「でもやっぱり、整形しかないのかな？」

「そうね。やっぱり、それしかないわよね」

病院から帰宅して、改めて朋子の寝顔を見つめる、健一郎と夏江のふたり。幾らダダ顔とは言っても、娘は娘。こうして一年間一緒に生きて来たが、一日として朋子の顔を見ない日はなかった。笑い声はすれど無表情なままのその顔も、今では可愛く思え、いとおしい位のふたりだった。

それだけに、朋子の将来を憂い、悲観した。どれだけ苦難の人生に、なるのだろうか？ どれ程の苦しみを、この子は受けなければならないのだろうか？ 自分たちが身を挺して、守って上げられるなら、いいのだけれど。それも限界がある。このまま、この子に苦勞をさせてよいのか？ 本当に茨の道を、歩ませていいのだろうか？

ふたりは悩んだ。

「ねえ、あなた。本当に朋子を育て上げる、自信ある？」

「そんな自信なんか、あるわけないだろ。でも育てる以外に、ないじゃないか」

「このまま大きくなって、自分の顔に気付いた時、この子やっぱり、わたしたちを恨むわよね？」

「ああ、そうだなあ。女の子だし」

「こんなに一生懸命に育てても、本人には恨まれるのね。わたしたちって、何なんだろう？ やっぱり、朋子なんか産むんじゃなかった。産んじゃいけなかったのよ、わたしたち」

「それは、言わない約束だろ、夏江」

沈黙、ため息。幾日も幾夜も、気持ちをぶつけ合うふたりだった。

「そんなに言うのなら、夏江。もう、朋子を育てるの、止めようか」

「えっ？」

或る晩、仕事から帰宅した健一郎が、ぼつりと零した。近頃仕事のトラブル続きで、健一郎は疲労が蓄積し、気が滅入っていた。

「急にどうしたの、あなた」

夏江は、健一郎を見つめ返した。

「だから……」

「止められるものなら、止めたいわよ。でもどうやって？ 施設か何処かに、預けるつもり？ 預かってくれる所なんか、あるのかしら」

「そうじゃなくて、だから……。他の人に迷惑なんか、掛けられないだろ。それより」

「それより、何よ」

尋ねる夏江に、健一郎は面倒臭そうに、荒々しく答えた。

「だから三人。みんなで一緒に、死ぬんだよ」

えっ、死ぬ……。

夏江は余りにも吃驚して、ただじっと健一郎を、見つめるのみだった。

そんなバカなこと、言わないで。などと、健一郎はなじられるかと思ったが、意外にも夏江は穏やかに答えた。

「そうね。あなたがそう言うのなら、いいわよ。みんなで一緒に、死のう」

「えっ」

今度は健一郎の方が驚いて、夏江を見つめ返した。そのまま黙り込んだふたり。それからぼつりと、夏江。

「もう疲れちゃった、わたし。ね、そうしよう。その方が、朋子のためにも、絶対いいから」

「夏江」

唇を噛み締めながら、夏江はベッドの上の朋子を見つめた。

「ごめんね、朋ちゃん。もうパパもママも、限界なの。ふたりとも、これ以上頑張れないのよ。だから許してね、朋ちゃん。これからみんなで一緒に、天国へ行きましょう」

すやすやと眠る朋子の頬に、夏江の涙の滴がぼたっと零れ落ちた。すると吃驚したように、朋子が目を覚ました。

泣き出すのではないかと、夏江は身構えたが、予想に反して朋子は泣かなかった。それどころか、朋子は笑った。確かににこっと、笑みを浮かべたのである。それが健一郎と夏江には、天使の微笑みに見えた。そして朋子は嬉しそうに、健一郎と夏江の顔を見上げていたのである。

「あなた、朋ちゃんが笑ってる」

「ほんとだ」

死のう、という気持ちは吹っ飛び、健一郎と夏江はただ泣きながら、朋子の笑顔を見つめ返すのみであった。

ただしこの時、健一郎と夏江は決意する。もう子どもは、つくるまいと。でなければ、もしかしたら次の子も、朋子と同じ症状で生まれて来るかも知れない。否そうでなかったとしても、朋子という姉の存在によって、その子にも、いろいろと苦勞をさせてしま

うだろう。だったら始めから、産まない方が良い。子どもは朋子ひとりだけ、朋子だけを大事に育てよう。そう誓い合うふたりであった。

(\rightleftarrows)

(二·一) 幼年期

(二・一) 幼年期

さて、物心ついてからの、朋子の話題に移ろう。

初めて朋子の顔を目にした者は、皆一様に驚き、ショックを受けた。しかし見慣れて来ると、そのショックは和らぎ、朋子という子の顔はそういうものなのだと、誰も受け止められるようになるのだった。

事実、一家心中を回避した後、もう世間の目を気にするのは止めようと腹を括った夏江は、朋子を北品川公園に連れてゆくのを、日課とした。すると朋子の顔を日常的に目にするようになった近所の主婦たちは、段々と抵抗を感じなくなっていく。

それどころか「朋ちゃん、元気」などと気軽に話し掛けたり、手を振ったりするようにもなった。朋子は朋子で、例の朋子スマイルでみんなに応える。主婦連中は夏江とも、育児談議などするようにまでなったのである。

だから朋子の顔に慣れていない者だけが、気味悪がったり、白い目で見たりする。それだけのことなのだ。

ああ、良かった。

健一郎と夏江は安堵し、精神的にも余裕が出て来た。しかしその矢先、悲劇は起こった。

朋子が三歳を迎えた、五月の或る晩のことである。ひとりの人物が、朋子の顔に吃驚し、気味悪がった。そしてその人物とは誰であろう、当の朋子自身であったのである。

その時朋子は、夏江と入浴中だった。鏡に映った我が顔が、ふと朋子は気になった。

「どうしたの、朋ちゃん」

じっと黙ったまま、鏡の中の自分の顔と睨めっこする朋子を、湯船の中の夏江が呼んだ。しかしそれにも反応せず、しばらくそのままの朋子は、そして突然、大声で泣き出した。驚いた夏江は湯船から飛び出し、朋子をやさしく抱き締めた。

「朋子、どうしたの？ なぜ、泣いてるの？」

ところがそれに対する朋子の答えに、夏江は愕然とした。

「お、ば、け」

「えっ」

「おばけが、いる」

「何処に」

風呂場を見回しても、そんな気配などない。すると首を傾げる夏江に、朋子は、鏡に映る自分の顔を指差したのである。

「ほら、おばけ！」

「と、朋ちゃん」

違う、それはあなたの顔なのよ。そう告げたかったが何も言えず、夏江は黙って、朋子を抱き締めるのみであった。

この時からである。朋子の顔から、無邪気な笑顔が、消えてしまったのは……。

四歳。朋子は自宅から一番近い、区立の品川坂之上幼稚園に通い始めた。入園前に、園長の園田一夫との面談を行った。園田は初めて見た朋子の顔にショックを受けたが、それを理由に入園を拒みはしなかった。ただ園児たちとの集団生活に適応出来るのか、園田はそれを心配した。

しかし朋子は健康面に問題はなく、かつ礼儀正しく大人しかった。泣き出したり大声で騒ぐこともなかったし、何より他人にやさしく、思いやりに満ちた子でもあった。顔のことが、どれ程影響していたかは定かではないが、いつしか朋子は、そのような大人びた子どもに成長していたのである。

夏江はその点を、園田にアピールした。朋子自身もしっかりした受け答えで、園田の不安を軽減させた。

「朋子さんは、幼稚園に入りたいですか？」

「はい」

「幼稚園に入ったら、何がしたいですか？」

「たくさん、お勉強がしたいです」

「お勉強以外では」

「お友達が、いっぱい欲しいです」

「朋子さん、そのために頑張れますか」

「わたし、がんばります」

朋子は元気に頷いた。

こうして、幼稚園生活がスタートした。

品川坂之上幼稚園は自宅から北品川公園を通り抜け、徒歩で十五分。夏江と一緒に歩いて、送迎した。

朋子は入園式の時から、既に注目を集めていた。式は何事もなく終わったが、翌日早速騒ぎが起こった。と言うのも園児たちが、朋子の顔を恐がったからである。

四歳児のクラスは五クラスあり、朋子のいる梅組は二十人いて、そのうち半分が女子。その全員が、朋子を恐がった。

当時の朋子は出っ張った両顎を、伸ばした髪で隠していた。黒髪故に、正にダダ顔である。しかしそれだけでは、幼児たちから恐怖を取り除くには不十分だったようである。

朋子を恐れる女子が逃げたり、泣き出したり。それに釣られて、他の子たちも騒ぐ。他の組にも影響が出る。恐がられることに心折れながらも、朋子は必死に耐えた。そしてお絵描き、工作、文字の読み書きなどに、黙々と励んだのだった。

朋子には芸術的才能があるらしく、他の子たちに比べ、絵、工作、音楽の楽器演奏や歌が上手かった。また運動神経も優れていて、体操の時間の飛び箱、鉄棒、縄跳びなど、器用にこなした。

しかしランチの後の休憩時間が、朋子にとっては一番憂鬱でならなかった。他の子どもたちは皆、誰かしら行動を共にしてくれるグループなりパートナーがいたが、朋子はいつも独りぼっち。朋子だけがポツンと、孤立していたからである。

(二・二) マスク

(二・二) マスク

朋子だけが、いつも独り。その中でも朋子は、自分なりの慰めを見出した。園内には花壇があったし、兎小屋があった。朋子は季節の草花を愛で、兎を世話した。花や兎が、朋子を恐れる筈もない。風に揺れる花はにこにこ朋子に笑い掛けているようであり、兎たちは他の誰より朋子になつた。

しかし六月。梅雨入りの頃、朋子に関して園児の親たちが、集団で園にクレームを上げた。

「うちの子が、怯えて困っています」

「あのお子さんを、退園させて下さい」

応対した園田は、朋子をかばった。

「けれど雪川朋子さんは、大変お行儀が良く、草花や兎の面倒をみる、とても心の優しい子です。他の園児さんたちには、控え目に接していらっしゃいますが……」

しかし親たちは、後には引かなかった。

「それは分かっています。でもうちの子は家にいる時、あの子の顔を思い出すと、怖いと言って泣き出すんですよ」

「うちの子もそうです。あの子の顔が浮かんで来て怖いからと、一人でトイレにも行けなくなりました」

「もし子どもたちの成長に悪影響が出たら、責任を取ってもらいますよ。よろしいですか？」

父兄たちに詰め寄られ、流石の園田も針のむしろ状態。

「分かりました、分かりました。どうか皆さん、落ち着いて下さい。では今度、雪川さんのご両親に話してみます」

早速幼稚園に、健一郎と夏江が呼ばれた。

「どうも親御さん方、朋子さんから受けたショックが、園児たちの心的外傷になるのではないかと、心配なさせて頂くようで。わたしとしては、少々気にし過ぎじゃないかと思うんですがね。何しろ父兄のみなさん、毎日のように来園されまして……」

「ご迷惑お掛けして、すみません」

まずは頭を下げる夏江。

「心的外傷、ですか」

ため息を零す健一郎。園田の望みは、分かっている。朋子に幼稚園を、辞めて欲しいのだ。朋子独りのために、幼稚園全体の秩序が乱れてはかなわない。誰だって、そう思うだろう。

「分かりました。朋子の気持ちを、確かめてみます」

朋子を園長室に呼び出し、夏江が簡単に事情を説明した。そして問い掛けた。

「ね、どうしよっか、朋ちゃん。幼稚園、もう辞めちゃう？」

「おいおい、夏江」

急かすような夏江を、健一郎が咎めた。

「朋子、急がなくていいからね。ゆっくり考えて、決めればいいんだから」

ところが朋子は即答した。自分の為に親や園長先生が苦労していると、分かったからである。

「朋子、辞めてもいいよ」

寂しげに俯く朋子を、三人の大人は見つめた。

「朋子さん。あなたは本当に、心のやさしい人ですね。わたしは、あなたが大好きですよ」

泣きそうな園田に向かって、朋子はにっこりと微笑んでみせた。微笑んで……。そう、その時確かに、朋子は笑ったのだった。

「園長先生、ありがとうございます。朋子も、先生のこと、大好き」

それは三歳の時に自分の顔を恐がって以来、ずっと失っていた、久方振りの朋子の笑顔であった。

朋子の健気な言葉と笑顔に、園田は思わず男泣きした。もう一度、父兄を説得してみよう。園田は心に誓った。

「皆様、確かに大切なご子息の心に、心的外傷が残るやも知れません。しかし今、雪川朋子さんが幼稚園を去ることになったら、皆様のお子様方がやがて大人になられ、そして振り返った時に、どう思われるでしょう。もしかしたら自分たちが、彼女を幼稚園から追い出してしまったのではないか。そんな後悔の念に、苛まれはしないでしょうか。朋子さんの顔を見れば、誰しもショックを受けるでしょう。正直、わたしもそうでした。でも彼女は、人に負けないやさしさと温かな心を持っています。それが証拠に、皆様のご意見をお伝えしました時、朋子さんは即座に、幼稚園を辞める、と自ら申し出たのであります」

ざわめく父兄たち。

「園長先生のおっしゃることも分かります。しかし現実として今、子どもたちは怯えているのです」

「確かに、みんな、まだ幼い子どもなのでですから」

「そうだ！」

「どうなさいました？」

「はい、先生。どうでしょう？ 子どもたちは、あの大きな唇が一番恐いと申します。ですから、もし可能でしたら、マスクか何か、掛けてもらって……」

「マスク、ですか？」

「はい。勿論顔全体でなくて、風邪を引いた時に掛ける、あの白いマスクですよ」

「ああ、あれですね。ああ、成る程ねえ。じゃ、雪川さん家族と相談してみます」

その旨を伝え聞いた健一郎と夏江は、なぜ朋子だけ、と屈辱と不満を覚えた。が当の

本人朋子は、けろっとした顔で頷いてみせた。

「いいよ、朋子。マスクして、幼稚園に行く」

よし、決まった。園田は安堵した。

なぜ朋子はそうまでして、幼稚園に行きたかったのか。それは朋子が、梅組のみんなのことが、大好きだったからである。

翌日から朋子は大人サイズの白いマスクを掛け、嬉々として幼稚園に通い出した。これでもうみんなから、嫌われずに済む。そう思えたことが、嬉しかったからである。こうしてマスクを着用する、朋子の日常生活が始まった。

年長組になる頃には、子供たちも朋子の顔に慣れたのか、もう朋子の顔を恐がる子はいなかった。それどころか朋子に話し掛けたり、一緒に遊ぶ子さえ出て来た。そして卒園式では朋子との別れを惜しんで、みんなが泣いた。こうして朋子は無事、品川坂之上幼稚園に通い続け、そして見事、卒園したのだった。

($\vec{\equiv}$)

(三·一) 小学校

(三・一) 小学校

さて小学校である。

朋子は自宅から歩いて十分の、公立品川白山小学校に入学した。幼稚園時代に引き続き、小学校では入学式の時からマスクを着用した。校長の坂下茂、担任の緒方光代と話し合って、そう決めたのである。

それでも矢張り朋子の顔は注目を集め、クラスの生徒は勿論のこと、学校全体にまで直ぐに知れ渡った。マスクでは隠せない赤く充血した大きな瞳、白い肌に広がるソバカス。それに大人用の白いマスク自体が目立った。当時はまだ風邪以外でマスクを掛けるなどという習慣はなかった時代であるから、無理もない。恐らくは、顔を隠す為なのだろう。では一体、あのマスクの下はどうなっているのか？ 誰もが好奇の目を向けずには、いられなかった。

一年生は九クラスあり、朋子は一年三組だった。一年生と二年生の二年間、同じクラス、同じ担任の先生と過ごす。担任の緒方は、朋子を特別扱いすることはなかった。それでも春、四月と五月。他の生徒たちも学校と勉強に慣れるのに精一杯だったせいも、朋子に関して特に表立った騒動は起きなかった。

夏が訪れ、学校はプール開きの時期を迎えた。プール詰まり水泳の授業である。さて、どうしよう。朋子の前に初の試練が訪れた。マスクをしたまま、プールに入るわけにはいかない。かと言って今更マスクは外せない。では見学するしかない、ということになる。他の生徒に不満が出なければ、という条件で、坂下校長は許可を与えた。実は密かにプールの授業を楽しみにしていた朋子だったが、ここでもぐっと堪えて受け入れた。

「雪川さんはお体の都合で、水泳の授業は見学です」

緒方は最初の水泳の授業が始まる前に、プールサイドで生徒たちに告げた。生徒の間から、特に疑問や不満の声は出なかった。みんな、恐らくマスクや顔に関する都合であるのだろうと、気を遣ったからである。しかしこれを機に、生徒たちの間で、朋子の顔が話題に上るようになった。

プールサイドでひとり見学する朋子のことを、プールの中でクラスメイトたちがひそひそ話し合う。

「二組の吉田さん、雪川さんと同じ幼稚園だったんだって」

「へえ、そうなんだ」

「幼稚園の最初の頃はまだ、雪川さんマスクしてなかったそうよ」

「じゃあ、顔知ってるのね、雪川さんの」

「うん。唇が凄く大きいんだって。だからみんな、恐がってたってよ」

「それで、あのマスクで隠してるのね」

「そうみたい」

「でもだからって、水泳休んじゃうのって変じゃない？」

「いいなあ。わたしだって、水泳の時間さぼりたいよう。だってこの水着、恰好悪いんだもん」

そんな生徒たちの声は勿論、直接朋子の耳には聴こえない。けれど陰口、あゝ自分のことを何か噂しているな、位は、プールサイドにいても、敏感に察知出来るものである。そして朋子の心は、少しずつ傷ついていった。

日を経る毎に、クラスメイトたちがどんどん仲良くなっていく中、朋子だけが孤立した。朋子に声を掛ける者は絶無で、朋子の方から話し掛ける勇気もなかった。昼食時はたとえ雨の日でも、校庭の隅でひとりぼっちで弁当を広げた。そして休憩時間も、ずっと独り。

一年が過ぎ、進級して二年生。朋子は八歳になった。そして冬、一九六七年一月のこと。TVに於いて既にウルトラマンの放映は始まっていたが、ダダ星人の登場する回が放映された。詰まり遂にダダ星人の顔が、日本中のお茶の間に流れた訳である。勿論、品川白山小学校の生徒たちも見た。

二年三組の子どもたちは、TVの前に釘付け。ブラウン管の中のダダ星人の顔を見つめながら、思うことは皆同じだった。

あっ、この星人、雪川さんに似てる！

子どもたちの事、人に仇名を付けたがるのは、いつの時代、何処の国でも同じである。ダダ星人が登場する以前の朋子は、クラスメイトたちから、陰で『化け物』と呼ばれていた。しかしダダ星人登場後、それは変わった。『ダダ』或いは『ダダ子』と呼ばれるようになり、同時に朋子へのからかいも、始まったのである。

「ダダ子ちゃん」

意地悪な男子がそう呼べば、他の子たちも釣られて笑う。辛い。何とも言えない辛さである。しかし朋子は、耐えるしかなかった。懸命に無視し、平静を装った。学校では堪え、家に帰って泣いた。もう学校になんか、行きたくない。そう思いながらも、必死で耐え、何とか春休みまで我慢した。

(三・二) 絵画クラブ

(三・二) 絵画クラブ

三年生に進級すると、クラス替えが行われた。二年間孤立し、担任の緒方とも殆ど交流のなかった朋子に、旧クラスへの未練はなかった。

朋子の新しいクラスは、三年五組。担任は野田響子という、油絵を趣味とする才色兼備な若い女性だった。彼女は情熱的な芸術家タイプで、学校内の絵画クラブを主宰し、放課後熱心に子どもたちに絵を教えていた。野田は、自分が何かと話題になる朋子を受け持つと分かった時、決して悲観的にならずポジティブに捉えた。かと言って殊更朋子を、特別扱いすることもなかった。

普段の授業での朋子は、以前と変わることなく陰で「ダダ」、「ダダ子」と呼ばれ、相変わらず孤独な少女だった。そんな朋子を、野田は絵画クラブに誘った。

「雪川さん。興味がありそうなら、放課後、クラブの様子を見においで」

朋子は素直に応じた。図工室の一番後ろから、クラブの生徒たちの姿を眺めた。その日は、花瓶に活けられた薔薇のスケッチをしていた。子どもたちはスケッチに没頭し、朋子がいることすら気付いていなかった。

「雪川さん。あなたも、ちょっと描いてみたら」

えっ。野田の問い掛けに、朋子は動揺し顔を強張らせた。しかしきらきらした瞳で、一心に筆を動かしている生徒たちの姿に感化されたのか、朋子は遂に頷いた。

「はい、先生」

「OK」

野田はにこにこしながら、最後尾の机に朋子の場所を用意し、画用紙と絵の具を与えた。朋子は緊張しながらも、一心に描き始めた。

我を忘れ、朋子は美しい薔薇の姿を描写した。それは繊細な線による正確な描写と、消えかかる虹のような淡い色彩の絵だった。

「雪川さん、上手いじゃない。にこにこ微笑んでいる薔薇たちの笑い声が、聴こえて来るみたい」

称賛の後、野田は続けた。

「確かに薔薇は美しいけれど、華は直ぐに枯れてしまうから……。わたしは世の中で一番美しいものは、人の心の美しさじゃないかって、いつも思ってるの」

朋子は黙って、野田の横顔を見つめた。

「だってどんなに時が流れても、心は枯れないでしょ。絵というのは、そんな人の心の美しさが、出るものなんじゃないか。わたしは、そう信じているの。だからこうしてわたしは、絵を描いてるわけ」

にこっと微笑む野田の顔の表情が、眩しくてならない朋子だった。わたしも、こんな素敵な大人の女性になりたい。朋子は、野田の言葉に同意するように頷いた。

「遠慮しないでいいから、またおいで」

「はい、先生」

「絵が好きな人はみんな、このクラブの仲間よ」

仲間。恥ずかしそうに頷く朋子の笑顔を、野田は美しいと思った。

以後、朋子は休むことなく、絵画クラブに通った。そして三年生、四年生の二年間を野田に見守られながら、朋子は過ごした。相変わらず生徒の中で、朋子に積極的に話し掛ける者はいなかったが、無視したり、からかう生徒もいなかった。孤独ではあったけれど、朋子にとっては楽しい穏やかな毎日だった。

であるから、五年生になったらまたクラス替えがあるけれども、朋子は再び野田のクラスになりたいと切望していた。しかしその願いは、儂くも潰えた。野田は五年生の担任になるどころか、品川白山小学校を去り、近くにある知的障害者の養護学校、品川白山学園に移動したからである。しかもこの移動は、以前から野田が希望していたことであるから、どうにも致し方なかった。

野田との別れ。この辛さは、朋子が人生で初めて味わう他人との別れの辛さであった。それでも何とか、悲しみは癒えた。しかし五年生になると野田を失った朋子にとって、教室は再び、孤独な冷たい空間に逆戻りした。大人へと一歩近付いた同級生たちの、朋子を見る眼差しは、以前にも増して厳しく冷たくなっていた。ダダ子の仇名でひそひそ陰口が囁かれ、朋子に接する時のよそよそしさも増した。野田の喪失は、品川白山小学校にとって絵画クラブの喪失でもあったから、朋子は折角得た、絵を描く楽しみも失った。

五年四組。朋子のクラスの担任東武京子は、一、二年時担任の、緒方教師に似たタイプの中年女性だった。面倒臭いことには関わり合いになりたくない、事なかれ主義に徹していた。そして新しいクラスにも慣れた、五年生の夏から冬。五年四組の教室の中では、数人の男子による、朋子へのからかいが頻繁に行われた。

「ダダ子チャーーン」

休み時間、窓側の最後部にある朋子の席の周りに集まって、彼らは大声で呼んだ。朋子は怯えながら、ひたすら下を向いて、じっと我慢した。

「あれえ、おかしいなあ。ダダ子ちゃんいるのに、返事がなーい」

そう言って、みんなで大声で笑った。担任も他のクラスメイトも皆、見て見ぬ振り。なぜなら自分がからかいの対象となるのを、恐れたからである。

だから朋子は、ひとりぼっちで耐え忍ぶしかなかった。教室という四角いジャングルの中の、孤独な戦いである。しかしその甲斐あってか、男子たちは朋子をからかうのに飽き、二学期の終わりには、遂に嫌がらせを止めてしまった。

それでも朋子がクラスの中で、特別な存在であることに変わりはない。相変わらず朋子に接近し話し掛ける生徒はおらず、誰も朋子のことを話題にしなかった。結果、朋子は孤立したまま、小学校の卒業式を迎えるに至ったのである。

小学校以外の日常生活に於いても、朋子は孤独だった。多感な少女期に於いて、朋子

は周りから見られること、そして同じ年頃の少女たちとの違いを、気にするようになった。結果、外出を厭うようになった。健一郎と夏江の誘いや励ましも効果はなく、孤独と沈鬱の中、朋子の小学生生活は、何とか終わりを告げたのである。

(四)

(四·一) 中学校

(四・一) 中学校

品川白山小学校を卒業した朋子は、同じく公立の品川出水中学校に入学した。通学は小学校より遠くなり、徒歩二十分掛かった。しかし人にじろじろ顔を見られるのが嫌だった朋子は、電車やバスよりは遥かにましであると喜んで、雨の日も風の日もてくてくと歩いて通ったのだった。自転車通学しなかったのは、タイヤをパンクさせられる等の悪戯を恐れたからである。

朋子は一年十三組。小学校同様、マスクを着用しての中学校生活だった。中学生といえば制服に身を包み、男子など体格的には既に大人に匹敵する生徒もいる。黒い詰め襟の数人に取り囲まれれば、成人でも恐怖を覚えてしまうであろう。

そんな連中によって、入学早々から朋子を標的としたいじめが始まった。中心人物は三浦幸助という男子生徒であった。

「ダダ子ちゃん、ボーイフレンドいるの？ いないんだったら、俺と付き合ってよ」

「ばーか、いるに決まってんだろ。ダダ星のプリンセス様だぞ。お前なんか、眼中になんないってよ」

教室の席順は姓名の五十音順で、朋子の座席は窓側の後ろから二番目。休み時間になる度、そこへ幸助が仲間を引き連れやって来ては、朋子をからかった。まだ学校にもクラスにも不慣れな他の生徒たちは、どうして良いか分からず、皆で見て見ぬ振り。お陰で幸助たちは、やりたい放題であった。

他のクラスの生徒たちもひと目朋子を見ようと、これまた休み時間になる度、十三組の教室前の廊下に押し寄せて来た。黒山の人だかりである。その観衆を前に、幸助たちのからかいはエスカレートするばかり。

「ダダ子ちゃん、ダダ星人もパンティはくのか？ 今日のダダ子ちゃんのパンティは、何色かしら。ちょっと見せてえ」

幸助が朋子のスカートをめくろうとする。必死に抵抗する朋子は涙目。恥ずかしさ、そして恐怖の余り「止めて」の声も出ない。「助けて」と叫んだ所で、誰も助けてくれないのは分かっている。

が、ひとり、見るに見かねて立ち上がった男子がいた。学級委員の風間時夫である。

「ねえ、きみたち。もうそれ位で止めようよ。相手は女の子なんだし」

「女の子だと」

一瞬驚いたものの、幸助たちは直ぐに反撃。風間少年を巻き込んだ朋子への意地悪は、ヒートアップするばかりだった。

「あーら、風間ちゃん、素敵。もしかして、雪川さんに惚れてんのね。やだーっ！ ぼくちゃん、妬げちゃう。口惜しい」

風間君は顔をまっ赤にして、かぶりを振った。
「そんなんじゃないけど。きみたちがあんまり……」
「今更照れんなよ、学級委員」
「ほら、もっとくっ付いて、御兩人。もっとくっ付け、こいつ」
「ヒューヒュー、我等一年十三組、最強のカップル誕生」
無理矢理風間君と朋子の体をくっ付け、はしゃぎ回る悪餓鬼ども。
「止めてくれよ、止めろってば」
「何今更、恥ずかしがってんだよ、風間。ダダ子のこと、好きなら好きでいいじゃんか。照れんなよ、色男」
「そうだ、そうだ。今ここで告白しちまえ、風間選手」
「だから、違うってば」
哀れ、真面目な風間君はとうとう涙目。朋子を救うのを諦め、朋子から離れて行った。これで朋子を助ける生徒は、誰一人いなくなった。

昼休み、朋子は小学校同様、校庭の隅でひとりで弁当を食べていた。が幸助たちは、そこへも押し寄せた。マスクを顎まで下ろして、御飯を頬張る朋子の素顔を目撃した悪童たちは、もう大騒ぎ。

「まじでダダじゃん。洒落になんねえ」
「俺、まじでこええ」
「雪川、マスク邪魔だろ。俺が取ってやるよ」
幸助は速攻で朋子の耳に手を伸ばし、マスクを剥ぎ取ってしまった。
「いや、止めて」
涙ながらに朋子は抵抗したが、その際弁当を落とした。ご飯とおかずが全て、地面に落ちてしまった。
「返してやれよ、幸助」
流石の悪ガキどもも、余りの惨めさに朋子に同情した。
「分かったよ。そんなに欲しけりゃ、返してやるよ」
弁当の中身が飛び散った地面に朋子のマスクを投げつけると、幸助たちは一目散に逃げ去っていった。

朋子は急いでマスクを掛け直したが、何人もの生徒が、朋子の素顔を目撃した。朋子は涙を堪えながら、散らばった弁当を黙って片付けるしかなかった。

その後も幸助たちのいじめは、エスカレートしていった。教室の中でも隙あらばマスクを剥がし、朋子を晒し者にした。朋子は懸命に奪われたマスクを取り返すのだが、その間ずっとクラスみんなに素顔を見られた。朋子は恥ずかしさと惨めさで、いっぱいになった。しかし幸助たちを咎める者も、教師にいじめを報告する者もいなかった。朋子が自分自身で訴えるしかなかったのだが、朋子にそんな勇氣はなく、泣き寝入りするしかなかった。

消えてなくなりたい、今すぐにでも。この四角いジャングルでしかない、教室から。逃げ出したい、死んでしまいたい……。

そんな痛々しい思いを胸に秘めながら、朋子はじっと、教室の片隅で耐え忍んだ。死にたいと真剣に思うようになったのは、まだ短い人生の中で、これが初めてのことだった。死にたい、と言うか、完全なる自己の否定。自分など、生まれて来なければ、よかったのだ。一日も早く、消え去りたい、と。

(四·二) 地獄

(四・二) 地獄

中学校での屈辱と苦悩の感情を、帰宅した朋子は、健一郎と夏江のふたりにぶつけた。それまでは、どんなにいじめられても決して学校でのトラブルを、家には持ち込まなかった朋子。しかしそれもとうとう、限界に至ったという訳である。

どうしてわたしばかり、こんなに毎日、苦しい思いをしなきゃいけないの。わたしが一体、どんな悪いことをしたの。何も悪いことなんかしてないのに、ただ生まれつきこんな醜い顔だったばかりに。わたしはこんな、地獄のような毎日を生きなきゃならない。

地獄！ そうよ。こんな顔に生まれて来たばかりに、わたしの人生は地獄そのものだわ。どうしてこんな顔に、わたし、生まれて来ちゃったの。

その怒りを、朋子は目の前の夏江にぶつけた。

「お母さん。どうしてわたしなんか、産んだのよ」

「どうしたの、朋ちゃん？ 急に」

「朋子、落ち着くんだ」

普段大人しい朋子の突然の爆発に、健一郎と夏江はうろたえるばかり。しかし遂に来るものが来たか、という思いも、ふたりの心の中にはあった。

「こんな顔じゃわたし、結婚も出来ないじゃない。わたしを好きになってくれる人なんか、世界中何処を探したって、絶対見つからないから」

朋子の目から、涙が止め処なく溢れ出した。

「朋ちゃん、何か辛いことがあったのね。話して、お父さんとお母さんに」

「話したって、わたしの気持ちなんか、誰にも分かりっこないわよ。どうして、わたしなんか産んだの。どうして産む前に、止めなかったのよ。わたしを産む前に」

「朋子」

「朋ちゃん、それは……」

言葉に詰まりながらも、丁寧に説明しようとする健一郎と夏江。しかし朋子は、聞く耳を持たない。それどころか怒りに任せ、狂ったようにふたりを責め立てるのだった。

「どうしてわたしを、殺してくれなかったのよ。こんなことになるんなら、一思いに殺して欲しかった」

「そんな、朋ちゃん」

「朋子」

泣き崩れる朋子を、ただじっと、見つめるしかないふたりだった。

この夜を境に、雪川家は夜の闇に沈んだ。朋子は学校以外への外出を一切なくなり、部屋に閉じこもった。自分の顔を世間に曝け出す眩しい太陽を憎み、部屋のカーテンは

閉め切ったまま。一年中まっ暗な夜ならどんなに良いだろうと、そんなことばかりを朋子は願った。

中学が夏休みに入っても、健一郎と夏江を責める朋子の言葉は、休むことなく続いた。

「どうして、わたしを産んだの」

「わたしなんか、さっさと殺してよ」

そんな朋子にとうとう耐え切れなくなった健一郎は、八月の或る晩、朋子にこう告げた。

「そんなに朋子が死にたいなら、みんなで一緒に死のうか」

「あなた」

朋子も夏江もぼかんとした顔で、健一郎を見つめた。

「夏江も、もういいだろ。俺、疲れちゃったよ」

すると健一郎の言葉に、夏江も頷いた。

「そうね。いいわよ、あなた。みんなと一緒になら」

驚いたのは朋子。両親の顔を交互に見つめながら、戸惑い、焦った。

「でも、今すぐという訳にはいかない。お父さんにも仕事があるから。俺が会社を辞めてから、ということで良いかな、朋子？ 業務の引継ぎに、一ヶ月は掛かるから」

朋子としても、今更後には引けない。動揺を隠しつつ、健一郎に答えた。

「いいわよ、それ位なら」

一ヶ月後ということは、二学期が始まって直ぐの頃。それ位なら、我慢出来る。朋子には、死ぬことの恐怖よりも、あの地獄から解放される喜びの方が、遥かに大きかった。

日々、一家心中のその時へと近づく雪川家は、毎日がお通夜のように沈んでいた。夏休みだというのに、朋子が外に出ることもなかった。

自室に閉じこもり切りの朋子が、唯一興味を抱いていたものは、虫に関する事だった。閉め切った部屋の中でも、外の世界の蝉時雨が聴こえて来る。蝉の幼虫が殻から出て成虫になったり、醜い毛虫がさなぎになり、やがて美しい蝶になる。そして蝉も蝶も羽根を広げ、地上から飛び立ってゆく……。朋子はその変化、現象に憧れたのである。

わたしもあんなふうに、変われたら良いのに……。

しかしそれは今は叶わぬ願い、夢物語でしかなかった。

(四・三) 住吉智子

(四・三) 住吉智子

二学期。今までのように朋子は重苦しい心を引き摺りながら、中学の門をくぐり教室へと入った。朋子にとって孤独な戦場でしかない、大きな四角いジャングルへと。

何も期待しないし、何も変わらないに決まっている。

ため息と共に席に着いた。誰とも目を合わせなかった。そして朋子は俯いて、ただ授業の開始を持つのみだった。

ところがクラスの担任安田信彦は、一人の女生徒を伴って教室に入って来た。転入生である。

「今日から皆さんと共に勉強する、住吉智子さんです」

ともこ……。

朋子は、はっとして顔を上げた。見ると住吉智子は、可憐で愛くるしい丸で人形のような少女だった。それでいて知性をも感じさせるきりっとした顔立ちは、才色兼備といったところか。

同じともこでも、わたしとは大違い……。

黒板に自らの氏名を記す智子を見つめながら、朋子には悪い予感しかなかった。漢字こそ智と朋の違いはあれど、同じともこ。なにかと比較され、からかわれるのではないか？ 戦々恐々とする朋子である。加えて席替え。運命の悪戯か、ふたりは隣同士になってしまった。ますます悪いイメージしか浮かばない。

ところがである。住吉智子は、朋子の予想外の行動を取った。朋子に、積極的に話し掛けて来たのである。明るく、フレンドリーに。転入して来たばかりだから、まだクラスに於ける朋子の立場など何も分からない。ただ純粹にクラスに馴染まんとして、まずは隣りの席の朋子と、仲良くなろうとしたのかも知れない。しかし朋子を始め、クラスのみみんなは戸惑った。

「漢字は違うけど、雪川さんも同じともこでしょ。ともこ同士、仲良くしましょう」

「あっ、はい」

緊張しながら朋子は答えた。対して智子はつぶらな瞳で、にこっと微笑み返して来る。それは丸で天使の微笑み。

その後も智子は、朋子と仲良くした。昼食さえも朋子と一緒に。わざわざ教室を出て朋子を捜し、校庭でふたり切りで食べたのである。美少女効果、てき面。これでは流石の幸助たちも、朋子に手が出せなかった。

こうして朋子の境遇は一変した。更に智子を通して、他の生徒とも、会話出来るようにまでなったのである。

「雪川さんって、背高いし、スタイルも良いよね。羨ましい」

「そんなこと、全然ないよ」

「朋ちゃんの絵って、凄い繊細で、きれいだよ」

「小学校の時、絵のクラブに入ってたの」

「朋ちゃん、吉田拓郎の『どうしてこんなに悲しいんだろう』って知ってる？」

「ううん、知らない」

「じゃ、教えてあげる」

「ありがとう」

放課後も朋子と智子は、一緒に帰宅。図書室や公園、商店街のレコード屋や本屋で道草した。朋子にとっては、夢のような日々だった。

そんな朋子の変化を、夏江と健一郎は直ぐに感じた。朋子の口から「殺して」とか「死にたい」が消えた。それどころか智子を始めとする女子生徒が、雪川家に遊びに来るようになったのである。健一郎は上司に家庭の事情を説明し、急遽退職願いを撤回した。

二学期も無事終わり、冬休みに入った。朋子にとっては、生まれて初めての楽しい冬休みとなった。クリスマスは、智子を始めとするクラスメイトとパーティ。大晦日から元日に掛けては、家族で初詣にも出掛けた。

クリスマスパーティは智子の家で催したが、その時朋子は、智子の家がクリスチャンであることを知った。これが後に、朋子がキリスト教に関心を持つ切っ掛けとなるのである。

三学期。東京にも雪が降った。或る日の放課後、朋子と智子は雪の舞う校庭を、ふたり仲良く散歩していた。

「あっ。朋ちゃん、これ見て」

智子が一本の松の木の前で足を止め、松の枝を指差した。朋子が目を凝らすと、そこには、一匹の蟬の抜け殻があった。

「夏の抜け殻が、そのまま残ってたんだね」

朋子が答えると、智子も嬉しそうに頷いた。腕を伸ばし智子は、その抜け殻を枝からそっと離れた。

「朋ちゃんに上げる」

智子は手にした蟬の抜け殻を大事そうに、朋子に差し出した。朋子はかぶりを振った。

「智ちゃんが見つけたんだから、智ちゃんのだよ」

それでも智子は懇願した。

「お願い、朋ちゃんにもらって欲しいの。わたしだと思って、大事にして」

「えっ、智ちゃん……」

何か問いたかったけれど、悲しい予感に襲われ朋子は口を閉じた。代わりに精一杯、笑顔を作って答えた。

「うん、分かった。ありがとう、智ちゃん。わたし、大事にする。だってわたしの、一生の宝物だもん」

「朋ちゃん」

いつもの眩しい笑顔で、朋子を見つめ返す智子だった。

しかし中一の終わり、朋子の予感は一瞬現実のものとなってしまった。智子の転校である。智子はまた別の学校へと移動し、儚くも朋子の前から去って行ってしまったのだった。

中二、中三の二年間。住吉智子のお陰で、朋子をいじめる者は誰もいなくなった。その点は良かったが、智子のように、朋子と積極的に仲良く接する者もいなかった。むしろ生徒たちは朋子と距離を置き、タブー視するようになった。平和ではあったけれど、孤独な日々。智子と過ごした楽しい日々の記憶だけが、朋子の生きる支えだった。

(五)

(五·一) 高校、初恋

(五・一) 高校、初恋

智子去りし後、朋子はキリスト教に興味を抱いた。尤も信仰をしたい訳ではなく、神という存在が漠然と気になっていた。

神とは何なのか。

もしもこの世に本当に神が存在するのなら、なぜ神様はわたしなんか、創造したのだろう？ なぜわたしのこの醜さを、この孤独な人生を、救ってくれないのだろう？

そんな訳で、朋子はミッション系の女子校である聖星学院高校を受験し、普通科に入学した。学校は渋谷にある為、山手線で通学した。マスク着用は今までと変わらず、電車内では目立たないように、いつも俯いていた。

高校では、いじめられることもなく、特別視されたり、タブー扱いされることもなかった。みんな普通に、朋子と接した。

授業ではキリスト教の科目もあり、音楽の授業では賛美歌も歌った。校庭の中央にモダンなチャペルがあり、誰でも自由に礼拝出来る。スタンドグラスに囲まれたチャペル内部は色鮮やかではあったけれど、多少薄暗く陰気に思えた。神についてクラスメイトたちと熱心に語り合うことはあっても、朋子に信仰心が芽生えることはなかった。また自ら進んでチャペルに足を運び、礼拝するということもなかった。

そんな朋子だったが、キリスト教に関して、ひとつだけ心に決めていることがあった。

もしも自分の前に信頼出来るクリスチャンが現れたら、聞いてみよう。なぜ神様はわたしに、こんな重い十字架を背負わせたのか、と。

しかし待ち人は、なかなか現れなかった。聖星学院の生徒たちはみな真面目だが、苦勞知らずのお嬢様ばかり。教師たちにしても口では立派なことを言うけれど、現実の世の中にとっても立ち向かってゆけそうにない理想論ばかり。

そんな或る日、朋子はクラスメイトの福泉愛に誘われ、彼女が通う目黒の教会の日曜学校に出掛けたのだった。愛ちゃんがそんなに熱心に誘ってくれるのなら、一度位行ってみようか。終わったら、さっさと引き上げればいい……。朋子はそんな軽い気持ちで、参加した。

ところがミサが終わるや、福泉愛を始め同年代の女子、男子が朋子を取り囲み、熱烈に歓迎したのだった。それは社交辞令や義務感などではなく、心から朋子との出会いを喜んでいるようだった。これには朋子も驚いた。なんて良い人たちなんだろう。こんなやさしい人たちが、この世にいたなんて。

朋子は直ぐに心を開き、問われるまま皆に、過去の苦勞話を語って聞かせた。

「そうだったのですか。とても辛い思いをされて来たんですね」
「大変でしたね。ぼくなんか、とても耐え切れなかったと思います」
「中学の時のお友だちの信仰とやさしさが、雪川さんを救ったんですね。素晴らしい」
「そして今日、福泉さんのお誘いで、わたしたちの救世主の元へ来られた。これは偶然ではありません。きっと神様が、導いて下さったのですよ。本当に良かったですねえ」
「そうかも、知れませんね」
朋子は疑念を抱きながらも、努めて笑顔で答えた。
「わたしたちも雪川さんに会えて、とっても嬉しいです。これからも、是非来て下さいね」

そんな純真で快活な、若きクリスチャンたち。その中であって、ひとり寡黙ではあるけれど、さっきから熱心に朋子の話に耳を傾ける男子高校生がいた。彼の存在に、朋子はときめきを覚えた。つまり異性として、朋子は彼を意識したのである。そして彼とは、福泉愛の兄、高三の福泉誠であった。

スラーっとした長身で、色白の肌、上品な笑顔。妹の愛をそのままショートカットにしたような、美少年だった。初めて誠と目が合った時、朋子は思わずドキッと、頬が火照った。と同時に胸に、切ない痛みが走った。それは朋子にとって、生まれて初めての経験だった。

どうしたんだろう、わたし……。

知らず知らずのうちに男の子に対しても警戒を抱き、恋愛も意識的に避けて来た朋子だった。男の子が、わたしなんかを好きになる筈がない。今日まで頑なに、そう自分の心に言い聞かせて来た。

しかし福泉家は、熱心な信仰一家である。誠とて同様。自分たちの信仰に導くことが、他人を幸福にする、救済することだと信じてやまない。従って誠は妹の愛と共に、朋子を救って上げたいと神に願うのだった。その為に自分に出来ることは、何でもしたい、と。

誠は、熱心に朋子を誘った。日曜学校は勿論、その後に福泉家で催す聖書の勉強会にも招いた。誠の気分を害したくない朋子に、断れる筈はなかった。誠に誘われるまま、朋子は参加した。ひと月、ふた月と過ぎ、毎週のように誠と顔を合わせた朋子は、誠の虜になった。そしてとうとう、誠を好きになり、恋をしてしまったのである。

(五·二) 失恋

(五・二) 失恋

朋子は、福泉誠を信頼出来るクリスチャンだと信じた。そして二人切りになるチャンスが、遂に訪れた。場所は、教会近くの午後の公園だった。

朋子は心に秘めていた例の問いを、誠にぶつけた。

「誠さん。神様のことで、質問があるんですけど」

「珍しいね。朋ちゃんの方から、ぼくに質問なんて。何でも、遠慮なく聞いてよ」

フレンドリーに微笑む誠。一方朋子は、胸をドキドキさせながら尋ねた。

「わたし、こんな醜い顔してるでしょ？」

えっ。朋子の第一声に、意表を突かれた誠。それでも冷静に答えた。

「そんなことないよ。気にしない、気にしない」

精一杯励まそうとする誠の笑顔が、眩しかった。躊躇いつつも、朋子は続けた。

「誠さん。神様はどうして、わたしにこんな重い十字架を、背負わせたのだと思いますか？ なぜわたしはこんな苛酷な運命を背負って、生まれて来なければ、ならなかったのでしょうか？」

「朋ちゃん。それは……」

誠は返答に困った。否、答えられる筈がなかった。生まれた時から幸福なクリスチャン一家の中で育った、お坊ちゃまの誠である。他人の苦勞、痛みや傷みを、分かれと言う方が酷である。しかし誠は、朋子を失望させたくなかった。自分を信頼し、こんな難問を自分にぶつけて来た、朋子の気持ちを……。誠は恐る恐る答えた。彼に思い付く、精一杯の答えを。

「試練」

しれん、試練……。その言葉を、心の中で繰り返し呟きながら、朋子はじっと誠を見つめた。

「朋ちゃんへの、神様からの試練だと、ぼくは思う」

しかし朋子は、尚も問う。問い返さずにはいられなかった。

「試練て何の、何の試練ですか？ 一体何の為に、神様はわたしに、こんなむごい試練を……」

しかし誠は教会で唱えるような、信仰的な答えを返すことしか出来なかった。

「朋ちゃんの魂を美しく磨き、朋ちゃんを天国に導く為……」

魂、天国……。そんなことを言われても、朋子には理解出来なかった。そして納得もしなかった。しかし自分の為に、精一杯答えてくれた誠への、感謝の言葉も忘れなかった。

「ありがとう、誠さん。でも……」

「でも」

不安げに朋子を見つめ返す誠に、朋子は続けた。

「わたしなんて、絶対天国になんか、行けません」

「どうして」

「どうしてって。だってわたしなんか、誰も本気で、好きになってくれないでしょ？」

「そんなことないよ。教会の人たちはみんな、きみのことが大好きだよ」

「そんなんじゃないくて」

そんなんじゃないから……。じれったい朋子。

「どういうこと？」

鈍い誠に、遂に朋子は言った。叫ぶように……。

「だから男の人」

「男の人？」

「男の人がわたしを好きになることなんて、絶対はないでしょ？」

朋子はまっ直ぐに、誠を見つめていた。

「それは……」

誠は答えに窮して、黙り込んだ。しかし続けて朋子は勢いに任せ、大胆にも誠にこう問うた。丸で内に秘めたる彼への想いを、この時を逃すまいと告白するかの如くに。

「誠さんはわたしのこと、好きですか？ 男として、女のわたしを、好きになってくれますか？」

「朋ちゃん……」

誠はまたも絶句。戸惑う誠に、朋子は我に返ったように、直ぐに後悔に苛まれてしまう。

……どうしてわたし、こんなこと言ってしまったのだろう。本当に愚かなわたし。誠さんがわたしなんかを、好きになってくれる筈なのに……。

「ごめんなさい、誠さん。つい、わたし……。それじゃ、失礼します」

一礼すると、朋子はさっさと誠の前から立ち去った。その目にはいっぱい涙が溢れていた。

ひとり取り残された誠は、ショックでならなかった。

……男として、女のわたしを……。もしかして彼女、ぼくを好きなのかも？

そう感じた時、誠は朋子に対して、自分でも信じられない、或るネガティブな感情を抱いてしまったのである。そしてその感情とは、嫌悪感、つまり「きもーい」であった。そんな自分を、誠は恥じた。恥じたけれど、若き誠には如何ともし難いものであった。

事実翌週から誠は、朋子との間に距離を置くようになった。敏感にそれを感じた朋子は、福泉愛の誘いを断り、日曜学校に行くのを止めた。

朋子の初めての失恋であった。

(五・三) 大学、卒業

(五・三) 大学、卒業

いつの世も、失恋のいたみは時が解決してくれる。そしてそのいたみを克服した時、人は大きく成長するものだ。誠への失恋から立ち直った朋子もまた、精神的に逞しくなった。

高校三年生となり、進学か就職か進路を決めねばならなかった。朋子はまだ、社会に出てゆくのが恐かった。わたしを雇ってくれる企業なんて、あるかしら。そんな不安から消極的ではあるが、朋子は進学を希望した。

そして聖星学院女子大学の、文学部人文学科に推薦で入学した。キャンパスは自由が丘にあり、渋谷から東横線に乗り換えての通学。電車の中では相変わらず、目立たぬよう俯いていた。

大学生になっても、信仰には全く興味がなかった。しかし大人になったことで、世間が放っておかなかった。キャンパスや街頭で多くの宗教団体に勧誘され、その度に丁重に断った。

大学二年になった春、朋子にとっては大変迷惑な社会現象が起きた。所謂『口裂け女』のブームである。日常的にマスクを着用していたから良いものを、もしマスクをしていなかったらと思うと、ぞっとする朋子だった。しかし現実にはマスクをしているからこそ、疑われ、誤解された。

「あっ、口裂け女だ」

心無い子どもたちが叫び、怖がって逃げてゆく。大人たちも同様。

「ね、あの人。もしかして、あれじゃない？」

などと、電車の中でひそひそ、笑い声が漏れて来る。お陰で、割りと平穏無事だった大学生活は急に落ち着かなくなり、心傷つく日々となってしまった。

大学三年の三月から、就職活動がスタートした。朋子は人並み以上に、不安でならなかった。

わたしを採用してくれる企業なんて、この世の中にあるのだろうか。

正直、恐かった。再び厳しい世間の目と、向かい合わなければならない。緊張し、恐怖すら覚えた。

何よりマスク着用が許されるのか、それが一番の懸念だった。勤務中は勿論だが、まずは企業訪問、エントリーシートの写真、そして面接。やっぱりマスクは外さない、失礼だろうか？

朋子は誰にも相談出来ず、一人で悩んだ。悩みつつもみんなに心配は掛けまいと、家庭でも大学でも努めて明るく振る舞った。その為夏江、健一郎は勿論、大学の友達も、みんな朋子が心配だったが、余計な世話はしまいと遠慮していた。

悩んでいても、仕方がない。朋子は決心した。

企業説明会には、マスクをして行こう。そして事情を説明しよう。その代わりエントリーシートには、マスクなしの素顔の写真を貼ろう。

大学四年。五月を迎え、朋子は二十二才の誕生日を迎えた。

先ず福祉関係や社会貢献出来そうな企業二十社を選び、エントリーした。その中で説明会の案内をもらった十五社の企業説明会へと、マスクを着用して足を運んだ。学生たちは怪訝な顔で朋子を見たが、特に非難する者はいなかった。会社の担当者に顔の事情を説明し、マスク着用を了承してもらった。そして素顔の写真を貼ったエントリーシートを提出した。

ここまでは良かった。しかしこれから先が進まない。書類選考が、通らないのである。不採用の通知ばかりが返って来た。結果、すべての企業に落ちた。

朋子は落胆した。みんなが励ましてくれたが、駄目なものは駄目。かといって止める訳にもいかない。健一郎も夏江も、もう五十才になる。ここまで育ててくれ、大学まで行かせてくれた二人に、これ以上もう負担と心配はさせたくなかった。何処でもいいから、兎に角就職したい。仕事に就かなければ……。朋子は焦りながらも、積極的に就職活動を続けた。

梅雨、そして真夏も朋子は動いた。その甲斐あって、数社に於いて書類選考を通過し、試験と面接まで進んだ。面接ではマスクを外した。素顔で、企業の面接者と対面した。

恐かった。大人になってから、他人の前でマスクを取るなんて初めてのこと。しかも相手は、採用の鍵を握る人物。緊張と恐怖で押し潰されそうだった。しかしやるしかない。朋子は素顔で、精一杯自分の思いを語った。

だが残念ながら、内定の連絡は、ひとつも来なかった。それでも落胆している暇がない。朋子は無我夢中で応募を繰り返した。そして応募しては、不採用の繰り返し。時は既に秋が深まり、冬の足音が聞こえ来るまでに至っていた。

朋子は焦った。

やっぱりわたしを採用してくれる会社なんか、この世の中には存在しないのよ。わたしは働くことも出来ない、役立たずなのね……。

大学のみんなが励ました。

「最後まで諦めずに、トライしよう」

「みんな、朋ちゃんの仲間だから」

しかし既にみんなは、就職先も内定している。つい妬みや愚痴も零したくなる朋子。唯一、健一郎と夏江だけが、そんな朋子の気持ちを察していた。

「朋ちゃん、ここまで良く頑張ったわね」

「こんなに頑張ったんだから、もういいんじゃないか、朋子」

「でも、わたし、まだ……」

「いいから、いいから。大学を卒業してから、ゆっくり探そうよ」

ふたりの優しい言葉に、朋子はいち堪え切れずに嗚咽した。朋子の涙を胸で受け止める夏江と、ふたりを見守る健一郎。

「ごめんね。お父さん、お母さん」

ふたりの言葉を励みに、朋子は卒業まで精一杯、就職活動が続けた。しかし就職先は決まらないまま卒業。結果的に朋子が応募した会社は、六十社に及んだ。

こうして未来に明るい兆しが見えないまま、朋子は学生生活にピリオドを打つしかなかった。

(六)

(六・一) 自殺願望

(六・一) 自殺願望

学生でもなく、社会人でもない。そんな中途半端な状態で大学卒業後の春、四月を朋子は迎えた。

「慌てず、ゆっくり探そうよ。朋ちゃん」

夏江も健一郎も、朋子にやさしかった。

「うん、ありがとう。そうする」

ふたりの前では、穏やかに笑う朋子だった。が自室に戻るや、途端に暗く沈むのだった。

自分が情けなくて仕方がない。だけど泣きたくても泣けない。涙を零したら、それですべてが終わってしまう気がしたから。涙を堪えながら、呟くのは自己否定の恨み節ばかり。未来も希望も全く見えない。ただまっ暗な闇の中。絶望。朋子は完全に、生きてゆく自信を喪失していた。

「やっぱりわたしなんか、生まれて来なければ良かったのよ。生きてたって、何の役にも立たないんだから」

しかしそんな言葉を、もう健一郎たちに向けるような歳ではない。そんなことをしても、ただ悪戯に一家三人、みんなが傷つくだけ。そう分かっていたから、朋子は苦悩、絶望をひたすら内に秘めた。そしてただただ、自分を責め続けた。

結果、朋子が辿り着いた結論は、自殺であった。

誰にも迷惑を掛けず、ひっそりと死んでしまおう。その方が……。お父さんもお母さんも、そして友だちのみんなも、確かに一時は悲しむかも知れない。でもこのままだったら、わたしはお父さんとお母さんの重い荷物になってしまう。これから二人は、どんどん年老いてゆく。本当だったらいずれはわたしの方が、二人の世話をしなければならぬのに。でも今のままじゃ、絶対に無理。それにいつか二人が死んだら、わたしは誰も頼れる人がいなくなってしまう……。

未来を思えば、悲観的な事しか浮かばない。だから早く死ななきゃ。ごめんなさい、お父さん、お母さん。こんなわたしの我がままを、許して。

そして朋子は、自殺を決意する。

でも、どうやって死のう？ 何処でなら、安らかに死ねるだろうか？

朋子は朝から、職探しの振りをして家を出た。そして一日中東京の街を、死に場所を求めて彷徨い歩いた。

電車への投身自殺や、ビルからのそれは大騒ぎになる。他人にも迷惑を掛けてしまうから、駄目。ならば東京を離れて、富士山の樹海に入るか？ それとも何処かの海で、溺

死？ でもきっと、カラスやサメに遺体を食べられてしまうだろう。そんな無残な姿になったら、お母さんに申し訳ない。ああ、どうしよう？ 良い死に方が、思い付かない。いっそ家の中で、服毒自殺しようか……。

こうして、死ぬことばかりを考えていた朋子。そんな朋子が或る日、真昼間の渋谷の街を、宛てもなくぶらぶら歩いていた時のことである。突如朋子は、見知らぬひとりの中年男から声を掛けられた。そしてその男こそ誰だろう、他ならぬこの俺。つまり、海野保雄なのであったとき。

なぜ渋谷なのか？

それは俺が、渋谷の道玄坂近くの雑居ビルの一室に、例の美容整形外科病院を開業していたからである。つまり渋谷の街は、俺にとって庭みたいなもの。ついでだから、少しばかり自己紹介しておこう。何、どうでも良い？

家族構成だとか独身なのか、生年月日は……なんてことは、省略させてもらう。とりあえず五十代の中年男であることは、間違いない。早くから整形医術に興味を持ち、長年多くの患者を施術して来た。しかし最近医学に限界を感じ始め、宗教特に仏教的東洋哲学に、魂の救いを求めている俺だった……。これにて自己紹介、終わり。

そんな俺と雪川朋子とが、渋谷の街で運命的な出会いをしたって訳だ。ではなぜ俺が初対面の若い娘である朋子に、声なんか掛けたのか？ ナンパなどではない。それは俺の経験から来る、直感的な閃きだったのだ。朋子をひと目見るなり、俺はピーンと来た。

あ、あの子、死ぬつもりだな……。とね。

なぜ閃いたのか？ それは過去、多くの自殺志願の女性たちと接して来た俺だからこそ分かる、独特のにおいと言うのか雰囲気ってやつ。それが彼女らにはあった。で俺は今まで彼女らの半数以上に、整形手術を施して来た。なぜなら彼女たちの殆どが、自分の容姿に、何らかの深刻な悩みを抱えていたからである。

朋子にも、同様のものを感じた。だから俺は、ピーンと来たって訳。そして今までの女性たちにそうして来たように、俺のお節介の虫が騒いだのである。

(六・二) 道玄坂美容整形外科

(六・二) 道玄坂美容整形外科

「お嬢さん。差し支えなければ、ちょっとお茶でもしませんか？」

これが雪川朋子に話し掛けた、俺の第一声。先ずは余り深刻にならぬようにと、わざと助平な中年おやじ風に、ナンパっぽくしてみせたという訳だ。

初めて見た朋子の印象は、どうだったか。先ずその顔の半分以上を、白いマスクで覆い隠していた。が、それでも隠し切れない何処か不安げな、おどおどとした落ち着きのなさを見て取れた。加えて自分に自信がないのか、終始俯き加減である。その充血した大きな瞳から生気は感じられず、そこにあるのは暗く深い絶望と悲しみばかり……。あゝこの子今まで、どれ程の辛酸を舐めて来たことだろう。そんなことを、考えずにはいられなかった。

間違いない！ やっぱりこの子、死ぬつもりだ。そして今までそうして来たように、俺は生意気にも、この子を助けて上げたいと願ったのである。

俺に声を掛けられた朋子は、吃驚して足を止めた。ハチ公前の人込みの中。しかとして逃げ出す子もいるのだが、朋子は逃げなかった。そして無言のまま警戒しつつ、俺を見つめ返したのである。俺は続けた。

「警戒するのも、ご尤も。でも宗教の勧誘やら、モデルのスカウトなんぞではありません。お嬢さん。実はわたし、ちょっとした医者 of 端くれでして」

「お医者さんですか。そんな方が、わたしに何か？」

ようやく朋子は、恐る恐る口を開いた。

「ええ、わたしね。もし勘違いだったら、すいません。お嬢さん。あなたの顔の表情に、並々ならぬ切羽詰ったものを、感じちゃいまして。それでついつい、声を掛けちゃったという訳です」

俺の言葉に、更に朋子は驚いた。そして今度は縋るような目が変わって、じっと俺を見つめた。朋子は聞いた。

「切羽詰ったもの、ですか？」

「はい、そうなんです。ですから、お嬢さん。そこら辺をもう少し、詳しくお伺い出来たらなあと思ひまして。どうでしょう、立ち話も何ですから。そうだな、お茶もいいけど、公園でゆっくり話しませんか？」

俺は近くの宮下公園に誘った。喫茶店よりは、その方が落ち着けると思ったからだ。朋子は頷くと、俺の後に付いて来た。

宮下公園に入ると、木陰のベンチに並んで座った。青い空と眩しい春の日差し。木漏れ陽がきらきらと、天使のように踊っている。こんなぼかぼか陽気の中で、しかし朋子の表情は暗かった。

「お嬢さん。良かったらわたしに、話してみませんか？ わたしに出来ることなら、何でも相談に乗りますよ」

さり気なく俺は誘った。しかし朋子はしばし無言で、ただじっと俺の顔を見つめるのみ。それから俺を信頼に値する人物と判断してくれたのか、ようやく重い口を開いた。

「実は、わたし……」

そして朋子はその胸の内を、初対面の俺に正直に打ち明けてくれた。誰にも言えずに悶々としていた気持ちを。もしかしたら誰でもいいから、その気持ちを聴いてもらいたかったのかも知れない。

「わたしなんか、みんなに迷惑掛けるばかりで。生きていたって、本当に仕方のない人間なんです」

「どうして、そんなふうにするのかな？」

「それは……」

そこで朋子は、生い立ちから今日に至るまでの半生を、淡々と俺に語ってくれた。俺はただ黙って、耳を傾けていた。

「そうか。お嬢さん、それは大変だったね。でもそんな中でも、いい人たちと巡り会って来たいじゃないか。ご両親だって、立派な方のようにだし」

しかし朋子は、かぶりを振った。

「確かにそうですけど。でも世の中に出て仕事をするっていう、わたしにとって一番大きな壁は、とても越えられそうにありません。こればかりは、誰かに助けてもらう訳にもいきませんし。どうしても、自分の力で乗り越えるしかない訳ですから」

「それは、そうだけど」

「でもわたしにはもう、その自信がありません。ゼロなんです、可能性ゼロ。生きてゆく自信なんてもう、欠片もありません。だからわたしはもう、死ぬしかないんです」

「まあ落ち着いて、落ち着いて、お嬢さん」

興奮する朋子をなだめながら、俺は朋子に俺の名刺を差し出した。

「ここで会ったのも、何かの縁。正直に全てを打ち明けてくれたきみに、こちらもちんちんと、身分を明かさないとね」

朋子は素直に、受け取ってくれた。

「ありがとうございます。わたしは、雪川朋子と申します。本来なら名刺交換したい所ですが……。生憎わたしには、名刺すら」

「いいんだよ。そんなこと気にしなくて」

朋子はじっと、俺の名刺を見つめた。

『道玄坂美容整形外科病院

院長 海野保雄』

美容整形外科。

その文字に、朋子が一体何を感じたか？ それは分からない。ただ俺を信頼してくれたのだけは、間違いのないようだ。

「雪川さん、きみの話はよく分かった。死にたいっていう、きみの気持ちも、俺には良く理解出来る。ところで……きみは整形には、興味ないかい？」

俺はストレートに、朋子に問うた。

朋子はきょとんとした顔で、俺を見返した。そして直ぐにかぶりを振った。

「整形手術の、整形ですか？」

「うん」

「申し訳ありません。失礼ですが、今の所全くと言っていい程、ありません」

全くか。まあ、いいや。

あれっ！もしかして、それが目的かしら？ つまり、ビジネス……。そんな不審の念を、朋子に抱かせたかも知れない。しかし俺は慌てず続けた。

「そうか、勿論それでも構わない。ついでだから少しだけ、わたしの仕事について、話させてくれないかな？」

朋子は頷いた。そこで今度は、俺がお喋りする番だ。

「わたしは今まで、多くの人を手術して来たけど。整形手術をね」

「ええ」

「その中には、無償で手術した人たちもいるんだよ。なぜだと思う？」

朋子は直ぐにかぶりを振った。

「さあ、分かりません」

「それはね」

俺は朋子の顔を見つめながら、答えた。

「その人たちを、助けてあげたかったから。なぜ助けてあげたかったかという、その人たちはみんな、今のきみと同じように、死ぬつもりで、いたからなんだよ」

えっ。朋子は吃驚して顔を上げ、俺の顔をじっと見つめ返した。

「もっとはっきり言うとね……。もうこの際だから、死のうと思いつめてるきみの前だから、はっきり言っちゃうけど。つまり、みんな……顔に悩みを、持っていたんだよ」

ああ、そういうことだったのか。と、朋子は改めて、納得したようだった。

「先生、ありがとうございます。先生のお話は分かりました。でも」

「でも？」

「でもわたし。本当に整形手術なんて、興味ないんです。ごめんなさい、先生」

「いいんだよ、謝らなくて。いきなりこんな話をした、俺が悪いんだから。じゃ今日のところは、この辺にしておくかな」

「はい、ありがとうございます。先生にお話を聴いて頂けただけでも、とても心が落ち着きました」

「それは良かった。もし、また俺に会いたくなったら。さっきの所に、遠慮なく電話してよ。いつでも、相談に乗るから」

こうして初日は別れた。がその後予想に反し、朋子は積極的に俺に連絡して来た。しかも数日後、突如として俺の病院を、直接訪ねて来たのである。恐らく名刺の住所を頼って、見つけ出したのだろう。随分と熱心なことじゃないか。

(六・三) 前向き

(六・三) 前向き

「先生、わたしの顔でも整形出来ますか？ 少しは、よくなりますか？」

再会した朋子はいきなり、俺の診察室でこう聞いて来た。真剣そのもの。その勢いに、俺は圧倒される程だった。もしかして朋子は、整形に興味を持ったのか？ いや、それどころではない。むしろ整形手術に対して、前向きになったのではないだろうか。そんな気すらした。

朋子も会わない間に、いろいろと真剣に考えていたのだろう。そして整形手術を、選択肢のひとつとして捉えるに至った、という訳か。

「もしかして、整形手術に興味湧いた？」

俺は笑みを浮かべながら、冗談ぽく聞いてみた。しかし朋子は真剣な表情のまま、頷いた。

「はい、先生。でも」

「でも？」

「でもやっぱり、恐いです」

「そりゃ、初めから恐くない人なんて、いないさ」

「でも。でもこのままではわたし、生きてゆく自信ありませんし……」

ああ、何というきみの切実さ、深刻さよ。もう整形手術しか選択肢はないとでも、思い詰めているかのようではないか。

「確かに、死ぬ位だったら。その前に死んだ気になって、整形に懸けてみるのも、悪くはないかもね」

俺の言葉に頷くと、朋子は自発的にマスクを外した。その素顔を初めて、俺に見せたのである。恐らく全裸になるような、そんな決意と羞恥心があったと思う。その彼女の真剣さ、藁をも掴むというのか、その一途な眼差しに応えるように、俺も真剣に彼女の素顔をじっと見つめた。というか観察した。

「もう、マスク着けてもいいよ」

「はい」

マスクを着けると、彼女の顔から緊張が消えていった。

「そうだなあ。簡単にとはいかないまでも、決して不可能ではない」

「ほんとですか？」

希望。朋子の顔に、一筋の光が差した。

「うん。確かにきみが生まれた頃には、まだまだ整形技術なんて未熟だったよ。でも今や、飛躍的な進歩を遂げてね。その進化たるや今この一瞬にも、とどまることを知らない勢いなんだよ」

「そうなんですか」

興奮。朋子の頬が、心なし上気したように思えた。つい期待してしまう、どうしても期待に胸が膨らんでしまう、と言ったところか。しかし一言で整形手術と言っても、そんなに簡単なものではない。朋子にとって、朋子の人生にとって、それは重要な選択になる筈だ。これからの彼女の人生を大きく左右する一大事。ならばこちらとしても、真摯に、親身になって寄り添わねばならない。先ずは焦って急がせないことだ。

朋子は積極的に、俺に質問を浴びせた。如何にも整形手術に対して前向きではあるが、まだ決心がつかず迷っているといった具合。

「先生、もしわたしが手術を受けるとして、手術は成功しますか？」

「百パーセントとは言えないまでも、今までの経験から、大きな失敗はないと自負している」

「じゃ先生。今まで先生の手術を受けてこられ、そして成功した人の中で、それでも手術したことを、後悔された人とかいますか？」

「後悔。うーん、難しい問題だね。そうだなあ……。今まで俺の手術を受けた人で、直接俺に、後悔した、って言って来た人は一人もいないけどね。でも本人の気持ちの中では、正直、多かれ少なかれ、誰でもあるんじゃないかな？」

「やっぱり、有りますか」

「うん。やっぱり元の顔に戻りたいとか、整形してしまった自分に自己嫌悪を抱いたりとか、あると思うよ。でも朋子さん、こういうことに限らず、世の中後悔しない人なんて、一人もいないんじゃないかな。誰だって後悔のひとつやふたつ背負って、それでも生きてるもんじゃ……」

「確かに、そうですね」

頷きながら朋子は、真剣に迷っているように見えた。

「でも先生。わたし、この顔に戻りたいなんて、思うかしら？」

朋子はそう言うと、陽気に微笑んでみせた。朋子が笑ったのは、この診察室に入って来て初めてのことだ。そしてその微笑みこそ、朋子が何かを決心した証しのように思えてならなかった。恐らくこの時確かに、朋子は決意したのだ。

「先生。脱皮だと思えば、いいんですよね？」

「脱皮？」

「はい、整形するってことは」

「ああ、脱皮ねえ」

「蟬だったら、羽化ですね」

「羽化。そうだね」

「わたし、蟬が好きなんです」

朋子は少女のように、笑った。

「俺も好きだよ、蝉は。蝉時雨がいい。夏は蝉がいるから夏なんだよ。蝉のいない夏なんて、夢を持たない少年のようさ」

「夢……少年よ、大志を抱け、ですね。わたしもそう思います。先生、何か先生とわたしって、気が合いそうですね」

「そうかな？」

「嫌ですか？」

微笑みながらも、真剣な眼差しの朋子。

「いやいや。全然、そんなことないよ」

俺は大声で笑った。釣られて朋子も、笑った。その笑顔がとても美しいと、俺は思った。「整形するってことは、確かにそれは新しい顔になり、新しい自分として、新しい人生を生きるって言うこと。つまり生まれ変わるって、ことだと思うんだよね」

「はい。生まれ変わる、ですね」

この時朋子が、その脳裏に思い浮かべたものは、一匹の蝉の抜け殻だった。住吉智子の思い出の、朋子の宝物であるあの蝉の抜け殻。そして朋子は、自分が羽化するイメージを、思い描いていたのかも知れない。

「だから俺が関わった人たちには、人の目など気にせず、新しい顔を受け入れ、新しい自分を受け入れ、そして新しい人生を力強く生きてほしい。いつもそんなふうに祈っている」

「力強く……わたしも生きて、ゆけるでしょうか？」

「きみなら大丈夫。だって今までずっと、頑張ってきたじゃないか」

「先生……」

急に感極まったのか、朋子の目に薄っすらと涙が込み上げた。朋子はそれを、懸命に堪えた。

「きみは今、学生でもなければ、社会人でもない。だったら例えば整形後、何処か見知らぬ土地に引っ越して、そこで一からやり直す、なんてことも可能だと思うよ」

「確かに、そうですね」

頷く朋子の様子から、彼女の気持ちが整形手術へと大きく傾いたのを、俺は実感した。

「生まれ変わったつもりで、新しい顔で、新しい街で、新しい人生を生きる。もしそんなことが、わたしにも出来たら……。先生、どんなに素敵なことでしょう」

「出来るんだよ、きみの決心次第でね。でも焦っちゃいけない。きみの人生を左右する、とても大きな選択なんだからね。どうだろう、今日のところは一旦家に帰って、ゆっくりと考えてみては？」

「はい、分かりました。そうします」

しかし一週間もしないうちに「整形手術をお願いします」という、朋子からの電話が入った。朋子の気持ちを後押ししたことのひとつに、両親の存在があったのだ。

折角大学まで出してくれたのに、仕事も見つからず、健一郎と夏江には心配と苦勞ばかり掛けている。自分が沈んでばかりいるから、ふたりも気を遣って大人しくしている。お陰で我が家はお通夜のように、いつもしーんと静まり返っているではないか。このままじゃいけない。これ以上、ふたりに苦勞を掛けたくない。以前のように、元気なふたりに戻ってほしい。そんな想いが、朋子を整形手術へと向かわせたのであった。

(七)

(七・一) 遺伝子操作の薬物投与

(七・一) 遺伝子操作の薬物投与

「先生、神様はいると思いますか？」

二度目の来院時の、朋子の第一声がこれだった。本人が整形手術を決断したとはいえ、今日早速手術する訳ではない。まだ手術の具体的な説明など、全然済んでいないのだから。

「うん、俺はいると信じてるつもりだけど。ま、正直分からんね。少なくとも因果応報とか死後の世界だとか、輪廻転生なんてのは信じてるけどさ」

「輪廻転生、ですか」

「きみは、キリスト教の学校だったね」

「でも仏教のことも、個人的に勉強しました。だから前世のわたしはどんな人間だったんだろう、なんて考えたこともあります」

「そして来世の自分は、どんな人間になるんだろう、とかね」

「来世ですか……。正直そこまで考える余裕、今迄のわたしにはありませんでした」

「ま、この世の中、現世とか浮世或いは娑婆なんて呼ばれているんだけど。娑婆に生まれて来る人間というか、魂ってのはさ」

「はい」

「多かれ少なかれ、誰もみな何らかの罪があるから、生まれて来るんだってよ。俺だってそうさ。何も罪のないきれいな魂だったら、わざわざこんな苦悩に満ちた娑婆なんか、生まれて来る必要は無たってことだろうね」

「苦悩に満ちた娑婆……。魂、ですか」

「そう。幸も不幸もすべては、魂が原因。てことは現代科学じゃ、その原因は分からないってことだね。同じようにもし神様がいたとして、慈愛に満ち溢れた神様がどうして、俺たちの不幸や苦悩を許しているのか？ 助けてくれないのか？ って疑問もさ、魂が原因だからですよって話。それじゃ俺らの頭じゃ、到底理解出来ないよなってなっちゃう」

「はあ。何だか美容整形外科の先生と、お話している気がしないんですけど」

「まあね。分かったようなことを、無責任に言ってるだけだから、俺の場合。あんまり真に受けないように」

俺は頭を搔いて笑った。朋子も釣られて笑った。

「じゃ、そろそろ本題。手術の話に、移ろうか」

真顔になって俺は告げた。

「よろしく願います」

朋子は、緊張した面持ちで頷いた。彼女のマスクを外してもらった。

「唇がちょっと大きいけど……。ま、なんとかなるかな」

他にも気になる箇所をチェックし、再びマスクをしてもらった。そして実際手術を受ける手術室を案内……と言いたい所だけれど、実は俺の病院に、手術室なんて無い。必要ないのだ。なぜか？

朋子に説明した、俺独特の整形手術法の話聞いてもらえれば、分かるだろう。

「では手術の、具体的なやり方を説明しよう」

「はい」

「俺の場合、例えば便宜上美容整形外科などと名乗ったり、整形手術、いや単純に手術なんて言葉を使っているけど……。実はメスを使った外科手術なんて、やらないんだよ」

「えっ。どういうことですか、先生？」

「つまりね。俺の整形手術ってのは、薬物の投与。ただ、それだけなんだ」

「薬物？」

「そう。でも勿論、ただの薬じゃない。どんな薬かという。そうだな、ちょっと難しい話になるから、専門的な事は省略するとして……」

「はい」

興味津々と言うよりは、さっぱり訳が分からず、狐につままれたような朋子だった。

「簡単に言うのだね。顔に関する遺伝子を、ちょっと操作する薬なんだよ」

「顔に関する遺伝子、ですか？」

「うん。でも実はこれ、余りにも画期的かつ未来的過ぎてね。だから現代の美容整形外科では、まだ認められていない最先端技術なんだよ」

「最先端技術、ですか。なんか凄そうですね」

朋子は顔を上げ、じっと俺の顔を見つめた。

「でも、でしたら先生。手術というか、その薬物の投与、今は出来ないということでしょうか？」

「ま、本来はそうなんだけどね。この技術を使える俺としては……やっぱり、悩み苦しんでいる人を見捨てられない、どうしても救って上げたい。そんな想いに駆られてさ、整形手術の名のもとに、実は極秘でやっているんだよ」

「極秘ですか……」

「うん」

朋子が不審に思い警戒したり、嫌悪しないか、俺はちょっと不安を覚えた。

「そうだったんですね」

しかし俺の心配は杞憂に終わった。朋子は俺を見つめたまま、更に積極的に質問をぶつけて来たのだ。

「でもその薬は、本当に安全なんですか？ 大丈夫なんですか、先生。わたし、何だか怖いです」

「そう思うのも、ご尤も。でも大丈夫、心配しないで。今まで何人も手術というか、投与して来た実績があるから。それにちゃんとアフターケアもするし、勿論無料だね」

「ええ」

「投与後、だから面倒だけど、月に一回はここに来てもらう必要がある。異常やら異変がないか、チェックする為にね。でも何か少しでも気になる所があったら、いつでも来てもらって構わない。もしなんだったら俺の方から出向いたっていい。兎に角直ぐに対応するから」

「そうですか。でしたら、凄く心強いですね」

(七・二) 夏江の遺伝子

(七・二) 夏江の遺伝子

「じゃ話を続けると、顔に関する遺伝子を操作するって、具体的に言うのだね」

「はい」

「先ずモデルとなる血族の人の遺伝子、ま、女性の場合は母親がベストかな。それを頂戴して、きみの細胞中に注入する」

「母の遺伝子をですか？」

「そう、例えばの話ね。するときみの遺伝子とお母さんの遺伝子とが、きみの中で混ざり合って化学反応を起こす。そして、ちょっと長いけど、まあ半年もすれば、きみはお母さんの顔に似てくる。と、こういう訳……。相手が血族というのが、この化学反応の条件なんだけどね。なにしろ赤の他人のものでは、まだやったことがないもので……」

「そうなんですか。でも、なんか凄い。そんなに簡単に、出来るものなんですか？」

うん。俺は顔きながら続けた。

「だからその半年の間は、家でじっと療養してもらうことになるんだけどね。大丈夫かな？ ま、整形手術のダウンタイムみたいなもんだと、思ってもらえれば」

「ダウンタイムですか、半年……。そうですねえ。大丈夫、だとは思いますが。でも先生、母の遺伝子を頂戴するって、どうやって？」

「ああ、意外にそれは簡単でね。皮膚の細胞から、ピンセットで取り出せばいいんだよ」

「へえ、そんなに簡単なんですか」

拍子抜けしたような朋子に、俺は頷いた。

「うん。じゃ、モデルはお母さんでいいのかな？ つまりきみの今の年齢位のお母さんの顔に、似せて整形する。ってことになるんだけどね。他に血族の中に、希望する顔の人がいれば……」

しかし朋子は直ぐにかぶりを振って、即答した。

「いいえ。母で結構です、他には誰も。お母さんの顔にだなんて、願ってもないことですし……」

夏江の顔を思い浮かべているのか、朋子はしばし黙り込んだ。それから吹っ切れたように続けた。

「親子だったら、似てても全然おかしくないですよ。……どんなふうに整形したいか、元々先生にお任せするつもりでしたし。美人とかじゃなくて、わたし兎に角、普通が良かったんです」

普通かあ。なんか泣かせるねえ。奥ゆかしいというのか、何て欲のない人なんだろう、きみって人は……。俺は切なさを、禁じ得なかった。

「良し。じゃ、お母さんで決まりだね。そうなると、お母さんの協力も必要になるけど、それは大丈夫かな？」

すると朋子の表情が、にわかには硬くなった。

「実は先生。わたしまだ、両親には何も話してないんです」

「そうか。じゃ一度、ここに連れておいでよ」

「ここにですか」

「うん。俺が説得するから」

「いいんですか？」

「勿論だよ」

てな訳で、その日は手術の説明の残りを話し、今迄の手術経験者のビフォーアフターも写真を見せながら紹介した。アフターの写真は手術して半年後の顔と、一年または数年経過した後の顔を見せた。朋子は全く別人としか思えない手術前後の顔の違いに驚嘆し、また手術後の顔が数年経っても維持されていることに、安心感を得たようだった。そして概ね納得した様子で、朋子は帰宅の途に就いた。

後日、健一郎の仕事の休日、朋子は両親と共に来院。既に手術のことは、本人から簡単に伝えているらしかった。二人とも納得しているのか分からなかったが、表情は穏やかだった。俺は朋子に説明した時と同様に、手術のビフォーアフターを紹介した。更に手術を無料で行うことの俺の精神的理由を、熱心かつ丁寧に説明した。

手術を受けた女性たちの、その後の人生についても話した。術後も生活環境を何も変えず、家族や知人との交友関係を維持したまま暮らしている人。或いは家族または本人単独で引っ越したり、転職して新たな人生を歩んでいる人。いずれのケースでも幸い、手術したことでその後の人生に行き詰まったり、悲劇に陥ったという人は、今のところ一人もいない。そういった話に、健一郎も夏江も熱心に耳を傾けてくれた。

「最終的には、本人が決めることですから。わたしたちは今迄もずっと、娘に対する人の目口を意識しながら、それでもこうやって何とか生きて来ましたから。今更苦にする事はありませんし、娘に対するサポートはこれからも続けていくつもりです。どうか先生、娘の希望を叶えてあげて下さい」

健一郎の心情も含めた、これが夏江からの要望だった。

これで決まり！ 朋子の気持ちさえ固まれば、明日にでも手術OK。遂にここまで、漕ぎ着けたのだった。

(八)

(八・一) 手術

(八・一) 手術

いよいよ朋子の整形手術というか、薬物の投与である。朋子が二十三歳の誕生日を迎える前の、四月末日に行った。

前回夏江と会った日、既に夏江の遺伝子とその皮膚の細胞からピンセットで取り出した。そしてその中の顔に関する遺伝子を反映させたりボ核酸 (RNA) を、米国製の特殊な専用の機械を駆使して作っておいた。だから後はそれを注射器で朋子の腕を通して、朋子の細胞中に注入する。それだけのことである。だから一瞬で終わる。

その日は爽やかな朝で、泣ける程に透き通った青空が広がっていた。朋子は無事、午前八時に注射を終えた。特に体調に異常がなければ、この時点で普通に喋ることが出来る。食事だって摂れるし、流動食である必要もない。この点も、外科手術とは大きく異なる点だ。

「これで、終わりだよ」

「はい、先生。ありがとうございます」

今の時点では、まだ朋子の顔に変化は何もない。また特に副反応なども現れなかったので、そのまま入院用の個室に移動してもらった。先ずは一日、ベッドで安静にしてみよう。

ひとりになった朋子は、横になりながら物思いに耽った。これで、普通の生活が送れるようになるかしら。これでわたしの人生の戦いは、終わってくれるのかしら。これからはもう、あんなに戦わなくても良くなるのかしら……。不安と期待を胸に、朋子は眠りに落ちた。

翌日つまり五月一日、朋子は早朝から目を覚ました。そんなに悪くはない目覚めのようであった。今迄と特に変わりのない、普通の朝。しかし本日から徐々に、顔に変化が生じて来る。その過程は完成に至る迄、粘土を混ぜこぜにするようなグロテスクさを伴う。その為今日から、顔全体に布製のギブスを被ってもらわねばならない。そして約十日間、様子見ということで入院してもらうのである。顔は勿論のこと、体にも何か異変が生じたり悪影響が出ないか、観察する為だ。そして顔の変化を、直に俺の目で確かめる。

「体調はどう？ 痛みとか、無い？」

「全然問題ありません」

「良かった」

だが言葉とは裏腹に、朋子が不安で一杯なのは容易に想像がつく。しかしそれは当然のこと。俺だってまだ不安なのだから、当の本人が不安でない筈がない。

自分の顔は、これから一体どうなるのだろうか？ 本当に大丈夫なのだろうか？ 前の顔より、酷くなったらどうしよう……。そんな不安がこれから半年の間、朋子の胸から尽きることは恐らく無いだろう。

「ま、後は運命次第。神のみぞ知る、だよ」

「そうですね、先生」

「これから、きみの新しい人生が始まるんだ。だからその為に、この半年間を乗り越えよう」

「はい、先生。がんばります」

そうやって気休めの言葉を投げ掛ける以外、俺に出来ることは何も無かった。

入院中の十日間。朋子はじっと安静にして、時が過ぎるのを待った。一度として不満な態度や、沈んだ様子など見せなかった。ただじっと耐えてくれた。顔、体にも特に異常は見られず、順調な経過だった。一先ず安心、といった所である。

これからギブス着用のまま帰宅してもらい、今後半年間およそ十月まで、自宅療養してもらおう。勿論その間、俺が定期的に朋子の家に出向き、ギブスを外して顔の変化のチェックをする。その顔は本人は勿論、夏江、健一郎たちにも見せられない。グロテスクさへの、ショックが大き過ぎるからだ。俺でさえ、ほんの一瞬拝むだけ。それでも俺の脳裏に刻まれたその残像の恐ろしさの余り、情け無いが夜中にトイレにも行けなくなるし、悪夢にうなされたりもするのだが……。

(八・二) 彼岸まで

(八・二) 彼岸まで

一九八一年五月十一日、朋子は二十三歳になった。

整形手術後初めての誕生日であり、また術後初めて自宅で迎える朝でもあった。昨夜退院。深夜そのまま両親と共にタクシーに乗って、ひっそりと寝静まった品川のマンションに帰宅した。そして本日、無事自宅にて誕生日の朝を迎えた、という訳である。ギブス越しではあるが、夏江と健一郎に温かく見守られながら、朋子は生まれ変わった気持ちでその朝を迎えた。

今日から、もう一度人生をやり直そう。

そう心に固く誓い、回復までの長く苦しい日々を必ずや耐えてみせる。朋子はそういう覚悟でいた。確かにこれから十月まで、孤独な戦いの日々が続く。勿論薬物投与に対する肉体的な戦いなのだが、その間精神的にも不安や恐怖が襲って来るものである。それを俺たち周りの人間が、しっかりとサポートして上げなければならない。

六月。暑い季節が始まり、そしてジメジメした鬱陶しい梅雨が訪れた。それでも朋子は相変わらず愚痴ひとつ零さず、ギブス着用による痒みや不快感、そして蒸し暑さにも耐え忍んだ。それまでの人生でずっと精神的辛苦に耐えて来た朋子にとって、肉体的苦痛は何とか耐えられるものであったようだ。といっても並大抵の忍耐では、とてももたなかっただろうが。むしろ精神面での苦悩が、朋子には大きかった。

現に体調の方は順調そのもので、顔の変化も順調、何ら問題は生じなかった。七月、梅雨が明け、本格的な夏の到来。そして八月、それでも朋子は暑さ、痒みにじっと堪えた。

では朋子の精神的苦悩とは何か。勿論これからの人生への不安がないわけではない。しかしそれ以上に朋子は、手術したことへの後悔を抱いていたのである。

後悔……。これからどんどん変化し、やがて新しい顔になるであろうことに、何ら不満はなかった。むしろ嬉しく、ワクワクさえしていた。しかしそれとは別に、以前の自分の顔と自分が背負ってきた苦悩の人生とを捨ててしまった、否定し放棄してしまったのではないかという罪悪感……。これが灰色の雲のように、朋子の心を覆ってやまないのであった。

本当にこれで、良かったのだろうか？ どんなに辛く苦しくても、矢張り生まれたままの自分の顔と、その人生、即ち自分の運命をまっとうしなければならなかったのではないか？

勿論そこには信仰するまでには至らなかったが、高校、大学を通じて学んだ宗教、神というものの存在が、朋子の心の片隅にあったのは言うまでもない。

自分は何のために、生まれて来たんだろう？ どうして、ダダ顔で生まれたのだろうか？ 罪、魂、因果応報、輪廻転生、生まれ変わり……神、神様……。

大学のチャペルで、跪いて祈る。祈っている。そんな夢を、朋子は幾夜も見、はっとして目が覚めた。葛藤ともがき。それは肉体的苦痛にも匹敵する、苦しみであった。

そんな日々の中、夏が終わり、季節は秋へと移り変わった。そして遂に十月が訪れた。

手術は大成功！ 朋子の顔は新しい顔へと、見事変貌を遂げたのである。これで手術の終わりからずっと装着していた、ギブスともお別れ。いよいよ朋子は新しい顔で、新たな人生の第一歩を、踏み出すに至ったのである。

(九)

(九・一) 新しい顔

(九・一) 新しい顔

朋子二十三歳の秋、十月。

手術の日から、遂に半年が経過した。その間朋子の顔全体を覆っていたギブスを、いよいよ外す時が訪れた。息を呑む緊張と不安の一瞬だ。場所は、朋子の子の家の自室。朋子は鏡を置いた机の前の椅子に、腰を下ろした。

「いいかい？」

「はい、先生。お願いします」

先ず俺の手で、朋子のギブスを取る。ほっ。俺は胸を撫で下ろした。今日に至るまで、幾度となく朋子の顔をチェックして来た。順調であること、何も問題のないことは既に確認済みの俺だったが、この瞬間は何度経験しても緊張するものだ。

ふう、良かった！

俺は心の中で歓喜の声を上げ、そして神に合掌した。今度は朋子が、恐る恐る目を開ける。この瞬間から新たに、朋子のすべてが始まるのだ。

朋子は眩しそうに、見慣れた筈の部屋の中をゆっくりと見回した。緊張した面持ち。当然のことだ。そして更に恐る恐るその視線を、自らの目の前にある鏡へと向けた。

はっ、と息を呑む。

驚き。でも無言。だが次の瞬間に朋子の顔が、その表情が、ぱっと輝きに満ちるのを俺は見逃さなかった。

「先生……」

「ああ、良かったね。ぱっちりだ」

俺は悪戯っぽい少年の笑顔で、朋子にウインクした。

「はい」

朋子の瞳には既に、涙が溢れていた。

「あーあ。泣いちゃったら、折角の顔が台無しだぞ」

「嫌だ、先生。台無しだなんて。そんな恐ろしい言葉、使わないで下さい」

「あっ。ごめん、ごめん」

しかし朋子の声は、喜びに溢れていた。朋子はハンカチで涙を拭いた。

鏡に映る朋子の顔。それは現代の美容整形医学が誇る最先端テクノロジーをも遥かに超越した、遺伝子操作技術の結晶であった。鏡には確かにもうダダ顔ではない、ごく普通の顔が映っていた。そして母夏江の若かりし頃の、面影が確かにある。

これが、わたしの顔？

朋子は幾度となく、自分の顔を確かめずにはいられなかった。じっと目で見詰め、手で、指で触れながら……。

本当に、これがわたし？ わたし、こんな顔でいいのかしら？ 丸で夢を見ているよう。夢なら、どうか覚めないで……。

躊躇いがちに俺は、朋子に声を掛けた。

「じゃそろそろ、ふたりに入ってもらおうと思うんだけど。どうかな？」

ふたりとは無論、夏江と健一郎である。

「はい。先生、お願いします」

朋子の声は、明るかった。こんな声、生まれて初めて聴くぞ！ そう思わせる程に、明るく快活で陽気……。

夏江と健一郎を、部屋の中に招き入れた。ふたりは今か今かとさっきからずっと、朋子の部屋の前で待ち侘びていたのである。いよいよ整形から半年の空白を置いて、我が娘の新しい顔を拝もうという訳だ。

「お父さん、お母さん」

恐る恐るふたりに微笑み掛ける朋子。その顔を初めて目にした時の、健一郎と夏江の顔といったらなかった。啞然として朋子の名を呼ぶ以外、一言として声を発することが出来なかった。

「朋子……」

「朋ちゃん……」

そしてふたりの瞳も本人同様、溢れ来る涙に濡れたのだった。

「わたしの若い頃そっくり！ ね、お父さん」

「ああ、ほんとに……。でも先生！ 本当に凄いですね」

感嘆の声を上げながら、健一郎は興奮の余り俺の両手をぎゅっと握り締めて来た。

「まあ、そうですね。ここまで上手くいくとは、良い意味で予想外ですよ」

照れ臭そうに答えた俺。しかしまあ、ほんとに成功して良かった。これにて、一先ず俺のお役は御免だ。それではみなさん、ごきげんよう……。

という訳で、俺はそそくさと退散させてもらった。

こうして普通の顔として、生まれ変わった朋子。これでもうわたし、本当に戦わなくていいのね……。朋子は思い切り胸を撫で下ろし、安堵したのであった。

(九・二) 二の足

(九・二) 二の足

しかしながら手術後、ずっと顔にギブスを被っていた朋子。当然のことながら自宅に戻って以降、外出したことは一度もなかった。整形後、外の世界に飛び出したことは、まだ一度としてなかったのである。

でもこうして手術は成功。ギブスも外した以上、いつまでも家の中に閉じこもっている訳にはいかない。そもそも勿体無い。だからこれから新しい顔で、いよいよ外へ飛び出してゆくぞ！ と行きたい所。

だが朋子は、二の足を踏んだ。

新しい顔に狂喜し、舞い上がったのも束の間。冷静になった朋子は、外の世界に出てゆくことを恐れた。しかし当然と言えば、当然かも知れない。

……今迄のわたしを知らない人たちなら兎も角、近所の人たちも友人、知人も、みんな以前のわたしの顔を知っている。そんな人たちが、今のわたしを見たらどう思うだろう？ 先ずわたしだと、気付かないのでは？ そしてわたしだと聞かされた時、一体何を思うかしら？ あっ、整形したんだ……。そして整形したわたしを、どう思うだろう？

軽蔑？ 馬鹿にするだろうか？ それとも同情？ いや、わたしに気を遣って、何て言えばいいのか、どんな顔をしたらいいのか、正直反応に困るのではないか？ まさかこっちから明るく「わたし、整形しちゃいました。似合ってます？」なんて言えないし……。ああ、他人の目を気にしなきゃならないなんて、これじゃ今迄と同じだわ。でも、でも慣れてしまえば。お互いに慣れれば、何とかなるかも知れない……。

でもやっぱり辛い。どうしても、以前の顔と比べられてしまう気がする。それに意地悪な人がいて「あの人が昔は、こんな顔だったんだよ」なんて、暴露されたりしないだろうか。

あゝ、本当に嫌だ嫌だ。わたしいつまで、こんなことを気にしなきゃならないの？ こんなことをいつまでも気にしながら、生きていかなきゃなんないのかな？ これから先も、ずっと……。

更に不安と恐怖なら、他にもあった。鏡を覗く前に一瞬脳裏を掠める、また元の顔に戻っていないだろうか？ 或いは、顔がぐちゃぐちゃに崩壊しているのではないか？ という恐怖である。そんなことを夢の中でも見てはうなされ、朝目を覚ます度に怯えた。

そして鏡を見るのが、恐くなった。加えて相変わらず後悔、罪悪感も引きずっていた。

あーあ、何てことだろう。折角、整形したのに。これではいつまでも元の顔を引きずったまま、心はちっとも安らかになれない。これじゃ何の為に整形したの？ 折角普通の

顔になれたのに……。これも因果応報かしら。神様が今のわたしを見て、意地悪そうに笑っている気がしてならない。本当に神様って、意地悪ね！ 運命って、何て過酷なんだろう……。はしゃいでいた気持ちは、いつのまにか何処かへ吹っ飛んだ。

結局こうしてうじうじとネガティブな感情に、頭を抱え続ける冊子であった。

(十) 熊谷

(十) 熊谷

でも、いつまで悩んでいても仕方がない。兎に角思い切って、外へ出てゆかねば!

そこで朋子は、引っ越しを決意する。

やっぱりこの町じゃ暮らせない。このままじゃ人の目口ばかりが気になって、普通に暮らす事なんて到底不可能だわ。勇気がなくて情けないけど、背に腹はかえられない。それでも新しい生活を始めないよりは、遥かにましでしょ……。

手術前に思い描いていたように、家を出て、単独で見知らぬ土地へ行く。そして生まれ変わったつもりで今迄の自分と決別し、新しく一から出直すのだ。

先ず、学生時代の友人たちに引っ越しする旨伝えた。新しい引っ越し先は決まり次第、追って連絡する。それだけを伝え、整形したことは黙っていた。

次に正直な心境を夏江と健一郎に打ち明け、相談に乗ってもらった。貯金などない朋子であるから、当然引っ越し費用だって有る筈がない。ふたりに頼る以外にないのだ。場所は何処だって良いし、贅沢など言わない。ワンルームの安アパートで構わないから……。

「そうね。朋ちゃんがそうしたいなら、そうする?」

夏江の言葉に、健一郎も頷いた。

「でもお父さん。いきなり朋ちゃんひとりじゃ、心配だわ」

「それもそうだな。何だかんだで、この家から離れて暮らした事、なかったもんね」

「うん」

朋子は神妙な顔で頷くしかない。

「朋ちゃん。一人暮らしは、思ってるより大変なのよ」

「分かってる。覚悟は、してるつもり……」

朋子は真剣な眼差しで、二人を見つめ返した。

「でも、やっぱり心配」

「うん。じゃ最初のうちだけ、夏江と一緒に住むってのはどう?」

「でも、あなたは?」

「俺? 俺は仕事があるからなあ。ひとりでここで暮らしてるよ。なあに、そんなに永い事じゃないんだから」

「そうね。じゃ、そうしょっか? ね、朋ちゃん」

「うん、ほんと御免なさい。お父さん、お母さん」

「いいから、いいから。気にしない、気にしない。ね、朋ちゃん」

こうして健一郎と夏江の協力と理解を得た朋子。早速夏江と二人で、引っ越し先を探した。最初は都内でと思っていた。が、二人で暮らす訳だし、たまには健一郎も呼びた

い。となると最低でも二間は欲しい所だが、都内だと賃料が高い。かといって安アパートでは、若い女が住むのに防犯上心配である。じゃ探す範囲を、都内に通える首都圏に拡大しよう。となった。でも何処が良いかしら？

そこで思い付いたのが、高崎線沿線。埼玉県本庄市に、健一郎が勤務する沖電気の本庄工場が在る。そこに健一郎が今迄幾度となく、出張していたからである。早速、高崎線沿線の物件情報を調べた。すると熊谷駅周辺に、幾つか良い物件がありそうだった。

早速朋子は積極的に行動し、夏江と共に熊谷駅まで出掛けた。生まれて初めて熊谷駅に降りた時、朋子は不思議にその街の空気に懐かしさを覚えた。デジャヴュというやつである。同時に朋子は、この町で良い物件が見付かりそうな予感がしてならなかった。

すると予想通り、直ぐにいい所が見付かった。しかもそこは集合住宅ではなく、平屋建ての手頃な貸家だった。熊谷駅から徒歩十五分の閑静な住宅街の中にあり、小さいが庭まである。朋子も夏江もすっかり気に入った。

「いいわねえ。ここなら、のんびりと暮らせそう。どう、朋ちゃん？」

「うん。なんか我が家って感じで、とっても落ち着く」

静かな、そして誰一人自分を知る者のいない街と人々である。新しい顔で新しい人生を歩み始めるのに、これ以上ない最高の場所ではないか！ 朋子にはそう思えた。

(十一) 引っ越しと就職

(十一) 引っ越しと就職

朋子二十三歳の十一月。

「じゃ、お父さん。しばらく寂しくなるけど、何とか一人でがんばってね」

本人以上にはしゃぐ夏江と共に、朋子は熊谷の貸家に引っ越した。女二人だけの世帯だと思われないように、家の表札は『雪川健一郎』とした。近所への引っ越しの挨拶は、朋子ひとりで回った。それが新しい顔になった明子としての新しい生活の第一歩、他人との交わりのスタートでもあったからである。

住まいが決まり、役所の手続きなど終えたら、いよいよ求職である。朋子は熊谷市の職安、今で言うハローワークに通い、求人情報に目を通した。すると熊谷駅近くにあるダイエーが、レジ係を始めとして複数の求人を出していた。家から徒歩十分の近さである。

レジ係かあ。しっかりした会社のようにだし、悪くないかも……。大学時代の就職活動を思えば、最早失う物など何もない。当たって砕けろ！

気持ちが前向きになれたこともあり、朋子は思い切って応募してみることにした。早速電話すると、面接に来て下さい、とのこと。朋子は新しい顔で初めての写真を撮り、履歴書に貼り付けた。それを持参して、指定された日時にダイエーへと赴いた。

履歴書の学歴欄には正直に最終学歴の聖星学院女子大学卒と記したが、職業欄は空白である。大学を卒業し、もう十一月。面接では先ず第一に、その点を問われた。

「卒業されてから今日まで、お仕事はなさらなかったのですか？」

勿論正直に、整形した、とは言えなかった。体調不良ということにしようと、あらかじめ夏江たちと話していた。朋子は冷静に答えた。

「はい。実は体調を悪くしまして。少し前まで、療養しておりました」

「そうでしたか。で体の調子は、もう良いのですか？」

「はい。今はもうすっかり」

「それは良かったですね。それで、今回うちに応募して下さったと？」

「はい。ですので、まだ社会人未経験なもので。いろんな点で、未熟だと思うのですが」
しかし面接官の言葉は、決して否定的ではなかった。

「今迄の経歴や、経験の有無は問いません。やる気がお有りでしたら」

「やる気でしたら……。それだけは有ります」

朋子の実直な返答に、面接官は和やかな笑みを浮かべた。雰囲気、感触的にも悪くなさそう。もしかしたら、いけるかも。生まれて初めて朋子は、求職に希望を抱いた。

「ただうちが募集してる職種は、正直単純な作業ばかりで。あなたのような高学歴の方には、少々物足りないかも知れませんよ」

しかし朋子はかぶりを振った。

「いいえ、どんな仕事でも構いません。今のわたしは一日も早く社会に出て、働きたいのです」

「そうですか。では、分かりました。そうですね、あなたも早く働きたいでしょう。では、うちで働いてみますか？」

「本当ですか」

良かった……。込み上げる喜びを、朋子は懸命に抑えながら答えた。

「有難うございます。是非、お願いします」

こうしてその場で、レジ係としての採用が決まった。その日は職場を見学し、帰宅した。

その夜は夏江と二人で、ささやかな就職祝い。ワインで乾杯し、ケーキをお腹一杯頬張った。健一郎に連絡すると、子どものように喜んでくれた。

よし。これからはここで、この街で仕事をしつつ、ひっそりと生きてゆこう。そしてそのうちお父さんが退職したら、こっちに呼んで、三人で仲良く一緒に暮らすのだ。ふたりが年を取ったら、わたしがちゃんと面倒を見る。そしてこの人生を、わたしなりに全うしよう……。

我が事のように喜んでくれる夏江の笑顔に向かって、秘かに心の中で手を合わせながら、そう誓う朋子であった。平凡な普通の生活がしたい。その、朋子のささやかな願い、夢は、今やっと始まったばかりである。

(十二)

(十二・一) レジ係

(十二・一) レジ係

十二月、朋子はダイエーのレジ係として働き始めた。基本は一階食品売り場のレジ係であるが、忙しい時は五階にある日用品売り場のフォローもする。世の中まだ、週休二日制が始まる以前の時代であった。が最初から無理はしない方が良く、朋子だけ週二日休みを取るよう言われた。朋子としても体調より顔の方が心配だったので、喜んで受け入れた。その為、土、日を含む週五日、朝から夕方まで一日フルに働く。そして平日に二日休みを取った。

最初は緊張と失敗の連続だった。働くこともレジ操作も接客も、全てが初めての経験だったから。しかしそれ以上に、矢張り手術した顔への不安が大きかった。

当然ながら、まだ新しい顔には慣れていない。またずっと掛けていたマスクも外している。それらへの違和感があった。それにダダ顔だった頃の、何事にも消極的だった性格と習慣、言動。それらを引きずり、つつい行動にブレーキが掛かった。大きな声が出せなかったり、笑顔がぎこちなかったり……。

それでも徐々にではあるが、段々と慣れて来た。そして一ヶ月過ぎる頃には、何とか職場の人とのやりとりがこなせるようになった。その為周りからは内気で控えめ、どちらかという口数の少ない大人しい人間と見られた。しかし朋子は、それで良い、むしろ好都合と、気にすることなく受け入れていた。むしろ自分から無意識のうちに、そんな人物を演じていたのかも知れない。

わたしは毎日、一日一日を精一杯生きられたら、それでいいのだから。他には何も望まない……。朋子は決して、初心を見失わなかったのである。

年の瀬とあって、ダイエーの店内はいつも大賑わい。商売繁盛で朋子も毎日忙しかった。

「雪川さん、ごめん。休憩、三十分ずらしてくんない？」

「はい、いいですよ」

朋子は嫌な顔ひとつ見せず、素直に従った。というか断るのがまだ、恐かったのかも知れない。

特売品のコーナーにはクリスマス商品が並び、休みに入った学生や子どもたちが連日押し寄せた。家族連れ、老夫婦、単身客……様々な客層が訪れた。お昼前や夕方は、食材を求める主婦の列がレジの前に出来た。

「いらっしゃいませ」

まだバーコード対応前の時代だったから、商品の値段を打ち込み、金額を伝える。

「三千四百二十九円になります」

代金を受け取り、お釣りとレシートを渡す。その時お客さんの手に触れたり、触れなかったり。触れた時は何だか恥ずかしくて、頬が赤らむ純情な朋子だった。

「ありがとう、ございました」

そして丁寧にお辞儀。確かに単純な作業ではあったが、朋子が手を抜くことは一切なかった。一人一人に対して、それは健気な程に実に丁寧な対応をしたのだった。

接客とは言っても特にトラブルがなければ、シンプルなやり取りの繰り返しで済む。レジの前には常に人が並ぶから、お客さんとのんびり世間話をする余裕などない。暇な年寄りに話し掛けられて真面目に受け答えなどしていると、後ろに並んだ客から怒鳴られたりするからだ。だからいつも「いらっしゃいませ」、「ありがとうございました」で終わり。それでも少しずつ、顔馴染みの客も出来て来る。

「今日は、めっちゃ寒いね」

「そうですね」

「もうレジ慣れた？」

「はい、何とか」

一言、二言、親しげに声を掛けてもらえると嬉しい。もっと多くの人と親しくなりたい気持ちも湧いて来るが、朋子はやっぱりつつい顔のことが気になって消極的になる。こんなことの繰り返しの毎日で、気付いたらいつも日暮れ時。

あゝ今日も何とか一日、無事に生きられた！ 良かったなあ……。

そしてトボトボと帰路に就く朋子だった。

そんな朋子が親しくなる従業員やお客さんは、みんな女の人ばかり。偶に男性もいるけれど、みんな中年か年寄りばかり。詰まり恋愛対象外の相手ばかりなのであった。これは本人が同年代の男を意識的に避けていた結果であり、その理由は恋愛関係に陥らない為であった。

昔の顔ならばそんなことを意識する必要もない程、男に関心を持たれることは絶無だった。しかし今はもうそうはいかない。だから若い男に声を掛けられても、朋子は極力無愛想に受け答えした。何なら左の薬指に、指輪をしておきたい位だった。さすれば、言い寄る男も減るであろう。

折角手術したのに勿体ない。そんな気もするが、本人がそれで良いと思っているのだから仕方がない。朋子はただひたすら平穏無事を望み、夏江と健一郎との生活を大事にしていたのである。

(十二・二) 家族団らん

(十二・二) 家族団らん

わざわざ自分の為に華やかな東京を離れ、一緒に暮らしてくれている夏江。その気持ちに少しでも恩返ししようと、朋子は可能な限り夏江と共に過ごした。

以前の顔では二人並んで外出することも殆どなかったから、母娘はふたりでの外出を思い切りエンジョイした。失った朋子の少女時代を、ふたりで取り戻すかのように。近所の人に、母娘でなく年の離れた姉妹ですか？などと尋ねられると、照れ臭さを乗り越えて、朋子は騙しているような罪悪感すら覚えた。

仕事から帰宅したら、ふたりで晩ご飯をこしらえ、TVを見ながら食事。あれやこれやと他愛無い世間話をするのが、楽しくてならない。ごく普通の親子、何処にもある普通の家族の団らんである。休日は近場の観光地に出掛けたり、ダイエーでショッピング。ダイエーの近くには御稜威ヶ原(みいずがはら)公園という大きな市民公園があり、二人はいつもそこに散歩して、のんびりと時を過ごした。

「ねえ、見て、お母さん。あの犬、かわいい」

「ほんと。うちも飼いたいね」

「うん。でもペット飼えたっけ、うち？」

「駄目だったかな？」

日曜日には、東京から健一郎が遊びに来た。でも朋子は仕事であるから、昼休み、家に戻り三人でランチを摂って過ごした。

「嫌な客とか、いないのか？」

「たまにいるけど、平気。もう慣れちゃった」

「そうか」

元氣そうに話す朋子の様子に、健一郎は安堵した。夏江と朋子の笑顔は、普段都会で単身でいる健一郎の寂しさを癒やしてくれた。

「ふたりを見てると、のんびりしてて羨ましいなあ。俺もこっちに来たくなりそうだ」

「いっそ、本庄工場に転勤しちゃえば」

「ああ。それとなく希望、出してみるか」

「でも、たまには東京にも行きたいし。その時宿泊する場所があるのは、便利よね」

「おいおい、丸でホテル代わりだな、俺？」

ぼかぼか陽気の縁側で、三人で笑い合える。こんな日が来るなど、以前の朋子なら想像すら出来なかったことである。

海野先生、本当に有難うございます。

そんな時朋子は、いつも俺のことを思い浮かべ、心の中で合掌してくれるのだった。

(十二・三) アフターケア

(十二・三) アフターケア

そんな俺の渋谷の病院へ、最低でも月に一回は来てくれ、と言ってある。手術後の経過、異変やトラブルはないかチェックしたかったし、朋子の心のケアもしたかったから。「今のところ、特に問題はありません」とのことだから電話だけでも良かったが、俺としては実際に朋子の顔を見ておきたかった。その方が安心と言えれば安心。だから遠距離ではあるが、年内にもう一度会わねばと思っていた。

熊谷に引っ越してから朋子が初めて俺の所に来たのは、クリスマスの週の朋子の休日だった。夏江と共に上京し、朋子が診察の間、夏江は渋谷を散策しているとのこと。

俺は朋子の顔の具合、特に目、瞼、口の中、顎を入念にチェックしつつ、生活の様子を聞いた。確かに今の所、顔、肉体面での不具合はないようだ。

「先生。本当にわたし、先生には感謝で一杯です。もしあの日渋谷の街で、先生にお会いしてなかったらと思うと……」

「いいから、いいから。もう気にしない、ね。会う度にそう言われると、流石の俺も照れ臭いや。でも朋ちゃんは本当に、真面目だね」

「いいえ、わたしなんか」

「本当に困ってる事とか、ないの？ 俺には何でも本音で、話してくれて良いんだからさ」

「はい。そうですねえ……」

朋子は窓から見下ろす道玄坂界限の人通りを眺めながら、考え込んだ。そして口を開いた。

「強いて言えば」

「うん」

「朝起きた時、やっぱり今でも、緊張しちゃいますね」

「緊張？」

「ええ。ひょっとして、元の顔に戻ってイヤしいかって……」

「あゝ」

俺はため息を吐いた。

「正直、鏡を見るのが怖いんです、わたし。今でも、不安で堪りません」

そう言う朋子に、俺は大きく頷いてみせた。

「分かる、分かる、その気持ち。でもね」

俺は朋子の顔を見つめながら、続けた。

「みんな一緒だよ。俺が手術した人、みんなそう言ってる。うん、そうだなあ……」

俺は沈黙し、何か良い助言はないものかと思いを巡らせた。

朋子が沈黙を破った。

「先生。それから……」

「それから？」

「後悔ですね、後悔。やっぱり後悔してしまうことも、時々……」

「後悔か。確かに、それもああるねえ」

「後ろめたいっていうか、どうしても、後向きになってしまう自分があります。罪悪感って言うんでしょうか」

朋子と肩を並べ窓辺に佇みながら、俺も道玄坂の人波を見下ろした。

「でもみんな、おんなじなんじゃない？ 整形の有無なんか、関係なく。人間だったら、誰でもさ」

「はい」

「やっぱりみんな、多かれ少なかれ、何らかの後悔を背負ってさ。過去を引き摺りながら、それでも前を向いて歩いていこうって、必死になってる。それが人間、人生ってもんじゃないかなあ？」

「そうかも、知れませんね」

「俺だって、同じだよ」

「先生もですか？」

「ああ勿論だとも。俺にだって、そりゃ後悔のひとつやふたつは、有るさ」

「そうですか……。そうですよね、やっぱり！ 誰にでも有りますよね、後悔って。分かりました」

朋子はじっと、俺を見つめながら続けた。

「だって、わたしが後悔してるなんて言ったら、手術して下さった先生だって、後悔しちゃいますよね。すいませんでした」

「そんな、良いんだよ。俺になんか、謝らなくて。これからも俺には何でも、愚痴って良いから」

「はい。有り難うございます」

「まだきみは、二十三だっけ？」

「はい」

「まだまだ、これからじゃないか。いろんなことが、これから起こる筈だよ、きみの新しい人生。だってやっと今、始まったばかりなんだから」

大丈夫ですよ。そう言わんばかりに、笑みを浮かべながら、朋子は無言で頷いた。本当に大丈夫？ 不安ではあるけれど、兎に角精一杯、朋子を励まそうと俺は努めた。

(十二・四) 初雪

(十二・四) 初雪

ダイエーの仕事にも慣れ、朋子は無事熊谷で年を越した。

大晦日、三ヶ日は、健一郎が熊谷の家に来て、三人で過ごした。と言っても元日こそ休みだったが、朋子は大晦日も一月二日から出勤。その為、余りのんびりは出来なかった。それでも朋子は働ける喜びを忘れず、普段より忙しいレジを笑顔でこなした。

初雪は、正月三ヶ日を過ぎて直ぐのことだった。熊谷は東京よりも雪が多く、そして積もった。雪が珍しい朋子は寒さも忘れ、外に出て雪と戯れた。仕事の休憩時間、一人御稜威ヶ原公園のベンチで休んでいると、ちらほらと粉雪が。見上げると、年明けからずっと晴れていた空の青さはなく、灰色の雲が上空を覆っている。掴まえるように手を伸ばす朋子の掌の上で、雪の欠片が、儂くもしゅーっと融けてゆく。その姿が切なく、いとおしく思えてならない朋子だった。

丸で運命に翻弄された、わたしの人生のよう。儂く散っていった、わたしの夢や想いの数々……。

寒さに震え、荒れ狂う風に吹き飛ばされ、それでも雪は純白の輝きを失わない。凍える冬の寒さの中で、朋子も強くあろうと願った。

「さあ、仕事頑張ろう」

眩く朋子の息は白かった。

忙しかった正月が終わり、二月になると寒さは一段と厳しさを増した。流石の朋子も、朝ベッドから脱け出すのが億劫だった。夏江に起こされ、渋々店に向かう。そんな朋子を励ますように、御稜威ヶ原公園では梅の花が開き、水仙も木枯しの中に黄色い波を揺らしていた。こんな寒い中でも咲く花があるのだな、と感心しつつ、朋子は足を止め見入った。

(十三)

(十三・一) 二十四歳

(十三・一) 二十四歳

熊谷の厳しい冬が終わる頃。すっかり仕事にも日常生活にも慣れた朋子は、自分なりに我が人生を謳歌していた。

そして春。新しく生まれ変わった朋子にとって、観るもの、聴くもの全てが新鮮だった。冬の間幾度となく雪に埋もれた御稜威ヶ原公園の木々も土も、今は眩しい陽射しの中。生命が芽吹き、動物も虫たちも生き活きと動き出す。

朋子は空を見上げ、澄んだ空気を吸い込み、地上を見渡した。空の青さ、大地の緑。全てが眩しい。あゝわたしも今、生きているのだ。そう実感し、すべての生きものの姿がいとおしく思えてならない。公園では黄色い菜の花の波が揺れ、風に吹かれたタンポポの種が大空へと飛翔する。

そして桜である。四月にもなると、公園の桜は満開。あちこちで花見に興じる人々のざわめきを耳にしなが、朋子も桜の美しさに魅了された。あゝ何て美しいのだろう。こんなにも桜の花が美しかったなんて……。今迄一度も、感じたことなかったわ。

去年まで顔を見られないよう人目を避け、ただひたすら下を向いて生きて来た朋子である。しかし今朋子は顔を上げ、華々しく咲き誇り風に舞い踊る、桜の姿を見つめていた。同時にあんなに美しい桜の花も、あつという間に散ってしまうのだ。生命とは何て儂いものなのだろう。そんな想いを強く抱き、以前自ら命を絶とうと願っていた自分を省みた。

もしあの時死んでいたら。もう自分は今、ここにはいなかったのだ。本当に儂い。だからこそ、今こうして許された人生を、自分なりに精一杯生きてゆかねば。そして何よりも、年老いてゆく両親を大切にしよう……。決意を新たにす朋子であった。

休日は相変わらず夏江と出掛け、映画やコンサート、ショッピングを楽しんだ。いつものまにか人込みの中も苦にならなくなっている自分に驚き、また嬉しくてならなかった。

五月。朋子は無事、二十四歳の誕生日を迎えた。朋子を祝福するように御稜威ヶ原公園の緑は萌え、五月の風が朋子の頬をやさしく撫でてゆく。

全てが、生命のエネルギーに満ち溢れていた。緑の葉の一枚一枚、降り注ぐ太陽の陽射しの一欠片一欠片が美しく、そしていとおいしい。あゝこの世界は何て美しいのだろう。さあ、わたしも今日一日頑張ろう。そしてそんな日々を、黙々と積み重ねてゆくのだ。この公園に生きる、木々や草花たちのように……。

振り返れば一年前、整形手術後の半年間をもがき苦しんでいた自分が懐かしかった。あの苦しみがあってこそその、今のわたしなのだ。あゝ全てが有り難い……。眩しい五月の空に向かって、手を合わせずにはいられない朋子だった。

しかし何もかもが順調という訳ではなかった。手術をしたことへの後悔が、どうしても朋子の心に重くのし掛かって来るのだった。

(十三・二) 御稜威ヶ原教会

(十三・二) 御稜威ヶ原教会

夏。朋子は元の顔の自分を、夢で見るようになった。そしてはっとして、夜中に飛び起きた。涙が溢れた。なぜなら自分の顔でありながら、恐かったからである。

以前の自分の顔なのに。否、本当の自分の顔だったのに。なぜ？ 今迄ずっと、あの顔で生きて来たじゃない？なのに、どうして？ 何て愚かな、わたしなの……。

その夢のことは努めて気にしないよう心掛け、朋子は周りの人と明るく接するように努めた。紫陽花や向日葵の咲く御稜威ヶ原公園に出掛け、花火大会にも出掛け、お盆には健一郎、夏江と共に三陸の海へも旅行した。努めて元気に振る舞う朋子だったが、夏の海を見ても心は晴れなかった。どうしてもその夢への恐怖心を、振り払うことが出来なかったからである。

八月。俺との面会日が来ると、朋子は唯一俺にだけ、その夢のことを打ち明けた。同時に思いの丈を、俺にぶつけて来た。

「先生。わたしはやっぱり、あの顔から一生逃れられないのでしょうか？」

「んん、どうかな？ もしかして、きみの中の潜在意識が、単に夢に現れてるだけなんじゃないかな？」

「潜在意識ですか？」

「うん。だからきみが忘れない限り、と言ってもそれは無理な話だから……、そうだね。だからやっぱり一生、付き合っていくしかないのかも知れない」

俺の返答も歯切れが悪かった。病院の窓を開ければ、道玄坂の雑踏の喧騒に混じって、何処からか蝉時雨が聴こえて来る。

蝉時雨。朋子の好きな蝉……。

「先生。蝉は木の枝や葉に抜け殻を残して、さっさと新しい世界へ、飛び立ってゆけるのに……」

「それはどうかな。蝉も幼虫の頃の姿は、幽かにでも覚えてるんじゃない？」

「でも先生。蝉は鏡なんか見ないし、顔のことも気にしないでしょ？」

「そりゃまあ、そうだろうけど」

俺は苦笑いするしかなかった。果たして蝉は、幼虫の時代やその頃の姿を覚えているのだろうか？ 俺は多少、興味をそそられた。

だとしたら蝉は、その時代や姿を一体何ものとして認識しているのだろうか？ 単に過去の自分として、或いは現在の自分とは大きく隔たった生まれ変わる以前の、つまり前世の自分として……？

取り留めもなくそんなことを考えている俺に、朋子はまた質問して来た。

「先生。因果応報って、やっぱりあるんですよね？」

「うん、それはあると思うよ」

「先生は神様を信じてらっしゃると思いますが、具体的に信仰は、なさらないんですか？」

「俺？ 信仰かあ。そうだなあ……」

「何処か、教会に通ったりとか」

実はその頃朋子の心には、人智を越えた存在即ち神への憧れというか、神を慕う気持ちが芽生え始めていた。

と言うのも、熊谷の朋子の家からそう遠くない場所に、日本キリスト教・御稜威ヶ原教会というものがあつた。そこはステンドグラスの美しい小さな建物で、チャンスがあつたら入ってみたいと、朋子は常々思っていたのである。

「キリスト教は、生まれ変わりは否定していると、思うんだけどね？」

「でも、いいんです。わたし、キリスト教の奉仕精神、社会へのボランティア活動みたいな所が、好きなんです」

「そうか。じゃ、行ってみるのも良いかもね。新しい出会いが、あるかも知れないし」

すると朋子は顔をまっ赤にして、かぶりを振った。

「いいえ、先生。わたしは純粋に、神様と出会いたいだけです」

しかし新たな扉を開く勇気が湧かないのか、なかなか朋子の教会訪問は実現しなかった。

(十三・三) 二度目の冬

(十三・三) 二度目の冬

秋になり御稜威ヶ原公園は、セピアの色彩に染まった。コスモス、彼岸花、そして天国の如き金木犀の香り。

あゝ何てセンチメンタル……。感傷的になったり、物思いに耽けたりで、朋子が信仰の門を叩くのに、うってつけの季節であった。しかし時悪く、既に五十二歳の夏江が、肺炎を患ってしまったのである。

熊谷市総合病院に入院したり、自宅で静養したり。それに付き添った朋子も忙しかった。幸い夏江は健康を取り戻したが、季節は足早に冬へと移り、今度はダイエーが忙しくなった。

クリスマス商戦にお正月。連日残業が続いた。疲労は勿論、寒さも厳しく、つい出不精になり、休日は家に閉じ籠もった。暖かくなってからにしよう……。矢張り教会へ行くのは先延ばし。確かに冬は寒い。しかしその中でも、冬でなければ見られない美しさがあった。

雪である。御稜威ヶ原公園にも、幾度か雪が降り積もった。休けい時間に公園へ足を向けるのは億劫だったが、ダイエーの高層階の窓辺から街の雪景色が一望出来た。白一色。絶え間なく降り続く雪たちの群れ。子どもたちがこしらえた雪だるまが、街のあちらこちらに点在している。静かでも、厳かでもあった。

年が明けると、家の庭や御稜威ヶ原公園の梅の花が咲いた。また少し時が経つと、水仙の花も咲き誇った。わーっ、こんな厳しい寒さの中で咲くなんて、凄い。それまでは寒くて辛い冬が大嫌いだった朋子だが、段々と冬と雪が好きになっていった。雪は勿論だが、雪を被って咲く梅や水仙の花を、いとおしく思った。それらの姿が、過去の自分と重なって見えたのかも知れない。ただひたすら明日を信じて春を待ち、じっと堪え忍ぶ花たち。そして寒さの中であって、けれど確かに春の予感、ぬくもりを秘めた冬である。その中で、一心に降り頻る雪たちよ。その純白さ、健気さに朋子は憧れた。

そして遂に春。三月はまだ寒さが残ったが、四月には充分に暖かくなった。御稜威ヶ原公園の桜は満開。整形手術し新しい顔になって、新しい人生を歩み出して二度目の桜であった。その美しい姿に刺激を受けた朋子は、何度か御稜威ヶ原教会に足を向け、教会の門の前に立ってみた。しかしいざとなると、一歩前へ踏み出す勇気が出なかった。

そうだ、来月にしよう。二十五歳になったら、絶対に行こう……。そう誓いつつ、朋子はまた教会の門を叩く機会を失した。が教会を訪ねるといふ朋子の願いは、結局最後まで実現しないまま終わってしまうのであった。

(十四)

(十四・一) 出会い

(十四・一) 出会い

それは朋子が二十五歳の誕生日を迎えて、初めての日曜日の午後だった。ダイエーのレジに立つ朋子の前に、ひとりの男が現れたのである。

名を、三上哲雄と言った。三上はこの時既に四十五歳の、中年&独身サラリーマン。田舎の工業高校を卒業して上京し、東京は大井町にある電子光学メーカー、ニコンに勤めていた。

そんな東京にいる筈の三上が、なぜこんな熊谷のダイエーになど、のこのこやって来たのか？ それは、会社の拠点である熊谷工場への長期出張の為である。三上は会社が借りた工場近くのアパートに、仮住まいを始めたばかりだった。

三上は日曜日なので、仕事は休み。かといって、東京のアパートに帰った所で独り身。彼女がいる訳でもないし、楽しい事など何もない。面倒なので熊谷に残り、夕飯のおかずの材料でも買おうかと、ぶらりダイエーに立ち寄った。初めて顔を出した、という流れであった。

三上は基本、自炊生活。なのでおかずの食材を選んでカゴに入れ、レジへと向かった。が日曜の午後、生憎レジは混みまくり。三上は仕方なく、レジの列に並んだ。たまたまそこが、朋子のレジだったという訳。ところがこれが運命の悪戯。

自分の順番が来て、レジの台にカゴを載せた三上。この時朋子と目と目が合った。思わず三上はごっくん、と生唾を呑み込んだ。そして三上は、恋に落ちた。

おれ、この子、好き……。

でもぱっと見ただけでも、二十才位は年下だと分かる。そんな若い娘の朋子に一目惚れするなど、予想だにもしなかった三上である。そんな大それたことなど、夢にも願ったことはない。何しろ三上哲雄という男。今迄一度として、まともに女にモテたためしがない。それ故結婚は勿論、恋愛すら、とうの昔に諦め切っていた。そんな男である。そんな三上が何の因果か、今、現実に、朋子に惚れてしまったのであった。

では、朋子の方はどうか？

なんとこちらも三上を見るなり、体中に電流が駆け巡った。

わたし、この人、好き……。

それは理屈ではない、本能的ともいうべき衝動だった。朋子、生まれて初めての恋の予感。朋子だって勿論、相手の年が二十才以上は上だろうと直ぐに見当がついた。しかも如何にもうだつの上がらない、ショボい中年のへたれ男にしか見えない。加えて朋子もまた、恋愛に否定的と来ている。自らに恋愛を禁じることを課して生きているのは、皆様ご存知の通り。

ところが、ところがである。そんな朋子が恋に落ちた。三上と朋子の両方。ふたりともが、しかも同時に。正に運命の悪戯としか、言いようがないのである。

互いに相手を意識し合ったふたり。しかも恋愛になど慣れていないふたりのこと、両方とも思い切り硬くなった。朋子は兎に角ミスだけはしまいと、それだけを念頭に、三上に接客した。

「千三百五十円になります」

けれど朋子の声は、上ずっていたかも知れない。

「はい」

しかし三上は律儀に、お辞儀までして返答した。こちこちに緊張し、唇の震えるのを懸命に抑えながら。生憎小銭がなく、三上は千円札二枚を受け皿に置いた。

お釣り、である。釣りの受け渡しの時に、微かにふたりの手と手が触れてしまった。そして……。

「すみません」

殆ど同時にふたりは謝った。両方とも顔をまっ赤にしながら。丸でうぶな十代の恋愛を見ているようである。

「気にしないで下さい」

三上が返せば、朋子も。

「そちらこそ」

これがふたりの出会いであった。この日はこれでお終い。

(十四・二) 不思議な面影

(十四・二) 不思議な面影

立ち去り難き想いを引き摺りながらも、三上は朋子のレジの前から離れた。そりゃ混んでるし、後ろの客待ってるしね。

シャイで臆病な三上のこと、朋子の姿をじろじろ見たりなど出来ない。カゴの品をレジ袋に詰めると、さっさとダイエーを後にした。忙しく働く朋子の姿が眩し過ぎて、こっそりと覗き見しよう、などという下心も起きなかった。むしろ早くひとりになって、余韻に浸りたかった。出会いの余韻に、どっぷりと浸り切りたかった。そして動揺した心を落ち着かせ、冷静になって自分の気持ちを確かめたくもあった。本当にあの娘に、恋してしまったのか？ と。

とぼとぼと夕暮れの帰路に就く三上の手には、さっき朋子からもらったレジのレシート。そこにレジ係である朋子の氏名が、漢字で小さく印字されていた。

『雪川朋子』

「雪川、朋子。雪川、朋子さん……」

三上はつい足を止め、朋子の名を幾度となく繰り返し呟いた。

「朋子。朋子さん、朋子、かあ。いいなあ……」

仮住まいのアパートの部屋は、荷物など殆どなく殺風景。そんなひとりぼっちの部屋に帰っても、今夜に限って三上は少しも寂しくなかった。むしろ心は喜びに満ち溢れていた。朋子のことで、胸の中はいっぱいだったからである。

では朋子の方はどうか？ 勤務時間の終わりまで、きっちりとレジをこなした朋子。しかしその胸はずっと、さっき出会ったばかりの三上のことでいっぱいだった。

しかしこちらは、名前も何も分からない。初めて見掛けた客。そして何ら特徴のない、平凡なサラリーマン風の中年男である。にも拘わらず朋子にとっては、既に特別な存在となっていた。

初めて見た人だけど、よく来るのかしら？ それとも、今日だけ何か用事で……。また来るかしら、あの人、ここへ？ また、会えるかしら？ また会いたい、あの人に……。

帰宅しても、朋子の三上への想いは薄れなかった。

「朋ちゃん、何か良い事でもあったの？」

「えっ、どうして？」

問う夏江に驚いて、朋子も聞き返した。

「だって。何だか、浮き浮きしてるんだもん。そんな朋ちゃん、初めて」

「いやだ、何でもないよ」

照れ臭さをひた隠しながら、夏江との晩御飯を済ませた。後片付けを済ませると、これまた珍しく朋子は、さっさと自分の部屋に引き籠もった。

確かに普通じゃない。冷静な自分ではない、舞い上がっている、と朋子も自覚していた。自分でも呆れる程の、はしゃぎよう……。

これが、恋というものなの？

朋子の脳裏には出会った時からずっと、三上の顔が浮かんで離れなかった。

どうして？ さっき初めて会ったばかりなのに？ どうしてそんな人に、こんなに夢中になるの？ こんなに、心奪われてしまうなんて。やっぱり好きなんだわ、あの人のことが！ わたし、どうしよう？ また、あの人に会いたい……。

しかし同じ頃、三上は戸惑っていた。ひとり帰宅したアパートの部屋の中、心はさっき出会った朋子のことで一杯の筈。なのに三上の脳裏には、なぜか朋子の面影が一切浮かんで来なかったのである。流石に幾ら好きでも、初めて会ったばかりだから、忘れて思い出せないのだろう。そんなふうには三上は、取り敢えず納得した。

で三上が戸惑っていたのは、別の理由。それは朋子の代わりに、なぜか別人の女の顔が浮かんで来るのである。しかも朋子と出会った時からずっと。しかしその顔に、三上は全く見覚えがない。今迄一度として、会ったことのない女である。なのにその面影は一時として、三上の脳裏から離れることはなかった。

これでは三上が戸惑い、動揺するのも無理はない。そしてその謎の女の顔は、以後ずっと、三上の脳裏から消え去ることはなかったのである。

ではその女の顔とは、一体どんな顔なのか？ 三上は、こう呟いた。

丸でウルトラマンの、ダダみたいな顔だなあ……。

ダダ！ これが不思議な面影について、三上が抱いた印象である。

でも、どうして行き成りこんな顔が、浮かんで来るようになったんだろう？ しかも朋子さんと会った時からなんて……。一体この女の人は、誰だ？ 何者だ？

三上としては大いに気になる所ではあったが、それ以上に朋子への想いの方が大きかった。朋子への熱い恋心の方が、勝ったのである。三上の朋子への想いは日増しに強くなる一方で、いつしかダダ顔の女のことなど、気にする余裕も失くなった。

(十五)

(十五・一) 朋子、決意

(十五・一) 朋子、決意

初めて目と目が合った瞬間から、恋に落ちた朋子と三上のふたり。

その後も三上は、朋子会いたさの余り東京へは殆ど帰らなかった。週末は勿論、平日でも定時退社した日は、必ずダイエーへせっせと足を運んだ。それにより朋子の勤務状況も分かった。朋子の休日は平日で、土、日、祝日は必ず出勤している事等々。

朋子さんに会いたい。一目でも朋子さんの顔が見たい。そして可能なら、親しくなりたい……。

そんな一途な想いが、今迄恋愛に対して消極的だった三上を変えた。三上は大胆にも、必ずいつも朋子のレジに並んだ。たとえ朋子のレジが混んでいて、他のレジが空いていてもである。そんな時は俯いて、わざと気付かない振りをして誤魔化した。

だがいざ自分の順番になり朋子の前に立つと、緊張し口は思うように動かなかった。

「いらっしゃいませ」

「はい」

朋子の店員としての事務的な挨拶に、ぽつりと一言返すので精一杯。本当は天気のことでも商品のことも、兎に角何でもいから話がしたい。思い切って話し掛けたい……。だが出来なかった。勿論恋愛経験が少ないということもあり、なかなか店員と客という関係から抜け出せなかった。それでも次の日にはやっぱり、朋子のレジの列に並んだ。まったくひたむき、一途な三上青年、否中年おやじであった。

一方の朋子。三上同様、恋愛経験の乏しい朋子ではあったが、流石に三上が自分を意識しているのは分かった。何しろ朋子のレジにばかり並ぶのだから、幾ら鈍感でも気付かない訳がない。そして朋子もまた、三上を意識していた。意識しドキドキワクワクし、少女のようにときめいていた。

今日はあの人、来てくれるかしら。そしてわたしのレジに、並んでくれるのかしら……。

しかし朋子とて、恋愛には不慣れである。それに立場はあくまでも、お客と店員。客である三上に軽々しく話し掛けるなど、出来る筈がない。レジ自体忙しいし、周囲の目も気になる。それにそもそも三上がどんな反応を見せるか、不安でもあった。

確かに自分を意識してくれているようには思えるけれど、勘違いかも知れない。男心を解したことの無い朋子に、三上の本心など見当もつかない。一応既婚者でないことは左手薬指を見て確認済みではあるが、はっきりしているのはそれ位。

という訳で、朋子のテンションは上がったたり下がったりのジェットコースター状態。三上がやって来る夕方が近付くにつれ、落ち着かず、そわそわドキドキ。それでもせつ

せとレジ業務をこなしていると、遂に自分のレジの列に三上が登場。朋子は歓喜と興奮と不安の渦の中である。

三上の前の客をさばき、そしていよいよ三上とのご対面。しかし三上同様、朋子もちこちの緊張状態。従ってレジ係としての、最低限の受け答えをするので精一杯。

こうしてお互い不完全燃焼のまま、一日また一日と、朋子と三上の前を時間だけが過ぎていった。

しかしこんな日々が続いて三ヶ月が経過した、八月の或る日のことである。朋子は、自らの心の原点に立ち返る心境に至った。なぜかと言うと、きっかけがある。

それは休日の夜に、夏江と見ていた或るTV番組。特撮ヒーローの特集番組で、ウルトラマンや仮面ライダーが登場した。ふたりは何となく、胸騒ぎを覚えた。ウルトラマンのシーン。まさかダダ星人なんて、出て来ないでしょうね？ 内心ハラハラしながら、見ていた夏江と朋子のふたり。しかし案の定、ダダ星人がしっかりとTV画面に登場してしまったのである。ありゃりゃ。焦ったふたりは、一瞬沈黙……。

「あーあ、疲れちゃった。朋ちゃん、もう寝ましょう」

「うん。そうしよう」

白々しくさっさとTVを消すと、夏江と朋子のふたりは各々の部屋に引っ込んだ。

しかしひとりになった朋子は、三上のことで浮かれていた自分を、冷静に見つめ直した。

わたしは一体、何をしているのだろうか？ 男の人なんかを、好きになったりして。そんな恋愛感情なんか、現(うつ)を抜かしてちゃ駄目じゃない……。

必然的に朋子の胸には、忘れていた後悔と罪悪感が甦った。

ばかね、わたし。何やってんだろ？ しっかりしなきゃ、駄目じゃない……。

鏡に映る自分の顔に向かって、何度も何度も繰り返しそう呟いた。そして三上に夢中になっていた自分を責めた。ぼろぼろ涙が溢れて来た。

わたしは恋なんかしちゃ、駄目なの。誰かを好きになったり、好きになってもらおうなんて、望んじゃいけないのよ。そんな資格なんか、わたしには、ないんだから。分かってんの、ねえ、あんた？

厳しくただ厳しく、自分を罵る事しか出来なかった。朋子の顔は痛々しい程に、涙でいっぱい濡れていた。涙は頬を伝い、唇を顎を伝い、零れ落ちて床を濡らした。

だって、あの人は。あの人は、わたしの本当の顔を、知らない……。

その現実が、朋子に重く申し掛かった。涙に濡れ、目を充血させながら、朋子はそして決心した。

あの人のことはもう、諦めよう。そしてもしあの人が本当に、こんなわたしに、好意を持っていてくれたとしたら……。わたしのことなんか、さっさと忘れてもらおう。

(十五·二) 三上、三日坊主

(十五・二) 三上、三日坊主

朋子の決意は固かった。

やるしかない。絶対にやらなければ。あの人とわたし、ふたりの為に。兎に角あの人とは、あくまでも客と店員の関係でしよう。死んでもそれを守るのだ……。

次の日から早速、朋子は実行に移した。三上に対し、意識して無愛想に振る舞った。如何にも無関心、全く興味などないかのように。

「いらっしゃいませ」

「はい」

いつものように朋子のレジの前に並び、自分の番がやって来た三上。直ぐに、朋子の微妙な変化を感じ取った。

なんか違う、今迄と。妙に余所余所しいなあ、今日の朋子さん。何か、嫌な事でもあったのかなあ？

終始俯き、絶対に三上と目を合わせない朋子。

「千四百五十二円です」

ああ、何か声も冷たい感じ。事務的というのか……。どうしたんだろう、一体？

三上は恐る恐る朋子の顔を覗き見しながら、料金を渡した。しかしやっぱり朋子は、目を合わせようとはしなかった。しかもお釣りの小銭とレシートを、受け皿に載せて返して来る始末。

あらら。本当に駄目だ、こりゃ。今迄なら嬉し恥ずかし、手渡し、してくれたのに。

「有難う御座いました」

お辞儀のし方もやっぱり余所余所しい。あくまでも事務的な態度の朋子に見送られ、三上は渋々朋子のレジを後にした。

さあ！ 三上ちゃんお得意の、お悩みタイムの始まり、始まり。

なぜ、なぜ？ どうして？ もしかして、朋子さん……。浮かび来る悪い予感。

もしかしたら朋子の方も、三上に好意を持っているのではないか？ そんな淡い期待を抱いていた三上だったが、見事に裏切られた。そんな気分である。

あーあ、きっと彼氏、出来ちゃったんだよ。というか、元々恋人位いるだろ普通。あんなに素敵な子なんだから……。どうせ俺なんか冴えない中年男だし、やっぱ眼中に無いよなあ、俺なんて。あーあ、期待した俺がバカだった……。

しばんだ気持ちを引き摺りながら、それでも念の為、次の日も朋子のレジに並んだ三上。昨日の彼女は、偶々機嫌が悪かっただけなのかも？ 今日はまた、今迄の朋子さんに戻っていてくれないだろうか……。

しかしそんな三上の祈るような願望は、無残にも打ち砕かれた。やっぱり朋子の三上に対する態度は、昨日同様冷たい限り。三上はもう二度と立ち直れない程に、意気消沈するのみだった。

あーあ、やっぱり駄目か。きつこく彼女のレジに並ぶ俺のことが、嫌になったんだらうなあ。どうしよう、俺……。

落胆した三上は、仕事も手につかなかった。こうなると単身アパートの侘しさが、身に沁みて来る。しかしこんな精神状態でも三上の脳裏には、例のダダ顔の女の顔がやっぱり浮かんで来るのだった。しかもその表情たるや以前に比べ、何とも言えず悲しげでならないのである。

仕事から帰って来た時のこと。ひとりぼっちのアパートの部屋で、三上は何気なく、こう呟いてみた。

「朋子さんのこと、もう諦めるしかないのかなあ？」

すると例のダダ顔の女の面影が、急に暗い表情になった。そしてその顔が自分に向かって、かぶりを振っているように思えてならなかったのである。

ん、どういうことだ？ それとも、単なる気のせい、思い過ごしか？

三上は戸惑った。

もしかして俺に、諦めないでくれ、ってことかな？ というかあんた、一体誰？ 何者？

今更のように訝しがりながらも、三上は気になった。とは言ってもあれ程つれない朋子の所へ、最早行く訳にもいかない。三上は朋子に会わない決心をし、次の日からダイエーへはきれいさっぱり足を運ばなくなった。

一日が過ぎ、二日、三日と過ぎた。三上は勿論だが、突然来なくなった三上に、朋子の方も寂しさを覚えずにはいられなかった。それは息が詰まり、胸が張り裂ける程に。

来なくなったのは、やっぱりわたしのせいかしら？ それとも何か、別の事情？ もしわたしが原因だったなら、わたしの方から冷たくしたのだから、仕方のないこと……。

朋子は懸命に、三上のことを忘れよう、諦めようと努めた。

しかし三上の方はやっぱり会いたくて会いたくて、想いが募った。相変わらず脳裏に浮かぶダダ顔の女の面影も、暗く悲しげで、寂しげなままだった。

会いたい！ 会いたい！ どうしても、朋子さんに会いたい。やっぱり駄目だ、俺は朋子さんが好きだ！

三日坊主。とうとう我慢出来なくなった三上は、再びダイエーに通い、朋子のレジの列に並んだのだった。

(十六)

(十六・一) チャンス到来

(十六・一) チャンス到来

再び現れた三上に、朋子は動揺した。しかも矢張り、自分のレジに……。

どうして、また来たのよ、あの人！

しかしその言葉とは裏腹に、朋子は嬉しくてならなかった。その感情に抵抗する術はない。頬が紅潮した、丸で女学生のように。胸の底から湧き上がる喜びを、抑え切れなかった。

わたしって、何てばかなんだろう。本当にわたしは、この人が好きなんだ……。

朋子はそう悟った。悟りはしたが、でも矢張り三上のことは、諦めなければならない。その思いは変わらなかった。

しかし三上の方は、もう挫けなかった。朋子を諦めようなどとは、もう二度と思わなかった。

きっとこれが、俺の最後の恋だから。朋子さんが……。だから今迄みたいに、簡単に諦めるのだけは、もう止めよう。こうなったら当たって砕けろ。俺なんか思い切り、木っ端微塵に砕け散ってしまえ！

三上は遂に決意した。チャンスあらば、絶対に朋子さんをデートに誘うぞ。毎日毎日そして三上は朋子のレジに並び、チャンスを待った。

しかしチャンスは、中々巡って来なかった。どうしても、他の客や店員の目が気になった。それに相変わらず、朋子の態度はつれなかった。それも正直辛い。改めて見れば、朋子はやっぱり若いし、かわいい。チャンス到来と思っても、いざ声を掛けようとする怖気付き、二の足を踏んだ。

くっそー！ 今度こそ、絶対諦めないぞ。明日こそ、きっと……。

チャンスを逃す度に後悔し、へこたれもした。それでもただひたすら明日に夢と希望を抱き、立ち直る三上だった。

こんな調子で朋子と三上、出会ってから半年が夢のように過ぎていった。季節は既に、秋の中旬を迎えていた。

十一月。そんな三上の前に、遂に絶好のチャンスが到来した。しかも場所はダイエーのレジの前ではなかった。御稜威ヶ原公園であった。

その日は、日本晴れの日曜日。秋深い公園では落葉が舞い、金木犀の天国のような甘い香りが漂っている。昼休み、朋子はいつものように、ひとり公園のベンチに腰掛けランチ。その後のんびりと、読書に耽っていた。そこへぱったりと、三上が現れたのである。

それは偶然だった。日曜日といえば普段の三上は休日で、アパートでゴロゴロしていた。だがその日に限って会社からの要請で、早朝から工場に休日出勤していたのである。作業はあっさりと片付いて、お昼前には終わってしまった。

さて、昼飯どうしよう？ 工場の社員食堂は休み。仕方なく工場を後にした三上は、ダイエーに寄って弁当を購入。その時レジに、朋子の姿は見当たらなかった。アパートに帰って食べようか。しかし良い陽気である。誘われるように三上は、買った唐揚げ弁当を片手に、御稜威ヶ原公園へと足を向けた、という訳である。

公園に入った三上は、空いているベンチはないかと、公園の中をキョロキョロと見回した。しかしどのベンチも塞がっていた。今は葉桜になった桜並木沿いのベンチには、行楽の家族連れやら老人連中。仕方なく三上は、公園の奥へと歩を進めたのであった。

(十六·二) 告白

(十六・二) 告白

どきっ……。

三上はぱたっと、足を止めた。心臓の鼓動が高鳴った。朋子がいるベンチを、見つけたからである。

あっ、朋子さん！

本に集中していた朋子は、まだ三上に気付いていない。

どうしよう……。

咄嗟に三上は、近くの木の陰に隠れた。このまま立ち去れば、気付かれずに済む。でも……。

三上は迷った。そして何とか思いとどまった。

だってこのまま逃げたら、今迄とおんなじじゃないか！ 折角のチャンスなんだぞ、しっかりしろよ！

そして三上は自分でも不思議な位、気持ちが盛り上がるのを感じた。

よし、行くぞ。

武者震い。胸の高鳴りを抑えつつ、三上は朋子のいるベンチへと向かった。

「こんにちは」

丸で敬礼でもするかのように直立不動で、朋子の前に立った三上。

「あっ」

驚いたのは朋子。本から顔を上げた朋子は、突如出現した三上の姿に吃驚仰天。一方三上は沈黙し、朋子のリアクションを待っていた。見ると三上の手には、ダイエーで買ったと思しき弁当が……。

あっ、もしかしてお昼ご飯？

でも公園のベンチは、何処も塞がっている。咄嗟に気を利かせる朋子。

「あっ、どうぞ。ここに座って下さい。わたしなら、もう店に戻りますから」

ベンチを譲ろうとして、朋子は急いで立ち上がった。しかし三上は、そんな朋子を制した。

「いいんですよ。自分だったら、アパートに帰って食べますから。それより……」

アパート？ その言葉に、気を取られた朋子。

どんなアパート？ 一人暮らし？

三上は構わず、言葉を続けた。このチャンスを逃すまい。その意気込みが余程強かったのか、三上は自分でも驚く位、落ち着いていた。先ず鞆の中から名刺入れを取り出すと、その中の一枚を朋子の前に差し出す。一呼吸置いて、それから努めて明るくリラックス。朋子に、こう告げたのだった。

「良かったら今度、デートしませんか？」

「えっ……」

あーあ、とうとう言っちゃった、俺……。

三上はもう、なるようになれ。殆ど、やけっぱち。朋子の方は信じられないという顔で、三上を見つめ返した。

どうしよう、わたし？ とりあえず失礼だから、名刺だけは受け取らなきゃ……。

「あ、ありがとうございます」

朋子は丁寧に、三上の名刺を受け取った。

やった！

三上は秘かに、胸の中でガッツポーズ。一方朋子は、もらった名刺に視線を落とした。

『三上 哲雄』

三上さん。あー、やっぱりこの人、三上さんは、わたしに好意を持っていて、くれたんだわ。うれしい。でも、本当にどうしよう、わたし……。

ふたりは顔を真っ赤にしながら、しばし無言で見つめ合った。ふたりとも、このままでもいい、このままいつまでも、こうしていたい。とすら願った。しかしそれでもなお朋子は、心の中でかぶりを振ったのである。

やっぱり、駄目！ 断らなきゃ……。でも、でも、折角言って下さったのに。きっと、とっても勇気がいった筈……。

結局その場では、冷酷にはなれなかった朋子。自らがフラれた経験もあり、非情になるには矢張り、朋子は優し過ぎた。

「考えさせて下さい」

泣きそうな声で朋子は答えた。そう言うのが精一杯だった。

「勿論です」

三上は小さく、囁くように頷いた。即座に断られなかった！ それだけでも三上にとっては成果であり、今日のところはこれで充分だった。たとえ後日、断られようとも。

「それじゃ今日は、これで失礼します」

丁寧に一礼すると、三上はさっさと、その場から立ち去った。今まで経験したことのない成果に、三上の胸は高揚していた。澆刺としたその後姿は丸で、ひとりの少年のようですらあった。

(十七)

(十七・一) 運命の人

(十七・一) 運命の人

やったぞ、遂に言えた。名刺も受け取ってくれたし、断られもしなかった。考えさせて下さい、なんて、今迄言われたこともなかった。もしかして、これはもしかしたら……。

期待を抱かない人間など、いまい。柄にもなく三上もまた、期待に胸を熱く膨らませた。見上げた熊谷の空は青く、御稜威ヶ原公園に漂う金木犀の香りは、正に天国の薫香だった。

ひとり公園に残された朋子もまた、興奮していた。

三上哲雄さん。哲雄さん。でも、どうしよう……。

ダイエーへと戻る道すがら、頭の中はそのことだけで一杯だった。三上の名刺を手に握りしめ、幾度も見つめ返した。何度も何度も三上の名前を唱えた。ときめき、喜び、そして切なさで胸があふれた。生涯で初めての経験である。

レジ操作中も、帰宅して夏江といる時も、明子の胸の中は矢張り三上で一杯だった。しかし自室に入ってひとりになると、冷静さを取り戻した。机の上に三上の名刺を置き、じっと睨めっこ。腕を組み、朋子は悩んだ。

やっぱり、断らなきゃ駄目。でも、でも折角誘って下さったのに。どうしたら、いいの、わたし？ 三上さん、哲雄さん、てつおさーん……。

その名を口にするだけで、ときめきと切なさの入り混じった感情が、そしていとしさまでもが朋子の胸を襲うのだった。

もしもあの人が望んでくれるのなら。もし本当にわたしのことを、好いていてくれるのだとしたら……。

迷いに迷う朋子。しかし夏江には打ち明けられなかったし、相談出来る相手など誰一人いなかった。そこへ月末、ちょうど俺との面会の日がやって来たのである。

渋谷の俺の病院で、朋子は三上の件を俺に相談した。

「先生。わたし、どうしたらいいのでしょうか？」

「そうだねえ」

「先生の患者さんで、同じような経験をされた方とか、いらっしゃいませんか」

「うん。俺の知ってる所では確か、みんな積極的に、好きな相手だったらね、積極的に交際していったと思うよ」

「積極的に……。そうでしたか」

一呼吸置いて、俺は朋子に尋ねた。
「きみは、その彼のこと、どう思ってるの？ 年の差は、そんなに気にすることもないと思うけど」
「わたしも年のことは、そんなに気にしてません。そうですねえ、わたしは……。先生、わたしはどう思ってるんでしょ？」
「知らないよ。流石にそこまでは、俺にも分からん」
俺は苦笑しながら立ち上がり、窓から渋谷の街を眺めた。
「ええと、そうですねえ。先生だからもう、正直に言っちゃいます。わたしも……。好きでした。その人と初めて会った時から」
すき、でした……。小さな声で囁くように言ったかと思うと、朋子の顔は直ぐに紅潮した。
「先生！ 好きでなかったら、こんなに悩みません」
「そりゃそうだ。もしかしてきみの、運命の人だったりして」
「運命の人ですか」
満更でもなさそうな朋子の表情だった。

俺は朋子の顔の具合をチェックしながら、どうしたもんかと思案した。整形手術して既に二年以上経過した朋子の顔に、特に異変は見られなかった。

整形！
そうだ、整形だ。即座に俺は、朋子に話し掛けた。
「どうだろう。もしもきみが整形を理由に、彼に対して消極的だったり、彼を諦めよう、なんて思っているんだったら……」
「どうしたんですか、先生。いきなり」
戸惑いつつも大人しく、朋子は俺の意見に耳を傾けた。
「だからさ。思い切って整形のこと、話してみたら」
「誰にですか？」
「だから、彼にだよ」
「ええっ」
当然のことながら、面食らった顔の朋子。
「でも、先生……」
「まあ、話を聞いて。それでもし、きみから離れていくような相手だったらさ」
「はい」
朋子はじっと、俺の顔を見つめた。
「きっと、きみの運命の人なんかじゃ、ないんだよ」
「ああ……。確かにそうですね。流石、先生」
朋子は妙に納得した顔で、俺に頷いてみせた。
「分かりました」
そう言って俺の前では確かに、前向きな顔を見せる朋子ではあった。

(十七·二) 子供

(十七・二) 子供

しかし熊谷に戻った朋子が、三上に真実を告げることはなかった。

もし整形の事を打ち明けて、それでも哲雄さんがわたしを受け入れてくれたとしたら……。でもそれで全てが、上手く行くかしら？ もし受け入れてくれたなら、三上さんとお付き合いしたいのは山々だけど……。

朋子は、逸る気持ちを抑えた。その先にある三上と自分、ふたりを待つ未来を、冷静に慎重にイメージせずにはいられなかった。

もし交際が順調にいったら、もし結婚することになったら。そしたら……。そうだ、子供！ 子供のことを、考えなきゃ。ああ、子供かあ、子供……。

子供のことを考えた時、朋子は絶望的な気持ちに襲われた。

子供を産むなんて、わたし怖い……。

そしてやっと今、自分を産んでくれた夏江と健一郎ふたりの心境に、朋子は生まれて初めて思いが及んだのであった。

どうしてふたりは、他の子をつくらなかったのか？ 勿論わたしのような姉がいては、わたしの弟或いは妹となる子が、何かと苦労するのは目に見えている。だから、つくらなかった。でもそればかりではなく、やっぱりまたわたしみたいな子が産まれるのを、ふたりは嫌がった。いや恐れた、のかも知れない。でも今ならそんなふたりの気持ちが誰よりも、わたしには痛い程分かる。だって、わたしだもの……。ごめんなさい、お父さん、お母さん。今迄ちっとも、気付いて上げられなくて……。

わたしだって怖い。もし三上さんと結婚して、そして子供が出来て。もしその子が、わたしと同じ醜い顔だったら……。わたし一体、どうすればいいの？ わたしも苦しいけど、子供も三上さんも一緒に苦しめてしまう。子供にあんなわたしと同じ思いなんて、絶対にさせられない……。

やっぱり産めない。わたしやっぱり、とても産めそうにない……。やっぱり駄目だわ、わたし。ごめんなさい、哲雄さん。

この時点で、朋子の決意は固まった。健一郎、夏江にも、俺にさえ相談してくれないまま。

子供が産めない以上、わたしはやっぱり、独身でいなきゃ、いけないのよ。

ああ、かみさま……。

溢れる涙が止めどなく、朋子の頬を伝った。

三上さんのことは、これでもう本当に諦めなきゃ。もう諦めよう、わたし……。

そして再び整形したことへの後悔が、今更のように朋子の胸を激しく責め立てた。

やっぱり整形なんか、しなきゃ良かった。整形したばかりに、大好きな、大切な三上さんの心を、悪戯に弄ってしまったのだから。そして自分も、こんなに苦しんで。ほんとに愚かなわたし。どうしてわたしは、親からもらった自分の本当の顔を、捨ててしまったのだろう。どうしてあの顔で、生き抜こうとしなかったのだろう。ほんとにバカなわたし……。

整形手術への後悔に苛まれつつ、朋子は三上への返事、デートの誘いを断ることを決意した。

(十八)

(十八・一) 手紙

(十八・一) 手紙

十二月。熊谷の街も、華やかなクリスマスの装い。例年通りダイエー店内にクリスマスグッズが並べられ、弥が上にもはしゃいだ浮き浮き気分にも包まれる。そんな中、朋子の心だけは重く暗い。

朋子をデートに誘って以降、三上は毎日ではなく土日だけダイエーに来るようになっていた。そして恐る恐る朋子のレジに並ぶ。しかしそんな三上に、朋子はなかなか断りの返事を伝えられずにいた。そんな大事なことを、レジのような落ち着かない場所で告げることに抵抗があった。自分の想いを十分に伝えられないし、三上に対しても失礼に思えてならなかった。

そこで思い付いたのが手紙である。文面に精一杯自分の気持ちを綴り、三上に手渡す。これなら失礼には当たるまい。手紙を渡すだけならほんの一瞬で済むし、三上もそれが何かを察知して、直ぐに受け取ってくれるだろう。

朋子は早速手紙を綴り、制服のポケットにしよばせた。が、それを渡すこと自体が出来なかった。これを渡したら、全て終わってしまう。その気持ちが、朋子にブレーキを掛けた。

三上はそんな朋子からの返事を、一日千秋の思いで待ちつつも、決して催促するような素振りは見せなかった。ただいつもひとりの客として、会計が済むのをじっと静かに待つのみであった。そして今日も返事は無しかと残念がりながら、とぼとぼと帰宅した。

そんな三上の寂しげな背中を見つめながら、朋子は焦った。これじゃ申し訳ない、やっぱり早く渡さなきゃ。今度こそ絶対に、渡そう……。毎日気持ちを奮い立たせる朋子だった。

そしてクリスマス前、朋子は遂に手紙を渡したのだった。レジでの三上の、会計終了時。後ろに客がないのを確かめ、迅速に行動した。

「三上さん」

小声で囁き掛けながら、お釣り、レシートと共に手紙を差し出した。指が震えていた。朋子の顔も見ずに、これまた素早くそれを受け取った三上は、さっとコートの内ポケットにしまった。そしてそのまま家まで持ち帰った。途中で、覗き見しようなどという気持ちは微塵も起きなかった。たかが一通の手紙なれど、今の三上にとってはそれほどに重く重要なものであった。部屋に辿り着き、ひとりになってようやく三上は封を切った。

『三上哲雄様

わたしなんかをお誘い下さり、まことにありがとうございました。でも申し訳ありません。やっぱりわたしは、あなたとお付き合いすることは出来ないのです。ごめんなさい。どうかこんなわたしを、お許し下さい。

雪川朋子』

初めてその文面を目にした時、三上は落胆した。

やっぱり駄目だったか。しかし何か気になる。これだけでは、どうしても踏ん切りがつかない。せめて、どうして駄目なのか？ その理由だけでも知りたい。朋子さんの口から、はっきりとそれを聴かねば。俺は彼女を、諦め切れない……。

そんな思いが、沸々と湧き上がるのを抑え切れなかった。という訳で今度は、三上が手紙を書いた。

『雪川朋子様

しつこいようで、すいません。せめて最後にどうしてだめなのか、その理由だけでも教えてもらえませんか。これで本当に絶対に、最後にしますから。

明日のお昼、公園のあのベンチか、その近くで待っています。都合が良ければ来て下さい。

三上哲雄』

そして翌週の土曜日、レジでその手紙を三上は朋子に渡した。十二月になってから朋子はお昼休み、寒さのため御稜威ヶ原公園には行かず、館内の食堂の隅でランチを摂っていた。しかし寒い中、三上は公園で待っている、と言う。

(十八・二) かみさま

(十八・二) かみさま

翌日の昼休み。朋子は意を決し、三上の待つ場所へと赴いた。寒さの為、流石に公園内に人影は少ない。直ぐにお互いに気付いたふたりは、ベンチの前でしばし見つめ合った。

「朋子さん、ありがとう。でも公園はちょっと寒かったですね、ごめんなさい」

「いいえ、三上さんこそ寒いのに……」

ふたりの吐く息は白い。朋子と三上は寒さを堪えながら、否寒さも忘れて言葉を交わした。

「朋子さん。自分は本当に、あなたが好きなんです」

一度断られたと思えば、もはや失うものなど何もない。何と言われようと平気。今の三上の胸に、恥や躊躇などといった言葉はないのである。

「でも、わたしは駄目なんです」

それでも頑なに拒む朋子。

「どうして、ですか？」

三上は冷静に、丁寧に聞き返した。

「どうして、でもです」

朋子の方は、つい感情的になってしまう。

「だから、ぼくの何処が駄目なんでしょうか？ 今後のわたしの人生の為にも、貴重なご意見を、聞かせてもらえませんか」

あくまでも丁寧な三上。しかし朋子は、かぶりを振るのみであった。

「いいえ、三上さんが駄目なんじゃ、ないんです」

「えっ、自分が駄目じゃない？」

驚いた三上はじっと、朋子の顔を見ずにはいられなかった。

「駄目なのは、わたしなんです」

「えっ、どういう……」

戸惑う三上から、朋子は視線を逸らした。顔を上げ、空を見上げた。それは青く澄んだ空だった。

なんてきれいな空なんだろう。こんなに寒い冬の空なのに。朋子はじっと、空を見ていたかった。願わくばあの澄んだ空の青さに、吸い込まれてしまいたいと……。

「朋子さん」

三上の声に、朋子は我に返った。

「あなたの、何処が駄目なんですか？ そんなこと全然ありませんよ、あなたは何も、問題ありませんて」

何も知らず朋子をかばおうとする、三上のやさしさがたまらなかった。

「だから、三上さんの知らない問題です」

「だから、どんな……。もし良かったら、聞かせてもらえませんか。自分なんか、何の力にもなれないかも知れませんが」

しかし朋子は迷った。自分の気持ちなど、三上には到底分かってもらえないと思ったからである。が、このままでは三上も引くに引けまい。朋子は腹を括った。重い口を開いた。

「ですから、三上さん。あなたは本当のわたしを、知らないのです」

「本当のあなたを？」

「はい」

問う三上に頷きながら、朋子は続けた。

「本当のわたしは、とっってもとっっても醜い人間なんです」

「なんだ、そういうことですか」

早合点。三上はほっとため息を吐いた。

「だったら、ぼくだって同じですよ。ぼくだって醜い人間です。あなたの知らない所では、どんな醜いことを考えたり、やっているか分かったもんじゃないから。でも、でも人間なんて多かれ少なかれ、みんな……」

「いいえ、そういう意味じゃないんです。わたしが言っているのは、そんなことじゃなくて……」

唇を噛み締め、俯く朋子。

「じゃ、どんな？」

三上は静かに笑みを浮かべつつ、苛立つ朋子の言葉を待った。朋子は顔を上げた。

「ですから、今あなたが見ているわたしの顔は、本当の……」

「本当の？」

しかしここに来て、朋子は声が詰まった。その先の、整形へと連なる言葉の数々が、声にならなかったのである。

やっぱり、整形したことまでは、告白出来ない。そこまでは、わたし言えません。ごめんなさい、海野先生……。

「ごめんなさい、三上さん」

朋子は泣きそうになるのを必死に堪えながら、続けた。

「とにかくわたしの。いいえ、今のわたしは本当のわたしじゃなくて、偽物のわたしなんです」

「偽物の？」

しかしそんなことを言った所で、三上に伝わる筈がない。しばし沈黙の後、三上はやさしく尋ねた。

「自分の心を偽って生きている、みたいな意味ですか？」

しかし朋子はかなしげな目で、かぶりを振るばかり。何か答えを返したかったけれど、

唇が震えて喋れなかった。寒いからではない、とうとう涙が込み上げて来たからである。

更にやさしく、三上は朋子に語り掛けた。

「やっぱりぼくは、どうしてもあなたが好きなんです。ぼくじゃ、どうしても駄目ですか？」

あゝ……。ますます震える唇。涙を落とすまいと唇を噛み締め、顔を上に向ける朋子に、三上は続けた。

「もしも自分のことが、嫌じゃなかったら。お願いします、もう一度考えて見てもらえませんか？ だって、だってぼくは……あなたを、愛しているから」

あいして、いるから。あ、い、し、て、い、る、か、ら……？ そんな……。

朋子は動揺した。更に続ける三上。

「朋子さん。今日まで自分は、自分の人生は、後悔ばかりの人生でした」

「はい」

「だからもう、後悔したくない。少なくとも、あなたのことだけは、後悔したくないんです。だって本当にわたしは、わたしはあなたを、愛していますから」

愛しています。あ、い、し、て、い、ま、す……。あゝ、またそんな……。ひどいわ、三上さん。あなたは本当に、ひどい人。なんて意地悪な、人なんでしょう。こんなにわたしを、こんなわたしを、苦しめて……。

愛している。愛、という言葉。それが朋子にとっては、生涯で最大の衝撃に他ならなかった。

わたしを、あいしている？ わたしを、あいしています？ こんなわたしを、わたしなんかを……どうして？ こんな、わたしなんかを、あいしている……。うそでしょ、信じられない……。

……かみさま。あゝ、かみさま……。このよのなかに、わたしを、わたしなんかを、あいしてくれる、ひとがいました。かみさま……。

朋子の瞳から、止めどなく涙が溢れた。

(十八・三) 別れ

(十八・三) 別れ

「三上さん、ごめんなさい。今日はもう、勘弁して下さい」

「すいません、まだ工作中なのに……」

朋子の涙に動揺した三上は、ただ朋子の背中を見送るしかなかった。朋子は足早に、三上の前から立ち去った。

神様、わたしを愛してくれる人が、この世に存在したのですね。それなのに、それなのに今日までわたしは、どれだけあなたに文句を言い、あなたをなじって来たことでしょうか。父、母を恨み、世間を恨み、みんなを責めて来たことだろう。あゝ、神様。どうか、こんな愚かなわたしを、どうぞお許し下さい。お父さん、お母さん、ごめんなさい。そしてわたしなんかを産んでくれて、ありがとう……。

白い息吐き吐き、朋子はダイエーへと急いだ。駆け抜ける熊谷の街は、凍り付く冬の世界。けれど今この世界が決して地獄ばかりではなく、天国でもあるのではないかと、生まれて初めてそう思えた朋子だった。祈らずには、いられなかった。すれ違う見知らぬ人、今迄出会い別れた全ての人々、そしてこの世界の幸福を……。

しかしそれでも尚いやそれだからこそ、改めて朋子は、三上には断ろうと誓った。だが言葉だけでは限界がある。自分の言葉では、三上を上手く説得出来そうにない……。

そこで朋子は或る事を思い付いた。そして仕事が終わるや、俺の所に電話して来たのである。開口一番、朋子は俺にこう言った。

「先生。突然ですけど、わたしのフィアンセに、なってもらえませんか？」

「フィアンセ！ おいおい本当に、突然だね」

俺は苦笑い。朋子は三上を諦めさせる為、自分に恋人がいることにしよう、と考えたのである。そしてその相手として、誰あろう、光栄にも俺が選ばれたという訳。

「何だか良く分らんけど、俺の患者さんたちはみんな、なぜか俺にそういう役を頼んで来るんだよね」

「そうなんですか」

朋子の悲痛な決断に俺は敬意を払い、快く陽気に笑いながら引き受けた。恋愛に前向きになった方がいいんじゃない？ そんな説得を、もう朋子に対してしようとは思わなかった。

「あゝだから俺は、いつまでも独身でいなきゃ、ならないんだよ」

「そんな。先生、ご冗談を……」

朋子も明るく、笑い返した。そんな健気な朋子に、俺はこう付け加えた。

「もしもいつかきみが、この事後悔するようなことがあったら、その時は、俺を恨み給え」

「先生……。ありがとう、ございます」

今にも泣き出しそうな朋子の気配に、さっさと俺は電話を切った。

「じゃ、ね」

「はい、本当にありがとうございます」

一方三上は、朋子に対して、どうすべきか迷っていた。ダイエーに行った方が良いのか否か？ しかし季節は冬。クリスマス、そして年の瀬である。会社は年末年始の休暇に入れど、孤独な三上に行く場所などない。つつい寂しさの余り、ダイエーへと足が向いた。そこでばったりと、昼休みの朋子と鉢合わせしてしまったのである。

戸惑う三上に、けれど朋子の方から積極的に話し掛けていった。

「三上さん。良かったら、ちょっとお話しが……」

「何でしょう」

三上は黙って、朋子の後に付いていった。寒さの中再びふたりは、御稜威ヶ原公園へ。公園に着くと、朋子は躊躇うことなく用件を告げた。

「三上さん、実はわたし……。本当に申し訳ありません。今迄黙っていましたが、わたしにはもう、フィアンセがいるんです」

フィアンセ？

「そうなんですか……」

ショックの余り、三上はそう答えるので精一杯だった。

「こういう人なんですけど……」

そして朋子は以前もらった俺の名刺を、三上の前に差し出した。

「どうぞ」

「頂いていいんですか？」

「はい」

「では」

俺の名刺を受け取ると、三上はじっと見入った。そこには『美容整形外科』とも明記されている。もしかしてその時朋子は、自分が整形したことを、やんわりと伝えたかったのかも知れない。しかし三上に、そんな余裕は無かった。ただ呆然と俺の名刺を見つめ、いつしかその目にじわっと涙が……。やばい、堪えなきゃ。三上はぐっと唇を噛み締めた。

あゝ、愛する朋子さんに、男がいたなんて……。ショックだった。しかも相手は医者かあ。ため息しか出なかった。でも、やっぱりなあ、という想いもあった。だってこんなに素敵な女性なんだから、恋人位いるだろ？ あーあ、初めっから、駄目だったんだ……。

「分かりました」

三上は無理矢理笑みを作って答えた。

「良かった。これで心置きなく、あなたを諦められます」

「三上さん……」

朋子の方とて、何も言えなかった。その目にも涙が、込み上げていたからである。

でもこれで、良かったのよ。三上さんの為にも、わたしの為にも。朋子は必死に、そう自分に言い聞かせた。

「どうかその方と、幸せになって下さい。それじゃ、お元気で」

「三上さん！」

呼び止めようとする朋子の声を振り切って、三上はダッシュ。齒を食いしばりながら、朋子の前から姿を消した。

これにて朋子と三上の淡い恋は、終わりを告げた。ふたりのかなしみをいたわるように、その夜熊谷の街には、雪が降った。純白の雪が……。

仕事を終えた朋子は、帰宅すると机の引き出しから或る物を取り出した。それは、宝物の蟬の抜け殻。中学の時朋子を救ってくれた少女、智子と思って、ずっと大事にして来たものである。

「ごめんね、智子ちゃん」

でも今朋子はそれを、三上として、掌にのせた。そしてひとり御稜威ヶ原公園へと向かった。場所は、三上が朋子をデートに誘った、あのベンチの前である。

「さようなら、三上さん」

白い息でそう蟬の抜け殻に囁くと、朋子はベンチの後ろに回った。そしてそこに立つ一本の桜の木の枝に、蟬の抜け殻を引っ掛けて置いたのである。朋子が去った後も雪は降り続き、舞い落ちる雪が、いつしか蟬の抜け殻を白く白く覆い隠した。

(十九) 面影にふる雪

(十九) 面影にふる雪

年が明け、熊谷の街は幾度か雪になった。そして雪が融け、春が訪れた。しかし季節は巡っても、三上を失った朋子のかなしみと後悔が融け去ることはなかった。

会いたい、会いたい、あの人に会いたい。こんなにわたしは、あの人が好きだったなんて。今迄こんなに誰かを、愛したことなんてなかった、愛したことなんて。本当にわたしはあの人を、愛していたんだわ。本当に、これで良かったのかしら？ あんな別れ方、終わり方で……。

もういない三上を想い、朋子は幾夜となく泣き明かした。あれから二度と、三上が朋子の前に姿を現すことはなかった。冬の間も朋子は、幾度か御稜威ヶ原公園に足を向けたが、三上の姿を見ることは叶わなかった。三上会いたさの余り、三上が勤務するニコンの熊谷工場の場所を地図で探し、直ぐ近くまで歩いたことすらあった。しかし我に返って道を引き返す、そんなことの繰り返しだった。

今更こんなことしたって、何にもならないのに。本当にわたしって、ばかね……。

会いたくて飛んでゆきたい衝動を、必死に抑えるしかない朋子だった。それでも朋子は休むことなく仕事をし、健気に一生懸命働いた。そんな朋子の唯一の支えは、御稜威ヶ原公園の桜の木の枝につかまっている、あの蟬の抜け殻だった。

あの抜け殻が、誰かに取られたり、風に吹かれて落ちたりせずに、ちゃんとあの場所にくれたなら。そしたらもしかすると、また三上さんに会えるかも知れない……。

そう思うことで、辛うじて生きる望みをつないだ朋子だった。夜誰もいない公園の桜の木の下で、蟬の抜け殻をじっと見つめながら、ひとり朋子は三上を慕い想った。

でも本当は、忘れられるものなら、早く忘れてしまいたい……。とも思う。冬の間幾度となく雪が降り積もり、雪に覆われた蟬の抜け殻。白い息吐き吐き、その姿を見つめながら、朋子はこう思った。

……やがてこの純白の雪が融ける時、雪を被った蟬の抜け殻も、雪と一緒にとけてゆけばいいのに。何もなかったかのように、雪と一緒にとけてゆけばいい。そしたらわたしも、三上さん、三上哲雄さん、あの人のことを、忘れられるかも知れない。だから……いとしかったあの人の面影にも、雪が降り積もればいいのに……。

面影……。

わたしの胸の中に宿ったあなたの面影は、確かに本当のあなたなのに。そしてこんなにもわたしを、いとおしくさせてくれるのに。なのに、ごめんなさい、哲雄さん。あなたの胸に残されたわたしの面影は、偽物なの。あなたの心の中にいるわたしは、偽物な

んです。あなたにも本当のわたし、本物のわたしの顔、ほんとうのわたしの面影を思い浮かべたり、思い出したりして欲しかった。けれどそれはとても辛く、残酷なことだから……。やっぱりわたしたちは、こうなるしかなかった。やっぱり、こうなった方が良かったのよ。だからごめんなさい、哲雄さん。どうか、こんなわたしを、わたしのことを、いつか、許して下さい……。

春が過ぎ、夏が訪れた。熊谷は『日本一暑い街』とも称される、国内でも有数の猛暑の街である。そんな暑さの中でも、朋子はやっぱり三上を忘れられずにいた。時は過ぎれど、想いばかりが募った。そして三上へのいとしさにとうとう耐え切れなくなった朋子は、決意する。

ここにいたら、いつまでもあの人のことが甦ってしまう。

三上を忘れる為に、その為には、三上との思い出の地である、この街から離れるしかない。そう決めたら、朋子の行動は速かった。ダイエーにも夏江にも体調不良を理由に、仕事を辞めた。そして慣れ親しんだ熊谷の借家を引き払い、朋子は夏江と共にさっさと、東京に戻ってしまったのである。

(二十)

(二十・一) 突然の電話

(二十・一) 突然の電話

一方、三上はどうしていたのか？ 三上とて、朋子が忘れられずにいた。そして朋子同様早く忘れる為に、熊谷から離れたいと願っていた。しかし仕事の都合上、まだしばらくは出張を続けなければならなかった。渋々工場と住しきアパートとの往復をする日々であった。

そんな中、突如三上が姿を現した。と言っても朋子の前にはない。ダイエーや御稜威ヶ原公園に現れた訳ではなく、実は俺の前に現れたのである。

朋子との恋が幕を閉じてから半年後のこと。だから七月夏、先ず俺の病院に一本の電話が掛かって来た。

「わたしは、三上哲雄と申します。海野先生は、いらっしゃいますか」

初めて聞く男の声に、俺は一瞬戸惑った。三上？ はて、誰だっけ？ セールスか何かかとも思ったが、遠慮がちな物言いに俺は好感を持った。

「わたしが海野ですが」

「あっ、海野先生ですか。これは、初めまして。突然の電話をお許し下さい。実はわたしは、雪川朋子さんの……」

俺ははっとした。直ぐにピンと来た。あゝ、彼か。朋子と恋をした相手。

「いきなりこんな事をお願いするのも、何なんですが……。もしよろしければ、お会いして、少しお話し出来ないかと」

「話ですか」

「はい、決してお時間は取らせませんから。勿論、海野先生が雪川さんのフィアンセでられることは、存じております。もしかしたら、もうご結婚までされてるかも」

俺は可笑しいのを堪えて答えた。

「いいえ、結婚はまだしてませんよ」

「あゝ、そうでしたか。大変失礼しました。お話しと言うのは」

「はい、どういった」

「ええ、何て言うか。決して嫉妬とかではなくて、わたしの今の正直な気持ちを聴いて頂きたい。聴いて頂けたら、有り難いなあと思ひまして……」

「そうですか、では分かりました」

電話口からでも伝わって来る三上の生真面目さに、俺は会うことを快諾した。どんな男なのか、興味もあったしね。まさかいきなり、刃物で襲って来たりもしないだろう……。

早速翌日、日曜日の午後、道玄坂の喫茶店『シャングリラ』で三上と初対面した。予想通り見た目も、如何にも生真面目そうな男だった。俺は親しみを込めて言った。

「わざわざ遠くから、すまないね」

「いえいえ。先生こそお忙しいのに、ありがとうございます。わたしなら、週末はこっちに戻っていますから」

「そうなんだ」

三上の方も、恐らく俺が思ってた以上に年配だったのと、偉そうにしてないのとで、親しみを覚えてくれたようだ。そんな訳で俺たちは直ぐに打ち解け、リラックスして会話に臨むことが出来た。

「ええ、あっちにいても楽しいことなんて、何もないですから……。あゝすみません、いきなり愚痴っちゃって」

「いいんだよ、遠慮しないで。今日俺がきみと会ったのは、きみの正直な気持ちが、知りたかったからなんだからさ」

しかし成る程見た目は真面目そうだが、逆に言えば取り柄はそれだけ。年齢相応の冴えない中年男の三上である。今更ながら、どうして朋子がこんな男に惚れたのか？ 全く恋とは不可思議なもの、と言わざるを得ない。秘かに感心している俺に、三上も気軽に応じる。

「そう言って頂けると、助かります。それじゃ遠慮なく、正直に言わせてもらいます」

「あゝどうぞ」

「この半年間、本当に自分は苦しみました。そして今日までずっと、抜け殻のように生きて来ました」

「そうか。抜け殻か」

以下、三上との会話を記す。と言っても、殆ど彼の独白に近いものなのだが……。

(二十・二) 人生は儚き夢幻

(二十・二) 人生は儚き夢幻

「朋子さんを失った自分は、本当に抜け殻。いや、ただの塵屑です」

「そこまで言わなくても」

「いいえ先生、言い過ぎでも何でもありません。ほんとにただの屑ですから、自分は」

「ま、本人のきみが言うんなら」

俺は苦笑い。

「でも先生。そんな自分が朋子さんと出会えた。ほんと、夢のようでした。だってそれまでの自分の人生なんて、ただの冗談、悪夢だと、ずっと思っていましたから。だから朋子さんと会えて嬉しかった。本当に嬉しかったなあ、あの時は……。ほんの一瞬でしたが、自分も人並みに、輝けるような気がしました。今となっては、本当に愚かな勘違いでしたけど」

「三上くん……」

「それだけに先生。朋子さんと会えなくなってからは、苦しかったです、ほんとに。何て言っているか……」

三上はしばし沈黙し、言葉を探した。

「余りの苦しさに、誰かに、いっそ一思いに殺してくれって、本気で頼みたい位でした。何が苦しかったかっていって……。さびしさとか、かなしいとか、そういうのは我慢出来ました。だってそれまでの俺の人生、そんなんぼっかでしたもん、自慢じゃないけど。だけど、朋子さんへの……いとしさ」

「何？」

最後の言葉が上手く聴き取れず、俺は問い返した。

「朋子さんへの、いとしさ、です」

「あゝ、いとしさか」

「はい。それだけは、だめでした」

「そうか」

「朋子さんのことがいとしくて、いとしくて……。もうどうにもならない位、朋子さんへのいとしさで、胸が潰れそうでした。堪えても堪えても、堪え切れずに、何度ダイエーに足を向けたか。でもその度に踏ん張りました。また朋子さんに会ってしまったら、このいとしさは、ますます大きくなってしまいます。丸で麻薬か、覚醒剤みたいに。そんなふうに思ったんです。だからここで、踏み止まるしかない。そう自分に、言い聞かせました。苦しかったです、胸が張り裂けそうになりました。先生」

「うん」

「本当に心というものは、胸は、痛むものなんですね。でも何とか堪えていると、涙を流す度……。ええ、情け無いですけど、何度も何度も泣きました。すると朋子さんへのいとしさが、段々と薄れてゆきました。不思議ですね、涙にはそういう力が、あるんですね」

「そうかも知れんねえ」

「先生。朋子さんへのいとしさ。それは自分にとって、雪のようなものでした」

「雪？」

「はい。どれだけつかまえても、つかまえても、つかまえた途端、自分の掌の上でしゅーっと融けてしまうんです。どれだけ手を伸ばしても、伸ばしても、届くことのない、いとしさでした。でもそんな朋子さんのいとしさを、味わえただけでも、朋子さんのいとしさを、たとえ一瞬だけでも、この胸にい抱くことが出来た。それだけでもう、自分としては満足です」

「満足かあ」

「はい、先生。そして人は、思い出す苦しさから逃れる為に、忘れることを、本能的に選ぶものなんですね」

「忘れることを」

「はい、先生。自分も、何度も何度も忘れました、朋子さんのことを」

三上は苦笑いを浮かべながら、唇を噛み締めた。

「忘れる度、また思い出し、思い出しては、また忘れ。そうやって、少しずつ思い出も薄らいで。泣いても泣いても仕方がないのだ、と悟った時、悟った人間は、あとは淡々と静かに穏やかに、諦めるものなのだ、ということ、諦めるということ、初めて知りました」

「諦めることを……」

「そうです、先生。自分はもう完璧に、朋子さんのことは、諦められました。今はもう彼女に対して、感謝の気持ちしか有りません。本当です、先生」

「うん」

「これでやっと、朋子さんに本当にさようならが言えそうです。そしてこれでやっと自分から、朋子さんを解放して上げられます。彼女を、自由にして上げられた、と思います」

「自由にねえ……。でもこれで、良かったのかなあ？」

割り切れない俺に、三上は躊躇うことなく答えた。

「良かったんですよ、先生。これで」

「本当に？」

「ええ。我ながら、自分でも少しは、人間的に成長出来た。そんなふうに思ってます」

「成長ねえ」

「はい。朋子さんからもらった痛み、このいたみを大切に、これからは他人の痛みに目を向けながら、生きてゆこうと思います」

「偉いなあ、三上くん」

「ありがとうございます。でもみんな、朋子さんから頂いた宝物です」

「宝物かあ」

俺は感心し、感嘆するばかりだった。

「はい、先生。人生なんて所詮、夢幻じゃないですか」

「夢幻？」

「そうですよ、先生。夢幻です。朋子さんと過ごした日々、あの頃は短くはあったけれど、その中で自分は本当に幸せでした。でももう何ひとつ、帰っては来ません。全て夢幻の如くなり、ですよ、先生。ほんとに儂い。儂いって漢字は、だから人に夢って書くんですね」

「あゝ成る程。確かに言われてみれば、そうだねえ。今迄気付かなかったよ」

感心する俺に、しかし三上が次に言ったことは、俺を驚かすに充分だった……。

(二十・三) 再び、運命の人

(二十・三) 再び、運命の人

「先生、実は朋子さんとのことで、ひとつだけ不思議なことが有るんです」

「不思議なこと？」

「ええ。朋子さんと出会ってから、ずっとなんですけど」

「どんなこと？」

「はい、先生。普通、人は恋をしたら、自分の頭の中に、相手の顔が浮かんで来たり、相手の顔を浮かべたりするじゃないですか」

「あゝ」

「でも自分は朋子さんと出会った日から、なぜか朋子さんじゃなくて、何ていうか、別の女の人の顔が、浮かんで来るようになったんですよ」

「別の女の人？」

「はい。それも同じ人物、特定の一人の顔、なんですよね」

「へえ、どういうこと？ なんか良く分からんね、誰の顔なの？ きみの知ってる人？ 過去に会った人とか？」

「いえいえ、全然違います。一度として見たことも、会ったこともありません。だってですね、先生。その人の顔って、とっても特徴的な顔してるんですよ」

「特徴的な？ 例えば、どんな？」

「先生は、ウルトラマン見てましたか？」

「ウルトラマン……」

どきっ！ まさか……。俺の脳裏に、悪い予感が走った。

「ああ。全部じゃないけど、結構見てたかな」

「じゃ、ご存知ですかね？ ダダって星人」

「ダダ……」

ごくん。あゝ、やっぱり。俺は生唾を呑み込んだ。そして冷や汗が……。もしかして、ダダ星人の顔、つまり整形前の朋子の顔が、浮かんで来るとか……？

俺は焦った。しかし俺の動揺をよそに、三上は冷静に続けた。

「そのダダみたいな、顔なんです。俺の脳裏に浮かんで来る顔って」

「うっそ……」

思わず俺は、声を上擦らせた。予想的中！ しかし、まずい。更に冷や汗が……。

「一体誰なんでしょうね、この人？」

「さあ。俺に聞かれても……」

俺は、しらばっくれた。続ける三上。
「なんで俺の脳裏に、浮かんで来るんだろうなあって。ずっと俺、不思議で仕方ありませんでした」
「そうだろうね。でも一体誰なんだろう、その女」
白々しく、あくまでもしらを切り通す俺に、しかし三上はこう続けたのだった。あたかも俺の心を見透かしたかのように、皮肉っぽく……。
「先生は、整形手術をなさるんですよね？」
「あゝ、そうだけど」
俺は努めて冷静に答えた。もしかして、この男、朋子が整形したことに気付いているか、或いは疑っているのかも知れん。もはや、居直るしかないか？ しかし朋子は、彼には知られたくない筈。だったら俺の口から、白状する訳にもいかないし。どうすれば……。しかしながら、俺の心配は杞憂に終わった。なぜなら、それ以上三上が、整形の話題に触れることはなかったからである。だがその代わり彼はこう言って、別の意味で俺を驚かせた。

「もしもですよ、先生」
「あゝ」
「もしも仮に朋子さんが、その女性、そのダダみたいな顔の女性だったとしても。朋子さんの顔が、そういう顔、だったとしてもですよ」
「うん」
顔きながら俺は、三上の顔を、その目をじっと見つめた。何が言いたいのだ、この男？
「わたしは、わたしはですね。朋子さんを、好きになったと思います」
「えっ、三上くん……」
俺は絶句した。そしてまっ直ぐに俺を見つめる彼の瞳から、視線を逸らすことが出来なかった。
「だって、先生。運命って、そういうもんでしょう？ 運命の出会いとか、運命の人って」
運命？ 運命かあ、運命！
俺は以前自分が、朋子に言った言葉を思い出さずにはいられなかった。

「それでもし、きみから離れていくような相手だったらさ……きっと、きみの運命の人なんかじゃ、ないんだよ」

改めて俺は、目の前の三上の顔を見つめた。
「三上くん。きみは……」
なんて、ことだ。
そして朋子の顔が、俺の脳裏にさっと去来した。どっちの顔かは分からない、ダダ顔か、それとも今の彼女……。兎に角朋子に、今の三上の言葉を聴かせたい。俺は切にそ

う願った。しかし残念ながら、今ここに、朋子はいないのだ。

「きみって男は、三上くん。きみは本当に、彼女のことが好き……」

しかし三上は、俺の声を遮った。

(二十一) 終章

(二十一) 終章

俺の声を遮った三上は、こう言った。

「先生。本当は先生、朋子さんのフィアンセじゃ、ないんでしょ？」

「えっ」

あゝ、見抜かれていたか……。もはや、これまで。俺は潔く認めた。朋子も、もう怒りはしないだろう。

「そうだよ、きみの言う通りさ。流石だね」

俺は陽気に笑って答えた。

「いやあ、先生。やっぱり分かりますよ、なんとなく」

三上も笑顔で返した。怒ってはいないようで、俺は安堵した。

「そうだよなあ」

「でも自分はその時、朋子さんから言われた時、信じた振りをしました。だってそうでもしないと、朋子さん、安心出来なかったでしょう？ こんなお芝居までして、自分を諦めさせようとする朋子さんの気持ちを、壊したくなかったんで……」

「そうだったのか。いやあ、まいったな」

俺はまた、三上という男に感心した。

「でもどうして朋子さんは、そんなにまでして、俺を諦めさせようとするんだろう？ そのことばかり、自分は考えていました。なぜ、どうして？ どうしてそこまでして、朋子さんは俺を、拒むんだろう、って」

「いや！ 違うんだよ、三上くん」

つい俺は大声になった。

彼女は決してきみを、拒んでなどいないのだ。彼女はね……。俺はもう黙ってなど、いられなかった。朋子の為に、やっぱり言わなきゃ。

「きみを拒んだ訳じゃないんだよ、彼女は」

「先生」

驚いた三上は、じっと俺の顔を見つめ返した。

「彼女は、雪川朋子はね。本当はきみを、三上哲雄という男を、愛……」

しかしまたしても三上は、俺の言葉を遮った。

「先生」

そしてそのまま俺は、沈黙するしかなかった。なぜならその時、三上は泣いていたから。

「お願いします。それ以上は、もう言わないで下さい」

「しかし、三上くん」

「頼みますから。その後の言葉は、先生の胸の中に、しまっておいて下さい。でなければ、自分は後悔……後悔、後悔」

「三上くん」

「実際、先生。自分は後悔ばかりの人生でした。よく人は、悔いのない人生を送ろう。なんて言うじゃないですか。でも四十五年生きて来て、自分の人生なんて、後悔だらけなんですよ。まったくお恥ずかしい。ですから、もうこれ以上後悔は、増やしたくないんです。なので、どうか先生、もうこの辺で、勘弁して下さい」

後悔……。しかし今頃、朋子もまた同じように後悔に、苛まれているのではないか。そう思うと、俺は胸が張り裂けるようだった。

三上が『シャングリラ』を出た後、俺は店の公衆電話から速攻で、朋子に電話を掛けた。そして伝えられる限り忠実に、三上の言葉を朋子に伝えた。朋子は……電話の向こうで、朋子が泣いているのが分かった。

「何かあったら、いつでも、相談に乗るからね」

そう言って、俺は電話を切った。

俺と別れてひとりになった三上は、何を思ったのか、東京のアパートには戻らず、その足で熊谷に向かった。渋谷から上野まで出て、そのまま高崎線に飛び乗った。朋子の話を俺にしたことで、朋子に会いたくなっただけかも知れない。

熊谷駅で降りると、三上はまっ直ぐダイエーに向かった。しかしそこに朋子がいる筈もない。三上は朋子がダイエーを辞めたことも、熊谷の街を去ったことすらも知らないのだ。悲嘆する間もなく、三上は御稜威ヶ原公園へと足を向けた。朋子と最後に会って以来のことである。

三上はあの、朋子をデートに誘ったベンチの前に立った。夕暮れ時の風が、涼しげに三上の頬を撫でていった。ふと三上の目に、何かが映った。三上は恐る恐る、ベンチの後ろの葉桜の木に近付いた。そして、その何かがある、一本の枝に目を向けた。それは蝉、朋子の蝉の抜け殻である。

三上ははっとした。しばし無言で眺めた後、そして三上は蝉の抜け殻に向かって、こう、囁くように呼び掛けたのである。

「朋子さん」

すると丸でその声に答えるかのように、何処からか女の声がした。

「三上さーん」

三上が驚いて振り返ると、公園の入り口に、朋子が立っていた。

(了)

終わりに

終わりに

お読み頂き、ありがとうございます。

面影にふる雪

著 SKY BLUE

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
